メダロット２　～クワガタversion～

鞍馬山のカブトムシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メダロット２　～クワガタｖｅｒｓｉｏｎ～

【Ｎコード】
Ｎ５６８０Ｖ

【作者名】
鞍馬山のカブトムシ

【あらすじ】
僕は天領イッキ、小学三年生。
一学期が始まって間もないある日、ママにレトルトカレーを買ってくるよう一万円を手渡されて、コンビニに行くと、ヒカル兄ちゃんが叱られていた。僕はヒカル兄ちゃんの横、インスタント食品のコーナーを人差し指で指した。すると、何を勘違いしたのかヒカル兄ちゃんは…。
ひょんな勘違いから、メダロッターとなった少年イッキとメダロットたちの笑いと涙（？）と友情の物語、ここに始動！

【メダロットとは？】（前書き）

概ねカブトバージョンと展開は同じですが、入手メダル・パーツ、一部のストーリー展開が異なったりします。

【メダロットとは？】

【メダロットとは？】

２００１年度に発売されてから、２０２２年度まで広く世界の市場を席巻する日本独自の完全オリジナルロボット技術の最高峰、それがメダロット。

メダロットはコンピューターの頭脳ではなく、「メダル」を頭脳として動く、これまでのロボット学の常識を打ち破ったロボット。メダルで動くロボット、だから略して「メダロット」

メダロットは「ティンペット」と呼ばれる骨組みをベースとして、様々なパーツを組み合わせることにより、無限の力を引き出すことができる。

メダロットの利用範囲は子供の遊び相手に止まらず、医療、果ては軍事利用にまでメダロットは普及している。

また、一部「レアメダル」という物があり、現在メダロット社（株）から発売されているメダルの殆どは、この幾枚かの「レアメダル」をコピーして製造されている。と、インターネットではこのような情報が流れている。

プロローグ　きっかけは勘違い

キーン、コーン、カーン、コーン！
御神籤町（おみくじまち）ギンジョウ小学校始業式の終了を告げるチャイムが鳴る。
形式ばった校長先生の長い挨拶に、生徒一同はやや疲労気味。
三年生の列にいるちょんまげ頭の少年も、周りの生徒と同じく校長の挨拶が終わったことに、ほっと胸を撫で下ろしていた。
僕は天領イッキ、小学三年生。歳は九歳。自分でいうのも何だけど、チョンマゲ頭を除いて、これといった特徴が無い。更にメダロットを持ってないという点が、僕の存在の薄さに拍車をかけている。まあ、それというのも…。
イッキ少年の自己紹介はまだまだ続きそうなので、ここで打ち切ろう。それに、自己紹介は最初の一行部分だけであり、後半はメダロットに対する願望と、メダロットを持ってない愚痴と決まっているから。

教室で暑苦しいオトコヤマ先生のホームルームも済むと、イッキはいつも通り靴箱に向かい、下履きから上履きに履き替えて、帰宅しようとしたら、
「イーッキ！」
と、元気一杯な女の子がイッキの名前を高々と叫んだ。
イッキは声の主のほうを振り向くと、パシャ！という音と共に眩しい閃光が目を襲ったので、イッキは立ちくらんだ。
「何するんだよ、アリカ」
イッキは閃光を放った少女に文句を言った。イッキにそう文句を言われても、アリカと呼ばれた少女は悪びれる装い全く見せず、ただ、ニコニコと屈託ない笑みを浮かべている。

肩辺りでボーイッシュに切り揃えた茶色がかった髪、ぱっちりくりくりとした二重の瞼に、意外にも整った目鼻立ち。少女は純白のワンピースやドレスなどがとても似合いそうだが、白シャツの上に着込む機能重視の紫のオーバーオールの服装と、屈託ない笑みの裏で相手を抜け目なく観察しているような目が、無言で周囲に少女が「女の子らしい」服装を拒んでいるかのような印象を与える。

アリカは見せつけるように、イッキの眼前にカメラを突き出したので、イッキは思わず顔だけ一歩退いた。

「イッキ！ねえ、これ見て！貯めた小遣いで変えたのよ」

この子はアリカ、僕の幼馴染。六歳の頃、父親にカメラを貸してもらい、撮った写真を両親に褒められたことがきっかけで、ジャーナリストを志すようになった。初めはジャーナリストという響きがかっこいいから憧れていただけのようだったが、去年、偶然にもスリ師の犯行の瞬間を撮るという、正に決定的なジャーナリズムな場面を撮ったことにより、単なる憧れから、本格的にジャーナリストを目指すようになった。

男っぽく姉御肌のアリカ、そのアリカにイッキはよく引っ張り回される。

「何を変えたんだよ？」

「んもう！わかんないの？ほら、レンズよ、レ・ン・ズ！」

「レンズが変わって、どうしたっていうの？」

「はあー。あんたねぇ、メダロット以外のこともちょっとは興味持ちなさいよ。前のレンズは古くて、写りに何かしら不調があったけど、今度のは違うわよ。望遠・広角の二種類対応、微妙な光量調節も可能で、状況に応じて撮影が可能。まあ、瞬間的なところを撮るのが難しいけど、そこはジャーナリストの感と腕でカバーするわ」

「つまり、何が言いたいわけ？」

「だから！バージョンアップした私のニューカメラ被写体第一号として、あんたを撮ってあげたのよ。ちょっと嬉しいとか思わない？」

そう言われても、素直に喜べない。不意打ちな状況で撮られたの

で、間の抜けたポーズに顔が写っていることが容易に想像できるからだ。
「じゃ、これで…」
この適当にあしらう感じの言葉が良くなかった。背後のアリカが不快のオーラを発していることを感じたイッキは、まるで地雷原を歩くかのようにそそくさと学校から出た。
イッキが去った後、アリカはぼやいた。
「…せっかく、記念として撮ってあげたのに…」

イッキの家は、ベッドタウンである御神籤町にはよくある二階建ての家に住んでいる。周囲の家と異なる点は、屋根が赤く塗られているぐらい。
イッキは帰宅すると、早速、母親のチドリから、今晩のお献立レトルトカレーを買ってくるよう言いつけられた。ママの手には、はたきが握られていた。
「ママ。僕、今帰ったばかりなんだけど」
イッキは両親のことをママ、パパと呼ぶ。
「そんなこと言わずに行ってきてちょうだい。私はお掃除で忙しいの。ちょうどお金も崩したいしところだったし。今回は大サービスとして、お釣りの二百円をあげるから」
イッキママことチドリは、髪型からして何となくアリカに似ている。だが、アリカと違ってこちらは女性を意識しており、髪の毛も緩やかにウェーブがかかっている。
イッキママはご近所でも美人な良妻として評判である。大概の子供は親が褒められるのを聞いても、「何で、あんなおばさんやおじさんが褒められるの？」と思うが、いざ、自分の親の良い噂を聞くと、やはり嬉しいものである。
帰ったばかりで面倒臭いが、二百円の餌に釣られて、イッキはママの一万円を半分に折って短パンのポケットに突っ込むと、近所の

コンビニへと出かけた。

歩いて十分程度のところ、そこにセブントゥエルブのコンビニがある。因みにメダロットは大型デパートばかりではなく、イッキが産まれる少し前から、コンビニでも売られるようになった。

普通、コンビニといえば、入店したら店員が笑顔で「いらっしゃいませ」と挨拶するものだが、イッキが入店すると、挨拶ではなく怒号が叫ばれていた。

バッカもーん！給料ドロボー！間抜け！消費税三十パーセント人間！

店長の口から叫ばれる大量のお叱りの罵声が、若い店員を襲う。若い店員はロン毛で、額のところで髪を大きく左右に分けている。

店長にこっぴどく叱られている彼の名は、アガタ・ヒカル、大学生。彼はどうやらあまり真面目に勤務するほうではないらしい。彼のシフトは週三日分のようだが、三日に最低でも一度は店長から厳しくお小言をもらっている様子を目撃される。

店長は温厚な人柄だが、ヒカル店員の仕事ぶりには目に余るものがあるようだ。

今日は特に激しい。

いつもなら、店長は耳打ちでお小言を言うのだが、客が入っても気にせず怒号を叫ぶのは珍しいことだ。カウンターの店員も手をこまねいている。

「誰が！だ・れ・が！こんな高いおニューパーツを仕入れろと言った！これの旧式型番を一体注文しろと、三度も言ったぞ」

「店長、それも三度め」

ああ、どうやらヒカル青年は雰囲気や状況を読み取れないタイプの人間のようだ。自らの手で油を注いだヒカル青年、店長のお説教もいつもより長く、イッキも呆然とそれを見つめるだけ。

「一か月の間、お前の時給は九百五十円から八百五十円だ！それと、何としてでもこれを片付けろよ」
反省しているように見えて、内心どこ吹く風だったヒカル青年だが、最期の台詞はズシンときたようだ。店長はそれに気づいたのか、鼻を鳴らすと、レジのお姉さんに「済まんが、今日は君とあいつで頑張ってくれ」と言い残して、店から出た。
横目でちらとイッキを見て、片手できまり悪げに頭を掻くヒカル。彼の右手には、ＫＷＧ型ヘッドシザーズのパーツ一式が入った箱が抱えられていた。イッキは週刊メダロットを毎週欠かさず見ているので、メダロットの知識だけなら、誰にも負けないつもりだ。
ヒカルが持っているヘッドシザースは、現在市場で出回っているヘッドシザースとは異なる。旧型のヘッドシザースの配色は主に白色なのに対し、新型のヘッドシザースは薄紫の配色が占める。旧型と異なるのは配色だけでなく、装甲全般に両腕の攻撃力などが改良された。
シアンドッグに並ぶ、メダロットの最有力候補の商品にこのヘッドシザースが名を連ねている。
「まいったな～…。試しにあいつに着けてやろうと思ったのに…」
誤魔化すように頭を掻くをヒカルをよそに、イッキはヒカルの横、インスタント食品コーナーの棚を指した。
「あの、そこの…」
もしも、イッキがこのとき叱られたばかりのヒカルを全く気遣うことなく「そこのレトルトカレーを買いたいです」とでも言えば、イッキは無事にカレーを手に入れることができたはず。
ヒカルはイッキ少年を見た。イッキ少年が指指す方向は自分の右手に抱えられている物、片手には、一万円札が一枚握られていた。ヒカルは目を輝かせて、イッキの元に近寄った。
「はいはい、わかりました！これですね、これ！いやー、これに目を付けるとは、以前から思っていたけど、君は本当に目の付け所がいいね」

目の付け所がいいねと言われたが、メダロットはまだ一度も購入したことは無い。
「いや、だから、そこの…」
「分かっている、分かっている。初めからこんな高いパーツを扱えるかどうか不安なんだろ？大丈夫、人間その気になれば、何でもできる」
「えーとですね…僕は…」
「よーし、今なら出血大サービスとして、ティンペットもお付けしちゃおう！今、こんなイケメンメダロットを近所に持っているのは君だけになる。きっと、目立つよー？」
断ることもできた。しかし、今この機会を逃したら、意志の弱い僕ではしばらくどころか一生をメダロットを持てそうに無い。
何より、ヘッドシザースは男の子の憧れであるクワガタムシをモチーフとしたメダロット。イッキはクワガタムシが大好きであり、一号機目は絶対にヘッドシザースと決めていた。
そして、おまけにティンペットも付けられると聞いて、イッキの心の善が悪に押されてしまった。
ヒカル青年の押しにやられた面もあるが、一番の原因はメダロットに対する欲求を抑えられなかった自分の心。
コンビニから出たイッキ少年の腕には、レトルトカレーの代わりに新型ヘッドシザースのパーツ一式とティンペットが抱えられていた。

コンビニを出る前は心は天にも昇らんばかりの気持ちだったが、コンビニを出た途端、その気持ちは雲散霧消した。
後には、やってしまったという後悔ばかり。ママにどうやって言い訳しよう。今更、「やっぱり要らないです」とは言い辛い。それ以上に、抱えている物を手放したくない気持ちがまさっていた。

家に帰りたくないと思ったが、帰る場所はそこしかないので、やはり自宅に帰るしかない。

溜め息をつくと、何となくヘッドシザースのパーツをじっと眺めた。まるで、それが起動して、ママから叱られる自分をかばってくれるように期待するかのような目付き。

ある程度歩き、溜め息をつき、パーツを眺める。そんな動作をすれば帰る時間も遅くなり、ママの堪忍袋の尾をますます切らせてしまうことを、イッキは気付いているのだろうか。

1. 私の名前…

暗い、ここはどこだ？私は誰なのだ？
たまに目が覚めると、こんなことを自問自答した。目が覚めると言っても、私には目を含む五感機能など存在しないが…。
ここは確かに暗いが、居心地は悪く無い。
ある日、動きを感じた。ざくざく、ざくざく、土を掘る音。彼には五感機能どころか体すら無いので何も感じないが、何かが起きる兆しを感じていた。
ざく、かつ！
スコップが金属物に当たったので、掘る手つきが慎重になる。両手の刷毛とスコップで少しずつ土をどかし、まだ、僅かに泥を被るそれが無事なことを喜ぶ。
掘った者の手の中には、金色の六角形状のコインのような物がある。コインの表には、何らかの幼虫と思しきがものが描かれていた。

やれやれ、あの人の気紛れも困ったものだ。こんな貴重な物を、まだ年端もいかぬ子供に託して見るとは。
あの人は、あの子供に何かを感じると言った。それを突っ込むと、はぐらかすような笑みで「何かは何かじゃ！」と答えた。この返答には呆れてしまったが、どこか憎めない。
それはひとえに、私があの人を尊敬しているからだろう。
メダロットを愛し、メダロットに並みならぬ情熱を注ぐあの人。知的で大胆、それでいて、決して驕り高ぶる態度は一切見せず、ときに今日のような突拍子も無いことを思い付き、子供のようにはしゃぐあの人。そして、火急のときには何をすべきか行動できるあの人。

そんな人だからこそ、私は慕っている。
今から約三十分後にここを通るとある男性に、二つの物を渡す手はずになっている。
あの人は少年にこれらの品を託す理由をもう一つ付け加えた、「可能性」と。
可能性か。果たして、彼が一体どのような行動見せてくれるのか、見届けさせてもらおう。

家に帰ると言い訳する暇もなく、イッキは母親のチドリに叱られて、しばらく二階の自室で反省するよう言い渡された。
部屋に入ると、イッキを慰めるようにフォックステリアの愛犬「ソルティ」が「くぅーん」と甘えるように鳴いて、イッキの足元にすり寄ってきた。
「慰めてくれるのかい？ソルティ」
足元にすり寄るソルティの頭を撫でると、ソルティは尻尾を大きくふりふりした。
イッキは自室に入ったときあることに気がついた。メダロットの頭脳であるメダル、それと、メダロットを操作するメダロッチが無いことに。
とりあえず組み立ててみたが、肝心のメダルが無いので動くわけも無い。母親にきつく叱られた後でのこの事実、イッキは今日一番の深い嘆きの溜め息を吐いた。
二時間の間、ソルティをかまうなり漫画を見るなりして、時間を潰した。
「ただいまー！」
玄関から間延びした男性の声、パパだ。
イッキのパパの名前はジョウゾウ、歳は今年で三六歳。だが、薄く無精髭をはやした顔と黒縁丸眼鏡のせいで、実年齢以上に見られ

ることがよくある。つい最近では、五十歳と間違われたほどだ。
十分後、パパが部屋に入ってきた。
「イッキ、母さんから話は聞いたぞ」
イッキはぎくりと背筋を伸ばした。叱られる。息子の気持ちを察したのか、ジョウゾウはイッキの気を落ち着かせるために、優しく微笑んだ。
「まあ、そう固くなるな。パパだって、子供のときは一回や二回ぐらい、お使いのお金を使ったことがある。しかし、今回は少々規模がでかかったな」
少々どころではない。百円や二百円ならいざ知らず、一万円ともなれば、家計にダメージを与える金額だと分かる。
「反省したか？」
「うん…二重の意味でね」
イッキは今日起きたことを簡潔にパパに話した。
「はっはっ！そうか、あの青年か。それにしても、興奮と後悔のあまり、肝心な物を二つも忘れるとは間抜けな話だな」
がっくりと肩を落とすイッキ。ジョウゾウは、元気出せとぽんぽんと肩を叩き、息子の目を覗いた。
「反省したか？」
「うん」
「もうしないか？」
「うん、こんな馬鹿なことは二度としないよ」
「じゃあ、テストで必ず良い点取ってくるか？」
最後の問いに、それはちょっととイッキは首を捻った。
「最後のは冗談だ。というわけで、お前にスペシャルビッグボーナスをやろう」
父親のスペシャルビックボーナスとやらを見せつけられた瞬間、イッキはあんぐりと口を開けて、絶句した。パパの右手にはメダル、左手にはメダロッチがあるからだ。
「ぱ…パパ、これは！？」

「いやー、実はな。いつも通りの道を歩いていると、突然、空から笑い声がしてな。上を見上げたが、特に怪しい物は見当たらない。で、顔を下げると、道路に光る物があって近づいて見ると、この二つがあった。恐る恐る拾ったら、また、笑い声が聞こえた。それでな、『な、何だ？強盗か？だとしたら、盗む相手を間違えているぞ』と言うと、その正体不明の奴は『ご安心なされ、今宵はご子息に贈り物を届けに参った。プレゼントキャンペーンで、ご子息はヘッドシザース購入者千人目となり、その祝いとして弊社からプレゼントを持って馳せ参じ参りました。好きな方法でその二つの品をご子息にお渡しなされ。あと、これからもメダロット社の製品購入をよろしくと伝えてくだされ』と。そうして、正体不明の奴は姿を見せずに消えた」

正直、パパが嘘をついているのではないかと疑った。しかし、パパが持っているメダルは間違いなくクワガタメダル。カブトメダルとは違い、クワガタメダルは幼虫が左のほうを向いている。

パパが息子のプレゼントとして、イッキがメダロットをする上で不足していたメダルとメダロッチの両方を買ってきた。更にそのメダルは、ヘッドシザースと相性ばっちりのクワガタメダル。偶然にしては出来すぎている。

因みにメダロッチとは、メダロットに指示を送る時計のような形をした機械のことである。

こんなことを知っている人物は一人しか思い浮かばないが、その考えは捨てた。その人物の普段の行動や姿勢を考えると、こんなことをするとは到底考えられない。

後でママにも聞いてみたが、ママは今日、パパに一度たりとも電話はしなかったと答えた。

「怪しいとは思ったが、もう疲れているし、一旦、帰宅してから確認しようと思ったら、ママからお前がメダロットを購入をしたことを聞いてな。大丈夫だろうという結論に至った。というわけでだ、イッキ。ほら、試しにメダルを装着してみなさい」

イッキはパパからメダルとメダロッチを受け取った。軽いはずなのに、ずしりとした重みが伝わってくる。
深呼吸を一回、二回。ばくばく、ばくばく、胸の鼓動が抑えられない。
ついにきた…。ついにきたんだ。僕が、メダロッターになる日がきたんだ。
まずはメダロッチを腕に装着し、次にヘッドシザースの背後に回る。メダル装着部を押さえるピンを外し、いざ、メダルを窪みに装着。メダルは装着すると同時に、自動的に外れないよう固定された。
イッキはじっとヘッドシザースを見守り、パパも何故か緊張な面持ち、ソルティは呑気にあくび。
三十秒後。メダロッチから、全身稼働可能。エネルギー充填マックス。メダロットを始動しますか？というアナウンスが流れた。メダロッチの画像には、「ＹＥＳ／ＮＯ」の表示がある。
イッキは迷わず「ＹＥＳ」を押した。また因みに、押さずとも、声で「ＹＥＳ」と言っても動く。
ぷしゅー。僅かな煙が排出され、ヘッドシザースの目に光りが宿る。

眩しい！眩しい光が私を襲う！
それはほんの一瞬のこと。すぐに目は光に慣れた。手を動かす。
手…？手など無かったはずなのに、何故、手を動かせるのだろう。しかし、現に私は手…。いや、手だけでなく、頭や足も動かせる。
「やっ…たぁぁーー！！！！」
誰かが叫ぶ。私はその叫びが、歓喜のあまりのものと理解した。
「ここは…どこだ？」
ヘッドシザースの声は、凛と涼しげ。それでいて、どこか芯の強さを感じさせた。少年はヘッドシザースが声を発したことに驚いた

が、本人もそのことに驚いていた。
「ここ？ここは僕の家」
少年がそう言うと、すかさず隣の大きい者が、
「イッキ、お前が建てたわけじゃないだろ。正確には、パパとママとイッキとソルティの家だ」
ワン！と、四つん這いに寝そべる生物が同意するように吠えた。
大きい者は、今度は私を見て申した。
「あと、今日から君が住まう家でもある」
私は無言で頷いた。
「ところで、イッキ。名前は決めているのか？それとも、機体名称で呼ぶのか？」
「名前はもう決めてあるんだ。伝説のメダロッターと呼ばれる人の愛機の名前」
私より少しばかり大きな小さい者は、私を見て、満面の笑みでこう呼ぶ。
「ロクショウ！今日からお前の名前は、ロクショウだ。よろしくな！ロクショウ！」
……ロクショウ……
私の現状理解が追い付いてないせいかもしれないが、「ロクショウ」という呼び名は妙にしっくりする。
「…ロクショウ…それが、私（わたし）の名前…」
少年は私に左手を差し出した。
三つ、はっきりと分かることがある。私はこの「体」にとても馴染んでいること。二つ目は、次々と情報が流れて、私は瞬間的に一定の物事を理解できることを「理解」したこと。そして、三つ目は、私はこの少年とこれから「絆」を結んでいくことになること。
私は少年が差し出した手を握り返した。

2．ファーストロボトル

起動してから二日、ロクショウはそれなりに家族の一員として馴染み始めていた。

念願のメダロットを手に入れてご満悦のイッキ君。ただ、一つ不満を述べれば、ロクショウは少々大人しすぎるような気がする。あまりにも暑すぎる性格はどうかと思うが、できれば、もうちょっとくだけたところが欲しかった。

まだ、たった二日しか経ってない。そんなすぐに、全く見も知らぬ者たちと暮らす環境に馴染める者はそういない。

時間が経てば、ヘッドシザースことロクショウの別の一面が垣間見られるはず。

今日、イッキはロクショウを連れて、毎週足繁く通っているメダロット研究所に行く。メダロット研究所所長、アキハバラ・アトムことメダロット博士に自分のメダロットをお披露目するためだ。

今日、イッキは私をとあるところに連れて行くと言った。

とあるところとは何ですか？と聞いても、イッキは答えをはぐらかした。着いてからのお楽しみというわけか。

道中、イッキは若い女性と出会い、親しげに話していた。傍目から見ても、イッキの友人だということは理解できる。女性の横には、女学生のような姿をしたメダロットが付き従っていた。自分以外のメダロットは初めて見た。私の視線に気付いたのか、彼女は私を見てお辞儀をしたので、私もお辞儀を返した。

「あっ！イッキもメダロットを買ったんだ」

少女は初めて私の存在に気が付いた。イッキは鼻高々に、

「うん、そう。名前はロクショウっていうんだ。かっこいいだろ」

「ロクショウ！？あんた、大胆な名前を付けるわね」
少女は私を見て微笑み、自らと、自らが所持するメダロットの名を告げた。
「私は甘酒アリカ、ジャーナリスト志望の小学三年生。で、こっちはＳＬＲ型メダロット・セーラーマルチことブラス」
「よろしくね、ロクショウさん」
「こちらこそ、イッキのご友人とは知らずに、挨拶を忘れていたことを申し訳ございません。では、改めて自己紹介を。天領家に居候の身のロクショウです」
へぇーと呟いて、アリカという少女は私とイッキを見比べた。
「随分礼儀正しいわね。イッキ、あんたにゃ相応しくないわね」
「な、何だよ。人がどういうメダロットを持とうが、人の自由だろうが」
「それもそうね。ところであんた？メダロット研究所に行くんでしょ？」
イッキは慌ててアリカ少女の口を塞ごうとしたが、もう遅い。
「メダロット研究所？」と私は呟いた。
アリカ少女は口を塞ごうとしたイッキの手を払うと、私にメダロット研究所の説明をしてくれた。
簡潔にまとめれば、メダロット研究所はメダロットの生みの親である「メダロット博士」と呼ばれる人がいるとのこと。イッキ君が目的地の名を告げなかった訳は、メダロット研究所とメダロット博士なる人物を紹介したとき、私がどのような反応を見せるかという期待。そして、そのことを説明できる一種の優越感に浸れる自分。つまり、これら二つの目的があるから、イッキ君は私に目的地を告げなかったのだろうと予測する。
当のイッキは舌打ちしていた。
「ちぇっ。ロクショウを驚かそうと思ったのに」
「ねぇ、イッキ。私も付いて行っていいでしょ？博士から、何かネタになるような話が聞けるかもしれないし」

「別に、どっちでもいいんじゃない？」
こうして、メダロット研究所へ向かう道中の連れに、アリカ少女とブラスが加わった。

小高い丘の上に、メダロット研究所は建っていた。真っ白な六階建ての建物で、メダロット研究所と書かれた看板に、正門にある男型ティンペットと女型ティンペットの銅像以外には飾り気は見当たらず。別段、特徴の無い形のビルだった。
イッキたちが顔馴染みなのもあるが、メダロット研究所は一部の研究棟を除き、一般にも開放されている。
受付のコンパニオンガールをモチーフとしたＣＭＰ型メダロットのティンクルことキティちゃんが、四人を博士が居る個人研究室まで案内してくれた。
先だって、イッキが博士の研究室のインターホンを押した。
「はい、アキハバラ・アトムですが」
インターホーンの向こうから、元気の良いおじいさんが話しかけてきた。
「こんにちわ、博士。天領イッキです。今日は友達も連れてきました。入っても構いませんか？」
「おお、イッキ君か。よろしい、友達と一緒に入りなさい」
個人研究室の扉が自動的に開いた。
メダロット界の権威でもあるメダロット博士の部屋。外見から考えるに、きっと、訳のわからない機械に、沢山のケーブルやら変な液体が入った瓶が所狭しに置かれていると思いきや、案外そうでもない。
博士の研究室は小ざっぱりとしており、立派な文机が二つにコンピューターが二台、研究用に置かれているメダロットが眠る三台のカプセルに、他は天井ほどの高さがある書棚が東西南北に一つずつ

配置されているだけ。大量の機械やらビーカーなどは見当たらない。
何故、実際に博士の部屋を訪れたことが無い人がそういう想像をするかといえば、最初に述べた博士の外見にある。
常ににんまりと笑っている口元、大きな黒いサングラスにつるぴかの頭頂部、後頭部周囲の髪をヤンキー風に逆立たせて、一見してマッドサイエンティストを彷彿させる。
でも、本当はメダロットに情熱を注ぐ、子供心を持ち合わせた優しい茶目っ気のあるおじいさんだ。
イッキ、アリカ、ブラス、ロクショウと、順にメダロット博士と挨拶を交わした。
メダロット博士は早速ロクショウに目を付けた。
「イッキ君、今日わしのところへ来た目的はこれだな？」
「あの、迷惑でしたか？」
メダロット博士はにかっと、子供っぽく微笑んだ。
「迷惑どころか大歓迎じゃ。我が社の製品を持った子供の生の意見を聞けるチャンスが増えた」
この寛容深い性格とちょっとしたことをアイデアに結び付けるところが、博士を現在の地位に就けたのかもしれない。もっとも、メダロット博士は地位とかには固執しない人だが。
「ところでヘッドシザース君、君の名前は？それとも、機体名称のままかね？」
いきなり話をふられてロクショウは戸惑ったが、すぐに落ち着きを取り戻すと、
「私はヘッドシザースことロクショウと申します。この名は、マスターであるイッキ少年から受け賜わりました」
ロクショウはいつも以上に礼儀正しかった。どうやら、メダロット博士なる老人がただ者ではないことが分かり、彼なりに緊張して、少々しゃちほこばった挨拶をさせたようだ。
「がっはっはっは！こら、また随分躾がなっているな」

「ううん。ロクショウの奴、初めからこんな調子なんだ」
「一つ一つのメダルには、それぞれ個性がある。その個性と上手く付き合うことも、メダロッターに求められるものじゃぞ」
何度も聞いたアドバイスだが、イッキは真面目に「はい」と応えた。次に博士は、アリカとブラスを尋ねた。
「アリカ君、それと、ブラス君だったね」
「覚えていてくれてありがごとうございます」とブラス。
博士は先んじてアリカの話題を喋った。
「目的は記事のネタだね。もしも、わしの条件を聞いてくれるなら、イッキ君たちと一緒にある物を見せてもよいぞ」
「条件って…まさか」
アリカは無い胸を両腕で抱いた。
「これこれ！わしが変態スケベ親父的な言動を話すような奴に見えるか？」
博士はまずそんなことを言う人ではないが、変態っぽさを感じる頭をしている。
「イッキ君、君はロボトルの経験はまだか？」
「はい」
「アリカ君、条件とはイッキ君とロボトルをすることじゃ」
この条件に、アリカとイッキの両人は面食らった。ロボトルとは、ロボットバトルの略称である。イッキはためらいがちだが、アリカは乗り気になったようだ。目が、獲物を追い求める記者の目になった。
二人は肩を突き合わせて、怪しい笑みで密談した。
一分以内に密談は終了した。
「イッキ君、ロクショウ君、ブラス君、付いて来たまえ。今から、ロボトルテスト試験場へ行くぞ」

ロボトルテスト試験場はメダロット研究所の地下にある、新開発されたメダロットの性能をテストする場所。
今、この場所に二体のメダロットがいる。
右はアリカの愛機、セーラーマルチのブラス。左はイッキの愛機、ヘッドシザースことロクショウ。
試験場は真四角の正方形の部屋で、直径は五十メートル、天井の高さ十メートル。周りは分厚い防弾ガラスに囲われていて、どの角度からも戦いの様子を眺められるように設計されている。
アリカは自信満々、対するイッキは自信無さげだ。イッキは今日が初めてのロボトル。ロボトルをすることは考えていたが、今ではなく、一週間ほど様子を見てからロボトルするつもりだった。
とはいえ、後には引き下がれない。ここまで来たら、もうやってやれという気持ちになった。
それでも、緊張で体が震える。初ロボトルがこんな整った設備、しかも、自分よりロボトル歴一年先輩のアリカと戦おうなんて、夢にも思わなかった。
「イッキ君、そう固くなるな。勝っても負けてもこの試合ではパーツの取り合い無しだし、壊れたところはわしが責任持って治す。何よりも、今日は君の記念すべき初ロボトル、悔いが無いよう全力でぶつかってみたまえ」
アキハバラが固くなったイッキを宥める。メダロッチ越しから、ロクショウもイッキに声をかけた。
「イッキ、緊張しているのは私も同じだ。博士と同じことを言ってしまうが、イッキ、今日は思考を捨ててがむしゃらになれ」
アリカがとっとおっぱじめるわよ、と叫ぶ。
固くなっていてもしょうがない。やれるだけのことをやるだけ。
イッキは挑むように一歩前進した。
満足したように博士は頷くと、博士は試験場のマイクを握った。
「合意と見てよろしいか？」
「はい！」とイッキ。

「いつでもオッケーよ」とアリカ。
博士は一拍置いて、
「それでは、ロボトルファイトー！」

ロクショウが切りかかろうとしたら、ブラスはすかさず撃って攻撃の勢いを削ぐ。この動作を五回繰り返した。
両者、中々決めてとなる攻撃ができない。距離さえあれば、素早いロクショウにブラスの弾丸は当たらないが、接近戦タイプのロクショウでは遠距離攻撃ができない。セーラーマルチは若干、装甲が薄いので、ロクショウの必殺武器である左腕の「ピコペコハンマー」の一撃でも食らわしたら、ロクショウの勝ちだ。
初めはロクショウがやや有利に思えたが、徐々にブラスの弾丸がロクショウのボディを掠る。
セーラーマルチの頭部には、「索敵」という能力がある。「隠蔽」によって姿を消した敵を発見するときに使われるが、こうした攻撃が当たらない、当たりにくい状況にある敵に対し、特殊なレーダーとコンピューターが動作や角度を素早く計算し、機体の攻撃命中率を上昇させる能力が索敵。
華麗なステップで易々とマシンガンとライフルの攻撃を避けていたロクショウだが、今は避けるのに必死な状態。このままでは、いつ蜂の巣になるか知れたものではない。
作戦もくそも無い。こうなれば、特攻あるのみ。
「ロクショウ！セーラーマルチの攻撃力はそんなに高くない。多少、弾丸を食らってでも、突っ込んで左腕のハンマー攻撃で決めるんだ」
「ラジャ、マスター！」
ロクショウはブラスに向かって突っ込む。弾丸を食らうが、セーラーマルチの攻撃力では、改良型ヘッドシザースの装甲を簡単には落とせない。

弾丸の雨を耐えて、必殺のハンマーの一撃。勝った。
「甘いわね」アリカが口端を釣り上げた。
空振りして、ロクショウの態勢は大きく崩れた。危ういところで攻撃を避けたブラスは、左腕のライフル攻撃・ショートショットを撃ち込んだ。
ぼがん！
鈍い音と共に、無防備な状態のロクショウの左腕が吹っ飛ぶ。
「私のほうがロボトル歴は長いんだからね！その程度の戦法なんて通用しないわよ！ブラス、もう一発お見舞いしなさい」
自分が勝利したかのように、アリカはブラスにライフルを撃つよう指示を出す。
しかし、アリカはイッキの戦法に引っかかっていた。
ブラスがショートショットを撃つ直前、ロクショウは跳躍して弾丸を避けた。呆気にとられるブラスに、ロクショウは天井を蹴って右腕の「チャンバラソード」でブラスの胸部を貫いた。
ピン、と。ブラスの背中から装着したメダルが外れた。
「勝者、天領イッキ&ロクショウ！」
メダロット博士が高らかに勝利を少年と一機に告げる。
信じられないという表情のままアリカがイッキに近づき、自問のような口調でイッキに話しかけた。
「どうして？何で？」
「アリカは玄人、僕は素人、そこが狙い目だと思ったんだ。僕が素人丸出しの指示で、ロクショウに全力で攻撃しているように見せかけたら、アリカとブラスに隙ができるんじゃないかな？と、考えたんだ」
アリカは合点(がてん)した。
ピコペコハンマーなど、格闘系メダロットは人間でいうところの必殺のストレートを放った後、対象に当たらずとも、攻撃による反動のため、一瞬、無防備な状態となる。
イッキはその危険を逆手に取り、全力に見せかけて、跳躍や左腕

で防御する余力を残しておいたのだ。
「あーあ。まさか、イッキに負けるとは…。でも、次は上手くいかないわよ」
「うん、分かっている。こんな戦法、初戦の相手ぐらいにしか通用しないよ」
アリカとイッキは、研究員さんたちに協力してもらって二機を試験場から運び出した。
アリカがブラスのメダルをメダロッチに装着して、申し訳無さそうに呟いた。
「ブラス、ごめんね。私が気付かなかったばかりに、痛い目合わせちゃって」
「ううん、私も見抜けなかったしお相子よ。お疲れ、アリカちゃん」
謝るアリカを逆に、ブラスがメダロッチ越しから労わった。
メダロットは本体に装着せずとも、メダロッチに装着すれば意志疎通が可能である。因みに、現在市販されているメダロッチでは、最大三つのメダルを収容可能。
イッキもロクショウに一声かけた。
「ロクショウ、お疲れさま。左腕、痛くないか？」
「ピりりとした感覚はしたが、痛いとは感じなかった。ただ、自分の左腕が無くなる感覚をはっきりと感じるのは、良い気持ちとは言えなかった」
「痛覚があるなんて、メダロットには損な話じゃぞ」
メダロット博士が会話に割って入った。
「四人とも、ご苦労さまじゃった。素晴らしいファイトじゃったぞ。それはでは約束通り、君たちに良い物をお見せしよう」
「博士！」と、イッキがメダロット博士を呼び止めた。
「あの、ロクショウとブラスは？」
「案ずるな、イッキ君。この程度の損傷なら、目をつむっても修復できる」
「僕が言いたいのはそうじゃなくて…」

「行ってくるんだ、イッキ」とロクショウ。
「でも…」
「私はイッキの気遣う気持ちだけで十分だ。それに、この方は信用できる。だから、イッキは良い物とやらを見に行ってこい」
イッキはためらいがちに分かったと言った。
「決まりじゃな。おい、白玉くん。この子たちをあそこまで案内してくれんか」
すっくと、眼鏡をかけて、頭を七三に分けた長身痩躯で色白肌の男が立った。
イッキは試験場から去る際、二度、三度振り返って、ロクショウのこと見た。
「まだ未熟じゃが、良き相棒を持ったものじゃな」
ロクショウは博士に返事をしなかった。恥ずかしいからだ。

白玉という研究員に案内されてきたのは、「アキハバラ・ナエ個人研究室」という表札が掲げられた部屋だった。
「いいか、ナエさんの邪魔をするんじゃないぞ。絶対にだ！」
ドスの利いた声音で脅し文句を言って、白玉は元来た道を戻った。
アキハバラ・ナエは、アキハバラ・アトムの孫娘。年齢は十九歳だが、その歳にして、既にメダロット界の権威である。祖父であるアトムと違い、穏やかで、緩やかにカーブがかかった黒い長髪が魅力的な女性だ。子供であるイッキから見ても、ナエは美人だとわかる。
インターホーンを押すと、「祖父から話は聞いております。イッキさん、アリカさん、どうぞ入ってください」と、大人びた女性の声。それでいて、まだ子供っぽさも残る声、そこがまた可愛らしい。
イッキはもちろん、博士には馴れ馴れしい態度だったアリカも、ナエに対してはかしこまった面で挨拶した。

たおやかに二重の瞳を細め、ナエは二人に品良く微笑み返した。
初見のとき、イッキはナエがメダロット博士の孫娘とは到底信じられなかった。今もそうだが。
「さ、これが祖父があなたたちに見せると約束したものです」
ナエは、イッキとアリカに、カプセルに収納された四体のメダロットをそれぞれ紹介した。

一時間後、ロクショウ・ブラスの修復が完了したと、博士からナエさんの研究室に連絡がきた。
その頃には、ちょうど三人交えての談笑も終わっていた。
博士とナエさんは正門で僕らを見送ってくれた。
イッキ、ロクショウ、アリカ、ブラスの四人は、肩を並べて歩いた。
それにしても、二日間で僕の世界が大きく広がったように思えた。
初のメダロット、初のロボトル。そのロボトルによって感じた、今までに無い高揚した気分に、その後の反省。たったこれだけのことだけど、とにかく驚きと新しい発見の連続が続いて、それが楽しくてしょうがない。
どのくらい楽しいかって？家族皆で旅行や遊びに行ったとき何かとは比べ物にならないや。
発見といえば、ナエさんが紹介した「エレメンタルシリーズ」という四体の女性型メダロット。まだ、マスコミにも完全極秘なメダロットを見られるなんて。二度目だけど、ほんと、驚きの連続だよ。
因みにアリカが博士と交わした約束とは。例のエレメンタルシリーズの発売発表日が来たら、どこよりも早く、アリカの「甘酒新聞」に載せて公表していいとのことだった。
「うっふっふ。熟成した情報を見たとき、大衆が一体どのような反応を見せるか気になるわ」

僕とのロボトルに負けて落ち込んでいたアリカもすっかり元気になって、来るべき特ダネをどう書くか思案していた。

まだ、始まったばかり。これから、数多の艱難辛苦があの子を襲うだろう。

大丈夫、彼には家族もいて、メダロットもいる。今すぐ無理だろうが、時が経てば、必ず何か成し遂げるはず、あの子は。

今回のわしの勘は当たりそうだ。仮に外れたら、そのときはそのときだ。

2．ファーストロボトル（後書き）

戦闘結果がカブトバージョンとは異なります。

3．一人の日常（前書き）

閑話休題。メダロット［ロクショウ］メインの回、ゲームには無い完全オリジナル。

3．一人の日常

私という存在が起動してから、今日で一週間。

お母上は遠方まで買い物、お父上はお仕事、主人であるイッキは小学校で勉学に励んでいる。

アリカ嬢とのロボトル後、イッキと私は他三名の方と戦い、辛くも勝利を得ることができた。まだまだ、互いに成長段階。これからも、絶え間ない精進を重ねるのみ。

今日の私は留守役。片付けに我が家の愛犬ソルティの餌やりも済まし、やることが無くなった私は読書をした。速読は可能だが、あえて一ページずつ読むことにしている。そうすることにより、物語上の人物の心理、本を書いた筆者の気持ちなどをゆっくりと推測することができるからだ。

残り十ページ、犯人の動機には疑問を抱かざるを得ないが、主役の補完的説明台詞を読んで、何となく納得した。

おかしな話だ。機械であるはずの私が、「何となく」などという曖昧模糊な言葉に納得するとは。

わん、わん！

ソルティが散歩をしてくれて催促する。私は母上から自宅の鍵を預かっている。

「ロクちゃん。ソルティを散歩するときだけは、外出してもいいわよ」

母上はこう言っていた。私は思案した。ニュースなどを見ても、今の世の中は物騒。いくらこの辺一帯の治安が安定しているとはいえ、万が一という場合もある。しかし、ソルティと散歩をして、一人で歩く世界とはどのような感じものかという知的好奇心も湧いてくる。

二分思案したのち、結局、私はソルティの催促に応じることにした。

時期的にそんなに暑くないので、家中の窓を閉めても熱気が籠もることはないだろう。
念には念を入れて、火元などもチェックした。問題無し。
最後はしっかりと施錠。ドアが閉まったかどうか確認すると、地面に打ち込まれた太い釘に巻かれた綱を解き、私はソルティと外の世界へ出かけた。

外へ出ると、始めは隣人であるアリカ少女の母親が話しかけてきた。
「あら、あなたはイッキ君のメダロットで、名前は確か…」
「ロクショウと申します」
「そう、確かそんな名前だったわね。犬のお散歩、よね。どう見ても」
「はい。イッキの母上からは留守を頼まれましたが、ソルティが散歩を催促したら、そのときに限り外出をしてもよろしい許可を貰いましたので」
「ロクちゃんってば、作法がなっているわね。うちのアリカも見習って欲しいわ」
「では、甘酒さん。私はこれにて」
ロクショウは近所からロクちゃんの愛称で通っている。チドリが家でもロクショウのことをロクちゃんと呼び、ご近所さんたちにロクショウのことを話すときもロクちゃんと言っているので、この界隈でロクショウのことをロクショウと呼ぶのはイッキ、イッキパパ、アリカ、ブラスの四人しかいない。
親しみを込めての呼び名なので特に嫌とは思わないが、イッキと同じ小学生から「よっ！ロクちゃん」と小馬鹿にされたときは、さすがに溜め息をついてしまった。
呼び名を気に病んでも仕方ない。私はソルティを連れての外界を

堪能することに気持ちを切り替えた。
国道に出て、信号に差し掛かる。赤ランプが点灯しているので、しばし待つ。車道側の信号が赤に切り替わる直前、一メートル離れた横に立つ者が歩き出した。安全と法規を考慮すれば、歩道の信号が青になってから渡るのが普通。イッキにそのことを問うたが、イッキは無視するに限ると答えた。僕とロクショウが注意したところで、ああいう大人は無視するか、生意気なガキとガラクタだと逆切れする。この二つのパターンが専らであり、素直に聞く者は稀だと言う。
その人物たちには、何かそう至る事情があったのかもしれない。だが、私がそれらの人物に話を伺っても取り合ってくれそうにないし、私がそこまで首を突っ込む資格と必要性も無い。

御神籤(おみくじ)町には、広々とした河原に面した歩道がある。
私は遊歩道の中でも、ここが一番好きだ。涼やかな風がそよぎ、風によって揺らぐ揺れ茂る樹や草花を見ているだけで、心が安らぐ。いつまで眺めていても、飽きない。ソルティはそうでもないようだが。
緩慢な歩行にソルティは退屈してきたようだ。私は名残惜しみつつ、足早に河原道を通った。
帰り道、セブントゥエルブが視界に入った。
このコンビニには、イッキに半ば強制的に私の体を売りつけた店員がいる。その店員は、外でのんびりと体を伸ばしていた。店内で店番をしなくて大丈夫なのだろうか。
私が前を通ると、気の抜けた声で「ん、どうも」と挨拶した。店内を見たら、雑誌コーナーで立ち読みしている男が目に入った。表紙には、艶めかしい恰好の女が写っている。俗的な言い方をすれば、いわゆる「エロ本」であろう。

雌雄がある生物が、異性に興味を持つのは普遍的なこと。あの手合いの本を読む者は出来る状況ではないので、その欲求を解消するために読むのだろう。
さっき河原を通ったときの和やかな気持ちが吹き飛んでしまった。余計な雑念を考えてしまったためだな。
私は更に足早に歩いた。
家から歩いて五分ほどのところには公園がある。園内には、二人の幼児と一体のメダロットが砂場で遊んでいた。彼はカメレオンのような姿形をしている。そのメダロットは私に片目を向けた。
「よう、確か『ロクちゃん』と呼ばれているんだっけ？」
ふむ、見も知らぬメダロットにすらロクちゃんと呼ばれるようになるとは、主婦の噂話の伝達速度は恐ろしい。
園児の一人が私に人差し指を向けて、「あ！ロクちゃんだ」と呼んだ。
あの子は知っている。確か、萩野香織という近所の幼稚園児だ。
ソルティが少女のほうに行こうとする。ソルティは人懐っこく、見知っている人間を見たら、遊んでもらおうとする。まだ、時間はある。私は綱だけはしっかりと握ったまま、ソルティを園児二人と遊ばせた。
一つ気になる。それは、この子たちと遊んでいる彼だ。近所では見たことが無い。
「俺、ナチュラルカラーっていうメダロット。見てのとおり、カメレオン型メダロットさ。俺の主人は爬虫類とかが好きなんでな。ついでに、俺は機体名称がそのまま名前になっている」
私が聞くよりも早く、彼は自ら自己紹介した。
「何故、ここでこの子たちと」
「何故って？俺の主人はメダロットに関しては放任主義者でな。俺が勝手に出歩いて遊んでも、特に咎められたりはしない。名誉のために言っておくが、山彦は決していい加減な奴じゃないぞ。ちょっと、マイペース過ぎる一面はあるが」

私と彼の間に、香織ちゃんが間に入ってきた。
「ねぇ、ロクちゃん。ナツちゃんと一緒に砂山作ろう？それで、トンネル開けよう」
人間の子供のこの無意味とも思える行動は、将来創造性を育む上で重要なものとなる。とはいえ、後十五分ほどで母上も帰宅するので、申し訳ないが、香織ちゃんには事情を言って断った。
「じゃあ、今度時間があるときは遊ぼうね」
「良かろう」
公園から去る前、私は彼に一つ物を尋ねた。
「もう一度聞くが。君は、何でこの子たちの遊び相手になってあげたのだ？」
「何って、決まっているじゃん。楽しそうだったから遊んだだけだ。なぁ」
彼は同意するように二人を見た。二人は邪気の無い笑顔でうんと頷いた。
彼のきさくな一面は、私に欠けているところだな。私は公園から去った。

私はイッキのことが好きだ。イッキだけではない、母上に父上、ソルティも好きだ。
一週間しか経っていないが、私は彼らのことを好いている。ただ、四六時中付き合いたいかと聞かれたら、首を振る。イッキも首を振るだろう。人間もメダロットも、時には適度に誰かと離れられる時間が必要。だが、彼が助けを求めるようならば、私は四六時中どころかずっと付き合うことも厭わない。
ソルティの綱を釘に巻き付け、私が家の鍵を開けたら、聞き慣れた車のエンジン音が近づく。ちょうど、母上が遠方の買い物から戻ってきたようだ。

3．一人の日常（後書き）

ＣＭＯ型カメレオンメダロット・ナチュラルカラー
カメレオンらしく、隠蔽の能力で景色に同調して敵の攻撃から身を守る機体。オリジナルメダロットではない。
後、萩野香織という子の名前は、「はぎのかおり」という名称のお米が由来です。

4．校内ロボトル大会【前編】（前書き）

スクリューズ初登場。ちょっと子悪党な感じです。
戦闘と台詞以外は全く同じなので、両バージョンのどちらかを先に読めば、片方の最初の文章は飛ばしても構いません。

4．校内ロボトル大会【前編】

四月中旬。ギンジョウ小学校最大の行事、ギンジョウ小学校校内ロボトル大会が行われる。

イッキとロクショウは、このロボトル大会に向けて四人の人間にロボトルを挑んだ。実力はまだまだ未熟。ロクショウの実力と性能に頼って勝っている面が大きいが、イッキは何となくロボトルにおける戦略、ここぞというときの勘と勢いの乗り方が分かってきたような気がした。

アリカは、イッキのロボトルの嵌り具合に呆れた表情をしてみせた。

「そりゃ、私だってロボトルはするけど。去年から今年にかけてのロボトル回数は、通算十八回ぐらいのものよ」

イッキは自分が中途半端な人間と知っている。その自分が、こんなにも熱く物事に取り組めるのは初めてかもしれない。だが、イッキがロボトルに熱中するのはそれだけではない。

それにはまず、ロボトル以外についても詳しい説明をしなければならない。

メダロットを持つ者が、必ずしもロボトルをするとは限らない。精々十人に一人ぐらいの割り合いであり、それも、あくまでメダロットの体を動かしてやろうというのが大半。

ロボトルには二種類ある。

一つはスポーツとして、自分の手持ちのメダロットの体を動かす目的で行われるもの。前のイッキとアリカのロボトルはこの部類に入る。

二つ目は、真剣ロボトル。これは、互いのメダロットの頭部・脚部・右腕・左腕のどれか一パーツを賭けて行われるロボトル。イッキは一万円でティンペットとパーツ一式を揃えたが、あれは例外中の例外。本来、男性型ティンペットは二万円、女性型ティンペット

は倍の四万円もする。
パーツも安くない。現在市場で出回っている一番安いメダロットは、サル型メダロットのモンキーゴングというメダロットだが、パーツ一式全価格六千円もする。
イッキの新型ヘッドシザースのパーツは現在の市場価格では一式六万円、高額の部類に入る。
仕入れる側にとっても決して安くない買い物。こんな高い物を勝手に仕入れてしまったのだから、ヒカルが店長に大目玉を食らうのも致し方ない。
真剣ロボトルは、子供が持つにとってはお高い物を賭けて戦うのである。なけなしの小遣い貯めた。あるいは、一、二年分の誕生日とクリスマスプレゼントを我慢するのを条件に買ってもらった物。それが、奪われてしまうのである。
そして、負けることは即ち、自分の友達や相棒と呼べる存在が無残な姿になるのを見ることになる。朽ち果てた状態の自分の愛機から、パーツをもぎ取り他人の手には渡すのは、正に苦痛と屈辱の二重苦だ。
イッキはママから罰として、一年間お小遣い抜きとなった。
自分が真剣に取り組めて、尚且つ、お小遣いを稼げる。この二つの条件に当て嵌まるのが、真剣ロボトルだった。イッキはこれまでの間、三人と真剣ロボトルをした。
一人目は銀行勤めの若い女性。こちらは、すんなりと蝶型メダロット・レッドスカーレスの右腕を渡してくれた。
二人目は男子高生。いかにも不良っぽく、ハリネズミ型メダロット・ソニックタンクの頭部を受け取る際、舌打ちされたのは怖かった。
三人目は同じ小学三年生の男子。泣きながら蛇型メダロット・マックスネイクの左腕パーツを渡されたときは、自分がいじめっ子と勘違いされないか冷や冷やした。
余談だが、メダロットにはスラフシステムという自己修復機能が

ある。これも語ると長いので、また別の機会に語ろう。
イッキはレッドスカーレスの右腕をコンビニで下取りに出して、千五百円を手に入れた。メダロット社の規定により、コンビニやデパートではメダロットのパーツ単品買い取りシステム導入がされている。
千五百円。たった僅かな金額だが、自分とロクショウの力で本気で取り組み手に入れたお金。
いけないことで手に入れたメダロットだったが、イッキに本気で物事に取り組む苦労、そして、その楽しさを気付かせた。
今日と明日の休日の二日、校内ロボトル大会が開催される。優勝は期待してないが、僕とロクショウの実力を試す絶好の機会。仮に優勝すれば、賞状と男性型ティンペット一台が授与される。
学校開催のイベントだが、参加費用には千五百円取られる。見物だけでも、一般・保護者は五百円。児童も二百円支払らわなければならない。学校はロボトル大会の行事に本腰だ。
参加には、クラス担任の教師に参加する旨(むね)を告げる。イッキは大会参加募集締切日の水曜日に担任のオトコヤマ先生に参加表明を申し出て、千五百円の参加費用を入れた封筒を提出した。

大会参加募集人数は七十人。今年は六九人と、中々の盛況ぶり。
大会は午前の部で第一回戦。一回戦が済むと、一時間のお昼休み。午後の部で第二回戦が行われ、三十分の休憩をはさんだのち、第三回戦が行われる。続く日曜日。午前の部第四回戦、二十分の休憩をはさみ、そのまま準決勝戦。昼食摂取の時間も兼ねて一時間半の休憩のあと、決勝戦が行われる。
準決勝と決勝になると応援の生徒の親が減る代わりに、一般の見物客が詰めかけてくる割合が高い。学校側は自治体と協力して、休憩時間の間に校内と周辺の見物客・交通整備を行う。

イッキパパは仕事の都合で今日は来れない。明日は休めるから、今日勝ち残ったら応援に行くとパパは言っていたが、それは無さそうだ。

イッキの一回戦の相手は、スクリューズの一番手であるカガミヤマが対戦相手だからだ。

スクリューズは三人いて、一番手カガミヤマ、二番手イワノイ、そして、キクヒメという女の子がリーダーを務める。イッキと同じ三年生でクラスが隣り合っている。イッキが羨ましそうにロボトルの光景を眺めていると、いつも決まってこの三人はイッキのことをからかった。

三人は三年生の番格であり、イッキを含むメダロットを持つ同学校の生徒は、できる限りこの三人とは目を合わせないようにしている。

スクリューズは常に三人がかりで対戦し、パーツを奪っては荒稼ぎをしているという噂がある。噂の真偽はともかく、この三人は個々の実力も高い。学校で、この三人の誰かと一対一でやりあって勝てるような生徒はあまりいない。

「ご臨終だねぇ、イッキ」

声にドスを利かせて、スクリューズのリーダーキクヒメが声をかけてきた。少女ながら、声には一種の威圧感があった。茶髪に顔立ちからして、キクヒメはどこか日本人離れしていて、両親のどちらかは外国人だと聞く。

キクヒメの右側に控える腕白い細めの少年が、半笑いな目付きで小馬鹿にしたようにイッキを見やる。

「いやー。メダロットを初めて一か月も経たない初心者ごときが大会に出るなんて。ほんと、身に余る行為っすよね姉御」

焦げ茶色のジーパン、肩のラインに沿って白筋が入った深青色の

ティーシャツ、僅かに垂れた瞼(まぶた)と斜め上に逆立つ黒髪が目立つ彼は、スクリューズの二番手イワノイ。
キクヒメの左側に控える少年がイワノイの意見に同意する。任天堂の某ＲＰＧの主人公を連想させる赤帽子を被り、日焼けがかった浅黒い肌に丸みを帯びた体型、閉じているのか開いているのか分からない糸目をした少年だ。
「うん、ほんとほんと。家事炊事洗濯に慣れていない奴が、適量も分からず洗濯機に洗濯剤をぶち込んで、洗濯物を駄目にするみたい」
意味不明な例えを話す彼は、スクリューズの三番手カガミヤマ。
近くに三人のメダロットが見当たらない。スクリューズは試合直前に自身の愛機を呼び出すつもりだ。
メダロッチとメダロットの本体には、「転送機能」がある。電波を受信することにより、何千メートルと離れたところにあるメダロットの本体を、メダロッチを通して瞬時に目の前まで送ることができるシステム。メダロットのこの「転送機能」も各分野における利用が試みられている。
「あんたがどの程度抗えるか見物だねぇ。カガミヤマ、たっぷりと可愛がってやりな」
キクヒメはそう言うと、近くの売店へと足を向けた。イワノイ、カガミヤマも後に続く。
これまでのところ全く負け無しで自信もついてきたが、イッキは自信を無くした。今まで無言だったロクショウが、メダロッチ越しからイッキに喝を入れる。
「イッキ、前と同じアドバイスを送ろう。がむしゃらになれ、イッキ。それに、この大会が始まるまでの間、私とお前は決して遊び呆けていたわけじゃない。勝つにせよ、負けるにせよ。あの三人には我々と対峙したらどうなるか、目に物を見せてやろうではないか！」
常日頃は知的で落ち着きがあるロクショウ。だが、ロボトルとなると秘めたる魂が目を覚ます。
ロクショウの言うとおりだな。今は勝敗を気にせず、全力で物事

にぶつかろう。
「イッキ」
チドリとアリカの二人がイッキを呼ぶ。
ママとアリカとアリカの母親、三人は伴って校門を潜った。アリカの横にブラスがいないのを見て、イッキはママの横まで来ると、アリカにそれとなくブラスがどこにいるか聞いてみた。
「ブラス？先に行ってもらって、見物の場所取りをしてもらっておいたの？」
「アリカちゃーん！」
遠目から、ブラスが跳ねてアリカに手を振っていた。
「イッキ、あんた何よその自信無さげな顔は」
ロクショウの喝で元気になったつもりだが、アリカや他から見ると、どうもそうではないらしい。本音を漏らせば、実はまだ怖い。
「あんた、一回戦の相手は確かカガミヤマだったわね。スクリューズがなによ！あんさんとロクショウなら、カガミヤマ程度なら一発ノックダウンや」
アリカが大阪弁も交えた男っぽい声でイッキを激励するのを聞いて、アリカの母親が注意した。
「こら、アリカ。せめて口調ぐらい女の子っぽくしたらどうなの」
「別にいいじゃん、お母さん。じゃ、イッキ。三回戦で会いましょうね」
アリカは元気良くブラスの元に駆け寄った。アリカの母親は、やれやれと首を振った。
「ほんと、あの子ときたら…」
「いえいえ、子供はあれぐらい元気のほうがいいですわ。うちのイッキに見習わせたいくらいですよ」
ママは僕の頭を撫で回した。イッキは撫で回すママの手を煩わしそうに払い除けた。
「…ママ！こんな人前で」
「あら、いいじゃない？もしかして、これぐらいで禿げちゃうと心

配しているの」
　チドリがもう一度イッキの頭を撫でようとしたら、イッキは逃げるようにアリカとブラスが座るシートに向かった。
「逃げられちゃいましたね」
　アリカの母親が笑顔で言う。
「ええ」
　今は撫で回せる高さにあの子の頭も、そのうち、自分の頭に手を伸ばすぐらいの大きさになるんでしょうね。ふとして過る感慨を消すように、大会開始十分前の放送が流れる。
　イッキとアリカが二人に早くくるよう促す。
「さて、あの子たち二人がどこまで頑張れるか。見届けさせてもらいましょうか」
　チドリの言葉に、アリカの母親は小さく相槌を打った。

　試合台は警戒網を張ったグラウンド内部の中央。そこを、相撲の土俵のように土で盛り上げただけだった。
　一分で一回戦は終了した。飛行系パーツの脚部を装着した機体に、相手はランドモーターの対空攻撃パーツでこれを撃墜した。
　続く一回戦第二試合、天領イッキ&ロクショウ対カガミヤマ。カガミヤマは既にメダロットの本体を自宅から転送していた。
　カメ型メダロットのキースタートルこと鋼太夫（こうだゆう）。カメ型だけあって移動速度は鈍いが、その分装甲が厚い。また、両腕と頭部から発射されるレーザーはかなりの威力と速度を誇る。
　東はイッキとロクショウ、西はカガミヤマと鋼太夫。
　黒い紳士ズボン、白い半そでの紳士ティーシャツに蝶ネクタイという出で立ちで、鼻と口の間に立派に生やした髭を蓄えた初老の男性が、試合台中央で両者を交互に見やる。
「先ほども申し上げましたが。私、ロボトル協会公認レフェリーの

ミスター・うるちと申します。メダロットが機能停止、あるいはマスターがギブアップの意を表明した場合、一方の勝利とします。それでは、このロボトル合意と見てよろしいですか？」
イッキとカガミヤマは一つ首を縦に振った。ロクショウと鋼太夫は睨み合っている。
「ロボトルファイトー！」
開戦合図と同時に鋼太夫はいきなり左腕のレーザーを発射した。
不安でしょうがなかったが、この試合は自分とロクショウが優位だと分かった。何故なら、周りは観客だらけで、格闘タイプのロクショウの攻撃は余程のことが無ければ安全だが、レーザーだとそうもいかない。人に当たっても死には至らないだろうが、何らかの被害は確実に出る。
カガミヤマは威力を速度を高めた左腕の極細のレーザー一発で決めたたかったようだが、そうは問屋が卸さない。ロクショウの脚部の一部であるスカート状のものを一部焦がしただけであり、ロクショウは全くの無傷で済んだ。
「ロクショウ、もう下手な作戦は要らない。正攻法で攻めろ」
「御意！」
近づいては、チャンバラソードで一番装甲が厚い脚部を攻撃した。鋼太夫は腕を振るうなりして抵抗を試みるが、元来射撃タイプのキースタートルのパンチが当たるわけも無い。四回右腕のソードで攻撃して、ロクショウは鋼太夫の四本ある足を全て切断した。
レーザーやビーム系の攻撃は、次の一発を撃つのに時間を要する。更に観客は高い壁から見下ろして観戦ではないので、思い切った攻撃ができない。
やけくそといわんばかりに三門レーザー一斉発射。ロクショウはこれも難なく避わす。試合台に三つの風穴が開いた。無茶な攻撃で身動きが取れなくなった鋼太夫の頭部を、ロクショウは左腕の必殺武器・ピコペコハンマーで叩いた。鋼太夫の頭頂部がひしゃげ、メダルらしき物体が弧を描いて飛ぶ様が見えた。

「鋼太夫機能停止！勝者、天領イッキとロクショウ」
マイクも使わず、ミスター・うるちの勝利者宣言は観客全員の耳に届いた。
その後も消化試合は行われて、お昼の十二時五十分頃には一回戦が終了した。
「イッキ、ロクちゃん。二人とも意外とやるじゃない」
「アリカ、ブラスおめでとう。けどね、アリカ。あんな風にがなり声で叫ぶのは、できれば控えてちょうだい」
イッキ、甘酒の両母親が自分の子供たちとその相棒の戦いぶりを褒めた。
四人はピクニック用のシートに座り込み、昼食を取っていた。今日は特別に、チドリはイッキの大好物の一つであるトンカツを持ってきた。ここにカレーも加われば、イッキにとっては最高の食事である。
アリカはパセリに野菜サラダなど、意外にも青野菜系の料理を好む。
食べて、出す物も出してリラックスしたあとは二回戦へと突入。
二回戦の相手は五年生。一回戦で使用したパーツを全て別のに替えていた。
脚部がラビゥオンバット、右腕は付けた機体の行動速度を高めるチャージドシーズのパーツで、残る左腕と頭部は何とソニックタンクのパーツだった。
ソニックタンクとなら、一度手合わせたしたことがある。だが、この前と違ってこちらはソニックタンク一式で組み立てず、スピードがあるパーツを二つも装着している。
イッキはまずロクショウに索敵するよう指示を出した。記述していなかったが、実はロクショウにもセーラーマルチと同じ索敵の機能が備わっている。
相手の左腕から放たれるナパームを避けつつ、ロクショウは相手の行動速度とパターンを分析した。二分経過、ソニックタンクが後

ろに飛んだのを見計らい、ロクショウはダッシュした。頭部からのナパームを頭上ギリギリのところで回避し、ロクショウは相手を切り伏せて勝利した。
この試合では全くの無傷とはいかず。一発、左腕にナパームを食らってしまった。
運営委員会のメダロット、ホーリーナースとムーンドラゴーンの二体がロクショウの腕を治療した。スラムシステムを異常促進させてパーツの自己修復機能を高めさせる、いわゆる回復系のパーツを二体は備えている。損傷具合が浅かったため、五分後にはロクショウの左腕はすっかり元通り。

第三回戦、これで前半戦は終了する。
対戦相手はスクリューズの二番手イワノイ。使用する機体はシアンドッグの後続機、ＤＯＧ型イヌメダロットのブルースドッグ。イワノイは名前を付けず、機体名称を名前としている。
「イッキ、仇を討とうなんて思わないで。ただ、滅多切りにしてくれるだけでいいから」
「イッキ、アリカちゃんの仇を討つのよ」
「イッキ君、適度に頑張ってね」
アリカ、ママ、アリカの母親の三人の応援はバラバラだ。
「イワノイ！あたいらの力を今度こそ見せつけてやりな」
「合点承知の助だ姉御」
キクヒメの啖呵に、イワノイはガッツポーズで応えた。前の第二試合で、ブラスはイワノイのブルースドッグに敗北を喫した。
治療を施されたが、体中の弾痕跡が消えるには時間がかかりそうだ。
痛ましいブラスの姿を見て、ロクショウに、イッキも珍しく燃え上がった。

ロクショウがポーズを取る。クラウチングスタートの姿勢だ。
「何だぁ？まさか、真正面から突っ込む気か？」
二人は答えない。
「あんま調子に乗るんじゃないぜイッキ。おいらのブルースドッグの実力は、そこらの同機種なんかとは比べ物になんねぇぜ」
イッキはイワノイの挑発に全く乗らなかった。
思えば、ことあるごとにメダロットを持ってないことでからかわれてきた。だけど、もうそうじゃない。今は、ロクショウというお堅いが最高の相棒がいる。
イッキは一回戦でカガミヤマがとった戦法と全く同じことをやろうとしていた。試合開始合図と共に、全力の一撃をぶちかます。男のガチンコアタック。失敗すれば、待つのは蜂の巣。
ミスター・うるちのロボトルファイトの叫びと同時に、ロクショウはブルースドッグに向かって疾風の如く駆ける。
右腕を撃たれ、更に脚部に三発を食らって素っ転ぶロクショウ。観客の誰もが駄目だと思ったとき、ロクショウは勢い殺さず撃たれた右手を地面に叩きつけると、宙返りしてブルースドッグの顔面をぶん殴った。
ぼっがーん！
ブルースドッグは観客席まで吹っ飛んだ。審判がカウントを取る。
「…エイト、ナイン、テーン！ブルースドッグ機能停止！勝者、天領イッキ&ロクショウ」
試合開始から十五秒で決着。今大会最速勝利。
今度は数人だけでなく、イッキとロクショウは多くの観客から拍手と称賛が贈られた。決着の速さに何が起きたか分からず、イワノイは呆(とぼ)けた表情をしていた。

4．校内ロボトル大会【前編】（後書き）

都合上、何型か記載されないメダロットがいるのはお許しください。因みに、ラビゥオンバットはウサギ型。チャージドシーズは花型です。

キースタートルの名前は小説オリジナル。ブルースドッグはアニメ版を参考にしています。

4．校内ロボトル大会【後編】（前書き）

数日ぶりの更新。やっぱ、前編だけで何日も待たすのはあまりにも決まりが悪い。

4．校内ロボトル大会【後編】

尿意をもよおしたイッキは、四人に先に帰るよう言った。
「寄り道せずに帰ってくるのよ」
「分かったよ、ママ！」
イッキは一目散にトイレへと向かった。
思ったとおり、トイレはどこの階も混雑していた。股で股間にある物を抑えつけて、イッキは数分間トイレを我慢した。
カシャ、カシャと、機械的な歩調。尻尾と手足が電気コードの接続部のような形をしており、真っ赤なぶかぶかなスカートと服を着たような体、頭に猫耳を付けたネコ型メダロットのペッパーキャットが男子トイレにやってきた。主人である女の子でも探しているのだろうと、気にかける者はいなかった。
「ブルースドッグと鋼太夫倒したぐらいでいい気になるにゃ。私はあいつらとは比べ物にならない。あんたはあのクワガタムシの命日でも待っておくことだにゃ」
イッキにさり気無く近寄ったペッパーキャットは、イッキを小声で脅した。そのペっペーキャットの脅しを聞いて、イッキは青ざめ辛そうな表情をした。だが、それは限界まで近づいている辛さであり、そのメダロットの脅しの台詞はとんと聞こえてなかった。
そのメダロットはそのことに気が付かず、自分の台詞で相手がびびっていると勘違いして、満足した様子で去って行った。
正門を出てすぐのところに、スクリューズの三人が立っていた。キクヒメが例のペッパーキャットに話しかけた。
「セリーニャ、イッキとあの虫の様子はどうだった？」
「クワガタの奴はいなかったけど、イッキにはバッチリ。青ざめた顔で身を震わせていただにゃ」
このペッパーキャットはキクヒメの愛機で、名前はセリーニャ。
「へっ！イッキの奴、明日、自分がどういう目に遭うか分かってい

るらしいな」とイワノイ。
「ああ。泥塗れにしてやろう」とカガミヤマ。
「あたいらを舐めたらどういう目に遭うか。あいつの虫の体にしっかりと刻んでやりな、セリーニャ」
そして、スクリューズは既に勝利したかのように高笑いした。
その頃、用を済ましたイッキは児童玄関で待つロクショウと会った。
「気分は？」
「死ぬかと思ったけど、何とか間に合ったよ。でも、辛かったな。人を押し倒してでも行こうとしたら、僕の心を読んだのかな？赤いボディのメダロットが『待っておくことだにゃ』と注意したんだ。おかげで、間違いを犯さずに済んだよ」
「…赤いボディのメダロットといえば、先ほどここを通りましたな。猫のような姿をした」
「猫…ペッパーキャットか。まあ、あのメダロットを持っているのは他にもいるし。僕の間違いを押し止めてくれるような心優しいメダロットが、まかり間違ってもあいつらのメダロットということは無いな」
イッキとロクショウは人混みに揉まれながら、ゆっくりと歩いてくれていた四人を見つけて合流した。スクリューズはほくそ笑み、イッキの気持ち爽やか。双方、互いの思惑に全く気付かず。知らぬが仏とはこのこと。

帰宅すると、ちょうどパパも帰ってきた。
夕食の時間帯、イッキとチドリママはパパに試合模様をこと細かく話した。特に、イワノイと対戦したときの心境と戦い方を伝えると、ジョウゾウはいたく感心した。
「男のガチンコアタックってか。まさか、イッキからそんな言葉を

聞く日がくるとは夢には思わなかったな」
父親にも褒められて鼻が高くなったイッキを、チドリは諌めた。
「勝手に一万円も使って購入した物なんだし、一回戦で負けていちゃしゃれにならないわ。それに、明日の対戦相手の子はあなたより経験が豊富らしいじゃない。褒めといて何だけど、そうやってすぐ鼻を伸ばしちゃうのがイッキのわるいところよ」
ママに諌められて、イッキは明日の対戦相手が誰か思い直した。第四回戦第二試合の相手は、スクリューズのリーダーキクヒメ。僕より一年半も早くロボトルを初めて、通算ロボトル数はイッキとは比べ物にならない。
ママに諌められてイッキは身を引き締めたが、本音は違っていた。未熟者の僕がカガミヤマ、イワノイも倒せた。キクヒメが強いことには間違いないだろうが、何、僕とロクショウならまず勝てる。
この思考を無理に抑えていたが、ともすると、つい本音が頭をよぎってしまう。
居間のフローリングの床で正座するロクショウも、ついそう考えてしまったりしていたが。精神統一することにより、その思考を自重していた。

日曜日、校内ロボトル大会後半戦。三回戦で人数が絞られて、応援席には保護者や参加生徒の友人の代わりに一般の客が詰めかけていた。それでも、昨日より幾分か空いていた。
第一試合が終わり、イッキとキクヒメの第二試合が行われようとしていた。
だが、昨日までの調子はどこへいったのやら、イッキはすっかり固くなっていた。キクヒメと相方のペッパーキャットのセリーニャは、もう慣れているという感じ。

企業参加の一大ロボトルイベントと比べれば、小規模な大会。とはいえ、メダロットを持って一か月も経たない自分が、小規模ながらよく勝ち抜いたな。

やるだけやってみるか。そう思って足を踏み出そうとしたら、思うように進まない。アリカときのほどではないが、また緊張しているようだ。見かねたロクショウが一声かけようしたら、イッキはそれを制止した。

「大丈夫…。何時間とはかけられないけど、ちゃんと前進だけはするから」

イッキは綱を渡るようにそっとメダロッター立ち位置についた。

「じゃ、ロクショウ。頑張るか！」

どこかまだ引きずっているが、イッキは多くの人がいる前で溌剌とした調子で喋った。

ロクショウは「うむ」とだけ言って、試合台に上(あが)った。

ロクショウが跳躍したセリーニャに切りかかる。空中で動きが取れない状態、勝った。

と、思いきや、セリーニャは猫のように大きく背を反らしてロクショウの一刀を避わし、右腕の電流を帯びたジャブをロクショウに浴びせた。

セリーニャは着地するとバック宙反転、今度も右腕の電流ジャブをロクショウに浴びせた。ロクショウもやられっぱなしではなかった。セリーニャの右腕を掴むと、針状の形をしたマックスネイクの左腕で殴り掛かった。致命傷には至らなかったが、ペッパーキャットのをバランスを支える尻尾と、右腕の接続コードの形をした指二本を貫いた。

セリーニャはロクショウを蹴飛ばし、離れて態勢を整えた。

思っていた以上に、キクヒメとその愛機セリーニャは手強い。イ

ッキはロクショウに索敵の支持を出した。さあ、これで攻撃が当たるようになる。
しかし、相手は当然それを読んでいた。セリーニャは逃げの一手に集中したので、索敵でセリーニャの行動を読んでいるはずのロクショウの攻撃は悉く空振りした。
ロクショウの攻撃は当たらず、セリーニャが逃げるだけの光景が二分間続いた。このままでは埒があかない。少々危険だけど、相手から攻撃してくるのを待って、カウンターでソードの一撃を食らわせる。
「ロクショウ、後二回ぐらい切りかかったら、相手の出方を待ってカウンターだ」
「了解」
試合台の隅に逃げたセリーニャに一刀、セリーニャは転がって回避。最後の一刀を振ろうとしたら、立ち上がったセリーニャが事を急いてバランスを崩した。チャンスだ。
「ロクショウ！そのまま攻撃」
イッキは勝利を確信した。だが、バランスを崩したのはセリーニャの巧妙なフェイントだった。
セリーニャはブリッジで難なくソードの一撃を避わし、ロクショウの無防備な体に左腕からの電流を浴びせた。
「ぐわあああああ！」
ロクショウが悲鳴を上げる。
バランスを崩したのはセリーニャのフェイントだったと、イッキは気が付いたがもう遅かった。ロクショウはセリーニャの左腕と尻尾でがっちりと挟まれていた。
「セリーニャ、頭部ライトサーキットで止めだよ」
キクヒメは余裕を浮かべた酷な笑みで指示を伝える。
「はいにゃ！」
セリーニャの頭部の両耳から、一本の針が生えた。ぼしゅしゅ！と、ワイヤー付きの両耳が音を立てて飛び出し、右耳がロクショウ

の左腕肩部、左耳が太腿上部に刺さる。
ばちばちばち！
人の目から見ても、ロクショウの体に電流が流れ込んでいるのが分かる。
イワノイ、カガミヤマが密かに野次を飛ばす。
このままでは不味い。どうすれば打開できる。焦るイッキを尻目に、キクヒメはどうだ言わんばかりに顔を突き出し腕を組む。
やっぱり、僕らではまだ力量不足だったんだ。既に諦めかけたイッキに、悶えるロクショウがメダロッチから発声する。
「諦めるな、イッキ！」
「…ロクショウ！でも、もう」
「確かに今のままでは勝てんだろうが。まだ、私は全ての武器。それと、戦う意欲も……失っていない。勝利には…至らずとも……何か方法があるはず」
そうして、メダロッチからのロクショウの通信が途絶えた。
全く考えが無いわけでも無い。でも、あれは元々武器用として設計されたわけではない。威力は知れており、攻撃したこっちのほうがダメージは大きいかもしれない。これで倒せなければ、こっちの負けは確実。それでも、これしか方法が無い。
「ロクショウ！アンテナ！」
これを聞いたキクヒメ、イワノイ、カガミヤマは、何を今更と鼻で笑った。
だが、次の瞬間三人組は目を丸くした。何と、相手のヘッドシザースがあくまで索敵レーダーの補助の役割をする両角で、セリーニャに頭突きをかましたからだ。
セリーニャの顔面と胸部がへこみ、ロクショウの両角が根元から折れる。薄れゆく意識の中、セリーニャはロクショウの顔面を蹴っ飛ばした。
ピン！ロクショウの背面からメダルが外れるのが見えた。初めて見る、自分のメダロットが機能停止する様。ショックのあまり、イ

ッキの思考は停滞した。続け様、また、ピン！と、セリーニャのメダルが外れる音が聞こえた。
引き分け？見ている誰もがそう思ったが、審判の下した判断は違っていた。
「勝者、キクヒメ&セリーニャ」
呆然としているイッキの代わりに、アリカがミスター・うるちの判断に抗議した。
「ちょっと！どう見ても引き分けじゃない！」
「いーえ、セリーニャ選手はロクショウ選手より遅くメダルが外れました。あなたも見ましたよね？」
そう言われればそうだった。確かに、セリーニャのメダルが外れるのはロクショウより僅かに遅かった。
審判にそのことを指摘されて、アリカは悔しげに口をつぐんだ。
今だ呆然とするイッキに、キクヒメが手を差し出す。
「おー！何とスポーツマンシップ精神に乗っ取った行動」と、ミスター・うるちが歓喜した。
そうではない。イッキを含む生徒は裏に何かがあると読み取った。イッキが手を握り返すと、キクヒメがぼそりと呟く。
「形はどうあれ、あたいらの勝ち。これに懲りて、今度はでしゃばるんじゃないよ」
ある程度思ったとおりのことを言ってきたので、イッキはさしてショックを受けなかった。イワノイ、カガミヤマがセリーニャのメダルとパーツを拾うのを手伝い。イッキがロクショウの本体を抱えると、アリカがメダルを拾ってイッキに差し出した。
「ナイスファイト、イッキ」
いつもと違い、アリカの声音（こわね）は優しかった。

イッキとロクちゃん、負けちゃったのね。負けたら、こんな高い

物を買っておきながら負けるなんて。と、きつい一言を言おうと思っていたけど止めておこう。試合台からアリカちゃんと一緒に戻ってきたイッキの顔は悔しさと悲しさで一杯に溢れていて、メダロッチにいるロクちゃんに謝っていた。その態度を見たら、言えるわけが無い。

イッキは優しい子だけど、どこか中途半端というか事無かれ主義で、どんな物事に対しても、それなりにやればいいだろうという感じだった。

そのイッキが、今は一つの物事に真剣全力に考えぶつかっている。言わなくても、顔も見れば分かる。今のイッキの表情は、物事に全力に取り組んだ物しかできない者の顔をしている。

戻ってきたイッキの肩を抱こうとしたら、ジョウゾウさんが先にイッキの肩に手を置いて、「負けてしまったが、今のイッキとロクショウは本当にかっこう良かったぞ」と我が子の健闘を称えた。

私が言おうとしていたのに。この人、本当こういうところは抜け目なく思える。イッキはまだ立ち直れていないようだ。しょうがない、この単語なら少しでも現実に引き戻せるかもしれない。

「イッキ、今晩は大好物のカツカレーよ」

「…カツカレー…」

カツカレーという言葉に一番反応したイッキを見て、やっぱりまだ子供だなとチドリは思った。

5．おどろ山探索記　（打ち捨てられた者）（前書き）

ゲームの順序からすれば、本来はスカートめくり事件が来るべきであり、あの二組が登場する話でもありましたが、必要性が感じなかったのでカットしました。

5．おどろ山探索記　（打ち捨てられた者）

校内ロボトル大会は六年生の男子生徒が優勝を飾った。キクヒメのセリーニャはイッキとの試合での負傷がたたり、惜しくも優勝を逃した。

そのイッキとロクショウだが、校内ロボトル大会以降、挑戦者が増えた。負けはしたがスクリューズの子分二人に打ち勝ち、あのキクヒメとも善戦した光景は主に小学生の見物客の口から伝わった。

ゴールデンウィークまでの間、イッキは十二人とロボトルを繰り広げた。

まだまだ未熟な二人だが、十三戦して十一勝二敗した。一敗目は、学校の校長先生の愛機である侍型メダロットのナンテツとの対戦。伊達に歳は取っておらず、イッキとロクショウはコテンパンにされた。

二敗目は潜水系メダロットを持つ中学生が相手。相手の有利な川での戦闘だったから、徐々に装甲を削られて敗れてしまい、ロクショウの右腕を取られてしまった。

後日、アリカが男性型アンチシーパーツを持っていたので、イッキはアリカからカッパ―ロードの右腕を借りてリベンジを果たし、ロクショウの右腕を取り返した。

アリカは心地よくパーツを貸してくれたが、絶対裏に何かあるとイッキは直観した。ゴールデンウィーク前日の金曜日、学校が終わったあと、イッキはアリカに自宅へ来るよう言われた。

「ねぇ、イッキ。今度のゴールデンウィークさぁ、おどろ山に行かない？」

甘えた声を出しながら、アリカは部屋にいるイッキを逃がさないよう詰めていた。

「何で？」

「何でって？あんた、私に貸しがあるでしょ。だからさあ、おどろ

山の幽霊の正体を見抜く取材に同行してくれない？お父さんとお母さん、今回のゴールデンウィークはどこにも連れて行ってくれそうにないから」
イッキは迷った。
僕のパパも今回は忙しくて、夏休みにメダロッ島へ連れて行ってくれると約束した代わりに、今回のゴールデンウィークは我慢してくれと言った。どこへ行けそうにもない。といって、ずっと日がな一日ごろごろするのもどうだろう。イッキはゴールデンウィークの間、アリカと共におどろ山の幽霊調査に出かけることにした。
「やっりぃ！そうこなくっちゃ」
期待どおりの返事が聞けて、アリカは喜んだ。
ロボトルにおける借りを返すためでもあるが、イッキも俄然、ここ最近のおどろ山幽霊騒動の正体が何なのか知りたかった。
おどろ山は御神籤町の数少ない観光スポットの一つ。のっぺりとした山群の連なりで、登山には向かないが、豊かな自然があふれていて、休日での家族や友人を連れての気軽なハイキングになら持ってこいの場所。
事は今年の二月に起きた。小学生の男の子がメダロットを連れて山に入り、越冬中の昆虫を採集しようとしたら、「…置いてけ…。森を汚す機械を置いてけ…。…さもなくば……お前の魂をいただく…」と、不気味な声が森に響いた。
怯えた少年は、自身のメダロットを使って周囲に声の主がいないか探させた。すると、メダロットの悲鳴が上がった。少年が駆け寄ると、自身の愛機が無残な姿で樹の根本に倒れていた。
「…出ていけ…。さもなくば…今度はお前を喰う…」
すっかり恐怖した少年は、千切るようにティンペットからメダルだけを掴み、必死の思いで下山した。その日のうちに管理事務所から青年団に連絡が入り、少年の証言を下に、五名が少年のメダロットの本体を捜索したが、一切そのような痕跡は見当たらなかった。そのメダロットは旧式であり、少年がメダロット社の保険を利用し

て、パーツやティンペットを貰うための一芝居を打ったのではないかと、あらぬ疑いもかけられた。
三月、大学生のグループが四名入山した。内二名はメダロットを連れていた。大学生グループがおどろ山にあるおどろ池の近くを通ると、また、あの声が四人を脅した。
四人と二体のメダロットは鼻で笑い、二人一組に分かれて声の主を探した。そしたら、徐々に辺りに霧が立ち込めてきた。その霧に包まれているうちに、四人は気を失った。目が覚めると、二体のメダロットは忽然と姿を消していた。
同月。最初の被害者である少年のクラスメイト十人が、夜、全員メダロットを連れて山に入った。
一時間後、十人は恐怖に顔を歪めて山の管理事務所に助けを求めた。
十人の話を整理すると、何でも二本の黄色い角を生やした鬼が一匹に、宙に浮かぶ白い幽霊がわらわらと姿を現し、例の脅迫台詞を言った。子供たちは果敢にメダロットを使って攻撃したが、何と全てすり抜けた。攻撃は当たらず、徐々に狭まる幽霊たち。仕方なく、子供たちはメダルだけでも持って、本体を置いて下山した。これを聞いた役所も、ようやく重い腰を上げることにした。
青年団に自治体と協力して、町は一日に一回は山の巡回をさせた。また、子供一人の入山に夕方以降の入山も一時規制した。
四月。今度はその巡回者が被害に遭った。二人一組でメダロットを連れていたが、おどろ池の近くを通るとあの声がした。二人とメダロットは固まって行動した。その日は雨が降り、山は霧が立ち込めていた。二人は警戒して歩いていたが、何故か頭が重くなり、気付くと眠っていた。目覚めると、後には何も残っていなかった。
そして、このことは「おみくじ新聞」だけでなく、ついには全国紙とニュースにも取り上げられてしまい、インターネットでも話題を読んだ。おかげで、ゴールデンウィーク前日だというのに、ハイキング客を相手にした宿泊業やお土産による売り上げが昨年より落

ち込むことが予想された。悪い噂が広まり、町の安全のために買ったメダロットも一体奪われて、役所は椅子に座って頭を悩ますばかり。

一体の汚れたメダロットがおどろ池近くに横たわっていた。そのメダロットは騒動が起きる前からそこにあり、とある者たちはあまりの汚れ具合から、それを見つけても触るのを躊躇っていた。

男性型ティンペットとパーツ一式を付けたそのメダロットは機能停止しているが、メダルは装着されたままなので、まだ生きていた。それは、ちょうどおどろ山のごみが集積しているところにあり、山狩りの者たちも朽ち果てたその存在を無視した。

ふう。エネルギーはすっからかんでも、一応、思考能力とかは失われないみたいやな。それにしても、人間って酷いもんやほんまに。爺さんが死んだら、エネルギーを抜いて山にぽいやもんな。そんでも、憎み切れへんのは、爺さんというお人の存在があるからやろうな。けけけ！まっ、このまま残り一生、しょうもないこと考えながら朽ちるのもええかも。

にしても、あーあ…。何や、じゃりでもいいから興味持って拾うてくれる人はおらんかな。無理やろな。見えるわけじゃないけど、多分、こんなに朽ち果てたもん拾うような物好きおらんやろ。

そのメダロットは一旦、思考世界での言動を打ち切り、心を無にした。

ママにアリカとおどろ山に行くことを話すと、ママは陽が落ちないうちに帰ってくるよう言い渡し、お弁当を渡してくれた。お弁当を渡すときのママの目が、変というか、妙に浮いているような気が

したけど、何でかな？イッキが家から出たあとも、チドリはちょっと嬉しげに浮ついた顔をしていた。
「ふふ。イッキがアリカちゃんとデートねぇ」
このとき、イッキは何故かくしゃみをした。
歩いて三十分後、イッキたち四人はおどろ山前に到着した。去年のゴールデンウィークでは、ある程度の人数が見受けられたが、今年は物寂しい。イッキたち四人以外に、敬老会の人たちが八人と、山伏が数人ほど。おどろ山は意外なことに歴史が古く、何とかの高名な和尚さんが眠るというお岩さんがあり、たまに修験者などが訪れたりする。
入山する前、管理事務所のおじさんが注意を呼びかけた。
「もう知っているかもしれないが。危険だから、夕刻までには必ず降りてくるんだよ」
四人は小さく会釈して、入山した。
「幽霊といっても、こんなまっぴるまから出るわけもないわね」
最初はジャーナリストとして身構えていたアリカも、すぐに足取りが軽くなり、ブラスと手を組んで楽しげに山中の眺めを見渡していた。イッキはロクショウと手を組まなかったが、のんびりとした気持ちで歩んだ。
「幽霊騒動で騒がしいと聞いていたが。いざ現地に来てみると、とてもそうには思えませんな」
イッキはロクショウの言ったことに同意した。山は日当たりが良く、木漏れ日がまた風情を醸し出していた。幽霊はもちろんのこと、とても鬼とか人魂が出そうな気配はしない。陽が落ちれば、こののどかな景色も違った物に見えるかもしれないが。
先を行くアリカが振り返った。
「イッキ、おどろ池に行ってみましょ。幽霊の目撃情報が一番はっきりしているのはそこだから」
おどろ山にあるおどろ池は、山の中腹地点で曲がってずっと七百メートル登った先にある。池は大よそで直径四十メートルほどあり、

真ん中は土が盛っていて小島のように見える。湧水が出る池で、真夏日においても涼しさ感じるおどろ山名所の一つ。だが、今は幽霊騒動とは別の問題を抱えている。池を見たイッキは顔をしかめた。

「…話には聞いていたけど…。ちょっと、酷いな」

綺麗な湧水の池には、ぷかぷかと空き缶にビニール袋などのごみが目立つ。おどろ山は牧歌的な山道とこの池が見所。そのせいか、こうして心無い観光客がごみを捨てていくときがある。町もこの山ばかりに金を回すわけにはいかず、ボランティアを募集して秋に年に一回の大掃除でごみを集める。それでも、こうした不法投棄が跡を絶たない。

イッキたちはここらで一休みした。少しごみが気にかかるが、冷えた山頂の空気がちょうど火照った体を冷やしてくれて、心地よい。イッキとロクショウは池の周囲を徘徊した。

池を半週したところは急峻。樹が懸命に張り付いているようだ。その下を見下ろすと、薄汚れた物が樹の根元にもたれかかっていた。イッキとロクショウは互いに見合った。

「あれって、メダロットかな？」

「泥で汚れ、あちこち苔やキノコが生えていますが、恐らく」

イッキたちの様子に気付き、アリカとブラスも半週地点まで行き、下を覗いた。イッキはペンライトの光を当てた。酷い有様だが、間違いなくメダロットだ。近寄らないと分からないが、脚部の形からして飛行タイプと思われる。

「こんなところにポイするなんて！あんまりよ！」

アリカが怒り心頭のあまり吠えた。メダロットが捨てられることは今年が初めてではない。去年も、三体のメダロットが山に捨てられていた。大抵の場合、動けないようエネルギーを抜かれて捨てられるので、可哀想なことにメダロットたちは何もすることができなくなる。

そして、今イッキたちが見ているメダロットのような末路を迎える。

「まだ、あいつ動けるかな？」
「イッキ、気持ちは分かるけど、それは止めといたほうがいいわ」
アリカはイッキが助けることに反対した。
「絶対とは言い切れない。けど、エネルギーを抜かれても微かに意識はあるらしいわ。それで、自分たちが捨てられたことも何となく分かるみたいよ。だから、仮に彼、彼女を助けたとしても、人を攻撃するかもしれないって」
メダロットの頭脳であるメダルは謎が多い。機械のボディが無ければ動けないはずなのに、メダロットはその状態でも思考による生体活動を続けられることが最近、判明した。イッキとアリカも週間メダロットの視聴者なので、そのことはよく知っているつもりだ。
イッキはアリカの言うことを理解していた。ただ、あの朽ち果てた存在を一度見た以上、手を差し伸べずにはいられなかった。
「危険かもしれない。…それでも、頼むよアリカ。今回だけ！今回だけは、見逃してくれないか？」
「見逃すって…。助けたあと、あんたあの子をどうするつもり？まさか、里親でも募集するの」
イッキはしばし考えたのち、おもむろに顔を上げた。
「僕が…引き取るよ」
「でも、あんたのお父さんは許しても、お母さんは厳しいから駄目なんじゃ」
「何日かかっても説得してみせるよ」
イッキは真っ直ぐにアリカを見据えた。いつものイッキらしからぬ真剣な眼差しに、アリカはなかば自嘲気味に首を振った。
「しゃあない。協力してあげる。もしかしたら、幽霊騒動の犠牲者の線もありうるし」
「ありがとう、アリカ」
そうと決まったら、次にどう救出するかだった。取っ掛りは多いが、所々ぬかるんでいるので安全ではない。
「アリカ殿、イッキ。その役目、私とブラスに任せてくれないか？

仮に全員で降りているところを見られたら、あらぬ疑いをかけられるかもしれん」
今すぐ来ないだろうが、他の観光客が訪れない保障はない。ロクショウの言うとおり、全員で降りるところを目撃されたら、言い訳に時間がかかる。というわけで、ロクショウとブラスの二体であのメダロットを引っ張り上げることにした。
「ねぇ、皆さん。あの櫟(くぬぎ)に絡みつく蔓は使えるかもしれないわ」
ブラスの見る方角には太めの櫟があり、ちょうどイッキの小指ぐらいの太さの蔓が絡まっていた。ロクショウは櫟を傷付けぬよう、チャンバラソードで慎重に蔓を切り落とした。ロクショウは肩に蔓を巻いて、まるで軽業師のごとき軽快な動きで急峻を下り、あのメダロットの体に蔓を巻き付けた。イッキ、アリカ、ブラスが例のメダロットを引き上げ、ロクショウが朽ちた体を後ろから押し上げて、樹などにぶつからぬよう補正した。
「皆、ありがとう」
イッキは心を込めて礼を述べた。
イッキ、アリカは生えた植物を手で払いのけ、池で濡らしたタオルでメダロットの体を拭いた。大体検討は付いていたが、そのメダロットは間違いなくトンボ型メダロットのドラゴンビートルだった。ドラゴンビートルは重力系攻撃のメダロット。重力攻撃を得意分野とするメダルは「クマ」だから、普通に考えたらクマメダルが装着されているかもしれない。
イッキは背部の歪な形になったメダル装着部のハッチを開き、メダルが装着されているか確認した。想像どおり、クマメダルが装着されていた。しかも、メダルは一段階進化していた。
イッキたちは下山した。途中、他の人や管理事務所のおじさんにとがめられたら、調子に乗ってはしゃいでいたら、樹などに体を打ち付けて機能停止したと誤魔化した。

5．おどろ山探索記　（打ち捨てられた者）（後書き）

ティンペットとメダル入手方法に、入手メダルが原作と異なります。
次回から、ゲーム本編でも活躍するあの二人と二機が初登場します。
また、スカートめくり事件は何らかの形で挿入したいと考えています。

6．おどろ山探索記二（少年と少女）

イッキたちが下山してから一時間経ったあとのこと。
管理人の男性が山の様子を見に行こうとしたら、女の子が助けを求めて事務所に駆け寄ってくる。
「君、どうしたのかね！？君？」
管理人は少女に声をかけた。少女は涙ぐんで管理人の傍まで寄り、いじらしげに顔を上げた。管理人の男性は目を見張った。ピンクの洋服シャツを着た少女は一言で表せば、美しい。程よく丸みを帯びた顔立ちに、ふんわりと柔らかいオレンジがかったツインテールの金髪、少女漫画のように澄んで潤んだエメラルド色の瞳。そして、全身から漂う儚げな雰囲気が、管理人に少女を守ってあげなければという気持ちを湧き起こさせた。管理人はガラス細工でも持つような手付きで、少女の肩に優しく手をかけた。
「もう大丈夫。ここは安全だ」
「本当ですか？」
両手を握り締め、ゆっくりと潤んだ瞳で見上げる動作がまた可愛らしい。
「ああ、おじさんは嘘をつかない。ところで、君の名前は？そして、一体何があって助けを叫んだのかい？」
「…ナースちゃんが…。ナースちゃんが…連れ去られちゃったんです」
「ナースちゃん？」
管理人がオウム返しに聞くと、少女はメダロットですと答えた。
「君はそのとき、謎の声とか変な物を目撃したかい？」
「いえ、変な物は見当たりませんでしたが、変な声なら…。少し、落ち着きを取り戻したましたから、詳しくお話ができそうです」
「そうか。では一旦、中で座って落ち着いてからにしよう」
管理人は事務所の中に少女を招き、椅子を差し出した。事務所内

は小型の液晶テレビや小型冷蔵庫、他、里山のパンフレットに本など幾つか細々とした物が置かれていた。
「さ、あまり綺麗なところではないが。ひとまず、座りなさい」
「ありがとうございます」
少女は丁寧に謝辞を述べて着席した。その座る動作からして、管理人に少女が深窓生まれの者と悟らせた。
少女は順を追って、自己紹介とここに駆け付けた経緯を話した。
「私の性は純米、名はカリンと申します。御神籤町のお隣のメダロポリスに暮らしています。ここにきたのは、以前から一人で山に登るというのはどんなものか知りたくて、この近隣のおどろ山に来ました。山の中腹地点近くまで下山したとき、がさごそと、茂みから物音が聞こえました。ナースちゃんが茂みの裏に様子を見に行くと…ナースちゃんが悲鳴を上げたんです！私、急いでナースちゃんの身を確認しようとしたら、突然、この世の物とは思えない声で『…置いてけ…。森を汚す機械を置いてかなければ…お前の魂を喰らう…』と言われました。…でも…ナースちゃんは私の友達です。私は勇気を出して茂みの裏を覗くと、そこにはナースちゃんの姿がありませんでした。そしたら、今度は同じ声で不気味な笑い声がしたもので…。…私…」
カリンという少女はまた涙ぐんだ。管理人はせかさず、少女が自ら話を再開するのを待った。少女は震える手でハンカチで涙を拭うと、小さく咳払いした。
「…こほん。すみません。…私、怖くてナースちゃんを置いて逃げてしまったのです…」
カリン少女はそこで言葉を切った。色々と詳しく聞きたいが、一つ言えることは、幽霊騒動における新たな被害者が出た。

今日もまた、イッキ、アリカ、ロクショウ、ブラスの四人はおど

ろ山に向かった。拾ったメダロットは昨日、帰りにメダロット研究所に立ち寄り、事情を話すと、メダロット博士はあのメダロットの修復を快諾してくれた。
「ティンペットまで傷ついておるのう。わしも忙しいからな…。そんな不安そうな顔するな。今日の夜にはちゃんと終わらせておくから、日を改めて迎えにきなさい」
明日か。今になってイッキは少々不安になった。両親の前に、あのメダロットが僕を受け入れてくれるかどうかが問題だ。だが、引き下がる気はない。こうなった以上、何としてでも彼、彼女を迎え入れたい。ただの偽善かもしれないけど…。
「イッキ、どうして落ち込んでいるの？」
アリカが心配そうに僕の顔を覗いていた。自分でも気付かないうちに、顔を下に向けていたようだ。
「何でもないよ」
「あのメダロットのことでしょう」
イッキは思わず背筋を伸ばした。それを見て、アリカはやっぱりと言った。
「今更、悩んだところでしょうがないでしょう。あんた一人で説得が無理なら、私も拾うのを協力したちゃったし。いざというときは、それなりに手伝ってあげる」
アリカのこういう積極的な面はときとして疎ましくも思うが、こういうときには頼り甲斐がある。ただ、今回のことは自分が撒いた火種。イッキは出来る限りアリカの手を借りないよう心がけた。
四人はおどろ山まで来て、いざ入山しようとしたら、管理事務所のおじさんに止められた。
「駄目駄目。せめて、大人の人も連れてきなさい」
「昨日までは入って良かったのに、どうして！？」
アリカがおじさんに聞いた。
「いやな。実は昨日、小学生ぐらいの女の子が被害に遭ったんだ。昼間から幽霊なんて出やしないだろうが、安全の為、ゴールデンウ

ィークいっぱいまでは高校生以下は保護者同伴じゃなきゃ入れないことになった。というわけで、今度から保護者と一緒に来てくれ」
イッキはアリカが噛み付くと思ったが、意外にもアリカは大人しく引き下がった。おじさん一安心していたが、イッキは絶対にアリカはこの程度のことじゃ諦めないことが分かっていた。イッキはアリカに連れていかれるまま、おどろ山周囲を歩いた。アリカが足を止めた。入山口から二キロ離れたところ、見回りの人もいなくて、辺りに人家もなく人気が無い。フェンスはよく見かける緑色のもので、上に沢山の棘が付いた鉄条網も巻かれていない。
イッキはアリカにおずおずと尋ねた。
「アリカ、まさかだけど、ここから入山する気？」
アリカは満面の笑みで答えた。
「ええ、そうよ」
「アリカちゃん、それはしていけないことじゃ…」
ブラスはアリカを止めようとしたが、アリカはもうブラスの言葉にすら耳を傾けなかった。
「ジャーナリストたる者、この程度のことで根を上げてちゃやってられないわ。仮に見つかっても、まだ子供だから、小一時間お説教されるだけで済むわ」
「…僕は根を上げてほしい…」
「イッキとロクショウは来なくていいわ。これは、私一人の問題だから」
アリカはそう言って、フェンスを越えた。
「しょうがないわね」
ブラスはまるでわがままな妹に手を焼くお姉さんのようだ。ブラスも遅れてアリカの後を追った。
「どうする、イッキ？アリカとブラスの二人を追うのか？」
「…うん、行こうと思う。アリカには昨日の恩があるし、それにブラスだけだと、幽霊たちに襲われたとき対処できそうにないし」
イッキとロクショウも、仕方なしにフェンスを越えての入山をし

た。しばらく山を登ると、何とスクリューズと出くわした。スクリューズの三人は血相を変えていた。スクリューズが口を開く前に、アリカがいち早く喋った。
「ちょっと！あんたたちが何で山にいるわけ！」
「それはあたいらの台詞だよ」
キクヒメはポケットから櫛を出して乱れた髪を整えた。スクリューズとそのメダロットの様子はおかしかった。イワノイ、カガミヤマは自身の愛機のブルースドッグと鋼太夫を背に抱き、キクヒメの愛機、セリーニャはぼろぼろだった。
「一体何があったの。ていうか、あんたら何の目的があってここにきたの」
「だから、それはあたいらの台詞だって言ってるでしょ」
イワノイが口を挟んだ。
「姉御、無駄話している暇ありやせんぜ。あいつが来るかもしれません」
「あいつ？」
「お前らー！」
そのあいつが高らかに叫んでスクリューズを追いかけてきた。キリリとしたきつく歪められた意志の強そうな二重の瞳と、端正な顔立ちにヒカルとよく似た髪型をしたイッキたちと同い年ぐらいのその少年は、怒りも露わにスクリューズを睨んだ。少年の後ろには、メダロットが控えていた。
「あれは…！！」
イッキ、アリカは目を奪われた。名も知らぬ少年のメダロットは、ライオン型メダロットのウォーバニットだった。昨年、改良型ヘッドシザースと同時期に発売された射撃タイプのメダロット。装甲、戦闘能力のバランスが取れており、パーツ一式だけでも現在の最低市場価格で十三万円もする。セレブご用達と言っても過言ではない超高級品。その分、扱いが難しく、玄人向けのメダロットでもある。
イッキは思い切って少年に聞いてみた。

「その、まさか。それ一体だけでこの三人を…？」
「何だお前は」
高飛車な物言いにむかっときたが、イッキは名乗り上げた。
「僕、天領イッキ。ギンジョウ小学校の三年生。で、隣にいるのはヘッドシザースのロクショウ。…えっと、それで君…は、こいつらに何をされて怒ったの？」
「イッキといったな。ひょっとして、こいつらの関係者か親玉か？」
「僕がこいつらの親玉？」
「お前ら！さっきから、俺らのことをこいつら、こいつら呼ばわりしやがって！俺ら、泣く子も黙るスクリューズっていうんだぞ」
イワノイが呼び捨てに耐えられず、横槍を入れた。二人とも、イワノイは無視して話を進めた。
「で、君はスクリューズに何かされたの？」
謎の少年は、じっとスクリューズとイッキたちの様子を見た。そして、少なくともイッキたちとスクリューズとやらは、そこまでの仲ではないことだけは理解した。
「コウジさーん！」
また、誰かがこちらに来た。
「またくるの？」
アリカはいい加減にしろという感じで言った。イッキもまたかと思ったが、その誰かが視界に入った途端、その思考は彼方へと消えた。ピンク色のシルクの洋シャツを着た、オレンジがかった金髪ツインテールの美少女が、謎の少年のものと思わしき名を呼びながら、一触即発のこの場にきた。
「カリン！しまった。頭に熱が上って、君を置いて行ってしまうなんて…何たる失態！」
コウジという少年は自分の失敗を悔やむように拳を握った。少年の後ろに控えるメダロットが、初めて口を開いた。
「コウジ、俺もカリンのことをうっかり忘れてたから、お互い様だ。次からは、互いに注意しよう」

「…アーチェ…」
若干、わざとらしさを感じると展開と会話のおかげで、四人は少年がコウジという名前、彼の愛機の名がアーチェ、そして、カリンという美少女がコウジという少年の関係者だということを知った。
アリカは問い詰めるようにキクヒメに視線を据えた。
「キクヒメ。ひょっとして、あんたたちあの女の子にまた卑怯な勝負を挑んで、彼を怒らせたんでしょう」
「やっぱりそうなのか！」
荒ぶるコウジ少年。コウジ少年に同調するように、アーチェというウォーバニットも二つの長い銃口が付いた右腕をスクリューズに向けた。キクヒメは観念して、両手を上げてぶらぶらと動かし、降参の意を示した。
「わーった、わーった。こっちの負け。理由も話すから、それで勘弁」
コウジは荒ぶる気持ちを抑え、ウォーバニットも銃口を下げた。だが、姿勢はいつでも発射しやすいよう崩さなかった。
スクリューズの話を掻い摘むと、三人は幽霊騒動におけるパーツの隠し場所を探しにきた。正義のためとかではなく、あくまで自分たちの物にするためである。そしたら、コウジとカリンの二人に出会った。互いに何があってここに来たか聞きあい、だんまりを決めて行こうとしたら、コウジが聞こえよがしに下らないと言ったのが癇に障り、勝負を挑んだら返り討ちに遭った。
イッキもそうだが、アリカにコウジも心底呆れかえっていた。
「挑まれた勝負は受けて立つ！それ以上に、俺はそいつらの火事場泥棒のような行為が許せねぇ」
「そんなに叫ばないでよ。もう懲りたから、これで勘弁」
「待て。そのリーダー機のペッパーキャットはまだ機能停止してないぞ」
キクヒメは困ったように頬を掻いた。そして、イッキを見て怪しげにほくそ笑み、イワノイ、カガミヤマに視線を送り、二人は無言

で了解した。
「あーっ！！！後ろー！！！」
三人は同時に叫び、コウジとカリンの後ろを指した。思わず、スクリューズ以外の者は振り返ってしまった。気付いたときには遅し、スクリューズの三人はメダロットのパーツを自宅へメダロッチに収納にし、とんずらをこいていた。
「じゃ、後は任せたぜいイッキ」
キクヒメの捨て台詞が虚空に響く。イッキ、アリカ、ブラスは肩を落としたが、コウジとアーチェはその気のようだ。二人はイッキとロクショウににじり寄る。
「俺はどっちでも構わない。イッキといったな。お前がやる気なら、俺は受けて立つぜ。安心しろ。さっきの奴らには援護役としてもう一機も戦わせたが、お前との戦いでは、このアーチェ一体だけだ」
「君がその気なら、私もその気になろう」
イッキが断ろうとしたら、今度はロクショウが自ら戦いを申し出た。前にも述べたが、常日頃は冷静なロクショウも戦いとなると人が変わる。それも、援護役を付けたとはいえ、スクリューズ三人三機を二機で追い返したほどの相手だ。やる気を見せるロクショウに対し、アーチェはどこか涼しげな感じだ。
今日は何となく嫌な予感がしていたが、その予感は当たっていた。しょうがない。一度乗りかかった船だ。やるだけやってみるか…。
「コウジさん」
展開についていけないカリン少女はコウジを止めようとしたが、コウジは「カリン、大丈夫。俺は負ける気はないから」とカリンの制止を先に止めた。
「はいはい！私、審判やる」
審判役を買って出たアリカは、いきなりロボトルファイトと言った。イッキは吹っ切れた。
ええい、ままよ！もう、やけくそだぁ！矢でも幽霊でもなんでもこい！

ばばぁん！ばばぁん！
ウォーバニットの右腕から、高出力の弾丸が二発発射される。ロクショウは避けるのに必死だ。三対二とはいえ、あのスクリューズを相手に優勢に立ち回っていたのだ。手強い。連続した鋭利なライフル攻撃に、あのロクショウが反撃に転じられないでいる。
コウジが指示を出し、ウォーバニットのアーチェは左腕のマシンガンも撃ち始めた。二発、右足首と右腕上腕部に食らったしまった。威力の低いマシンガンだったので、幸い、腕と脚はまだ壊れていない。右腕のライフルなら、一発でおじゃんになっていた。やはり、コウジはただの物頼りではない。扱いが難しいウォーバニットのパーツを使いこなさせているのだから、腕前は本物だ。
「アーチェ！チャージ準備」
アーチェの動きが止まり、ロクショウが攻撃に出る。
「一、二。ゴォー！」
ロクショウのソードがアーチェを襲う。しかし、アーチェは常識では考えられないほどのスピードで、ロクショウの一刀を避けた。いや、ウォーバニットの雄ライオンの鬣（たてがみ）を模した部分が二箇所、枯葉に落ちた。
コウジが感心そうに呟く。
「へぇ。二秒の隙があったとはいえ、よく当てられたな。だが、次はそうはいかんぞ」
ウォーバニットの頭部の能力は自身のスピードを急上昇させる。その分、エネルギー充填にタイムロスがあり、その隙に決定打を浴びせられなかったのが惜しい。
ウォーバニットの掃射は益々激しさを増し、ロクショウは確実に弾が当たっていた。スピードか。でも、そこに隙ができるといいんだけどな。イッキはロクショウに逃げの一手を選ぶよう、命令した。

ロクショウはとにかく逃げ回ったが、スピードアップしたアーチェからは逃げられない。ロクショウが迫るアーチェに小石を投げた。
ウォーバニットは小石を撃った。小石は大破した。もう、駄目だ。そのとき、奇跡が起きた。何と、小枝がウォーバニットのカメラアイにぶち当たった。右腕ライフルの弾丸は小石を大破し、樹の小枝を折った。その衝撃で、小枝はアーチェのほうに飛んできたのだ。アーチェの動きが止まる。今しかない！
イッキの号令と、ロクショウの動きはほぼ同時だった。ロクショウのハンマーがアーチェの右側頭部を襲う。アーチェは横ざまに倒れ、背中からメダルが飛んだ。
「そんな馬鹿な！」
コウジよりも、そう叫びたいのはイッキだった。実力的には、自分たちより上のはずのコウジとアーチェに運で勝ってしまったのだから。イッキはどう感情を表現すれば分からなくなった。
口を開けっ放しの二人にお構いなく、アリカはイッキとロクショウの勝利を告げる。
「イッキ、ロクショウおめでとう！勝負は時の運というし。運も実力の一つと考えれば、あなたたちのほうが強かったということよ」
「ふっ…。そのとおりだな」
アリカの言動に納得したように、コウジは冷静さを取り戻した。
「例え小さくても、あのスピードで対象物に当たるのはまずい。だから、石や枝を投げつけてきたら、すぐに撃ち落とすよう指示を出しておいた。だが、それによって後方の物まで飛んでくる計算をしていなかったのは、僕のミスだ。…というわけでだ、俺の負けだイッキ…？だっけ？君にアーチェの右腕を進呈しよう」
「えっ？いいの？今の別に真剣ロボトルしたと決めたわけでもないし」
「いいんだ。この分だと、君らはあの三人と無関係のようだし。迷惑料も兼ねてだ。さあ、受け取ってくれたまえ」
直接戦ったのはロクショウのほうだし、やると言い出したのもロ

クショウ。つまり、ロクショウの取り分である物を自分が断るのは、コウジにもロクショウに対しても失礼だと思い、イッキはパーツを受け取ることにした。
アリカがコウジ、カリンに聞こえるよう耳打ちする。
「熱い友情の中悪いけど。人がきそうよ」
全員、耳をそばだてた。
「ここいらだな？銃の音とかが聞こえた場所は」
「ああ。多分、どっかの馬鹿がロボトルでもしているのかもしれん」
四人は顔を見合わせて、イッキとアリカはロクショウを。コウジとカリンはアーチェを抱え、二手に別れた。
「コウジ君と言ったわね。機会があれば、合流しましょ。私、修復系パーツを一つ持っているから」
「何故？」
「あなたたちの目的も幽霊でしょ。だから、情報交換も兼ねて、ね」
コウジとカリンはその場から去った。何も言わなかったが、アリカは親指と人差し指で丸を作り、「片目瞑ってオーケーって返事した。おきざなこと」と言った。そういえば、慌てていたので、まだウォーバニットのパーツを貰っていなかったな。

6．おどろ山探索記二（少年と少女）（後書き）

ようやく、カリンとコウジの二組登場。バージョンが違うので、スミロドナッドの出番はなし。話の都合上、カリンの愛機であるセントナースの出番も無しです。
次回でおどろ山回の決着をつけるよう頑張ります。

7．おどろ山探索記三（謎の集団）（前書き）

一話でまとめるため、とんでもない文字数になってしまいました。先にカブトバージョンを完成させたので推敲作業がはかどり、カブトバージョンの誤字脱字の訂正にも役立てた。

7．おどろ山探索記三（謎の集団）

イッキたちはどうにか山頂まで着いた。おどろ山は緩やかな傾斜だから、子供の足でも普通に登る分にはあまりきつくない。だが、見つかると面倒なので、急ぎ足で登ったイッキたちは汗だくで肩で息をしていた。少し遅れて、コウジ、カリンも到着した。

全員、人に見えず、尚且つシートが無くても座れる木陰がある場所を選んだ。コウジが腰のベルトに付けたストラップ型の水筒入れに入れたペットボトルを取り出し、一口飲んでから、用件を切り出した。

「アリカと言ったな。さっきの約束どおり、情報交換だ。あと、イッキ」

「うん？」

見ると、コウジがアーチェの右腕を差し出した。

「さっき渡せなかったから、今この場で受け取ってくれ」

イッキはこくりと頷き、ありたがくアーチェの右腕を戴いた。陽光の下で座禅するロクショウが微かに反応した。喜びをかみしめているのかもしれない。

「ねぇ、コウジくんと言ったわね？修復はしなくていいの？」

アリカがさっきの約束の件を聞くと、コウジはウォーバニットのアーチェを転送した。アーチェは、ほぼ無傷な形でそこに立っていた。

「回復パーツ…じゃなくて、予備のパーツも持っているとか？」

「ああ、そのとおりだ。二セット予備がある」

「じゃ、計三セット！」

イッキとアリカはずっこけそうになった。超高価なウォーバニットのパーツを持っている時点でコウジが金持ちだということは分かったが、予備の一式が二セットもあるとはかなりのぼんぼんと考えられる。

カリンは以前から一人で野山に出かけてみたかった。愛機の看護婦型メダロットのセントナースをお供に近郊のおどろ山に向かい、例の幽霊と思しき者にナースが連れ去られた。コウジは連れ去られたナースの心配もしたが、それ以上にカリンを怖がらせた者に怒り、カリンもナースを連れ戻したい一心で山に向かった。しかし、子供だけの入山は事務所のおじさんに止められてしまい、仕方なく裏側のフェンスを越えて入山した。そして、ことは前回起きた顛末にまで繋がる。

一方、イッキとアリカから話せることは特になく。ニュースなどで既に語られているようなものばかりで、コウジはやや不満気だった。

「お前たちの情報はそれだけか。それなら、昨日、ネットで調べた情報とあんまり変わらないな」

「ごめんね。一方的に話させちゃっただけみたいね」

アリカが珍しく詫びた。

探索は振り出しに戻り、一同、落胆したとき。機械じみた声が聞こえた。

「ヤナギー！ヤナギー！ドコにイルのー？いるなら、カンちゃんもイルからお返事してちょーだい！」

四人と三機は隠れて様子を窺った。色んなパーツを付け合せた飛行メダロットが、「ヤナギ」という人物へ懸命に呼びかけていた。そのメダロットの近くには、「カンちゃん」と思しき腰の曲がった老婆がいた。

四人と二機は小声で会話した。

「お子様でしょうか？お孫様でしょうか？」とカリン。

「男にも聞こえるけど、女に聞こえないこともない」とイッキ。

「試しに聞いてみる？」とアリカ。

「子供だけで来ていること突っ込まれるかもしれないから、もう少し様子を見てからのほうがいい」とコウジ。
「誰かしらねぇ？」
ブラスにいきなり話を振られて、アーチェは首を捻るしかなかった。
「私が行こう」
ロクショウが自らあの一組に話しかけることにした。
「失礼。そちらのご老体と、そこの空を飛んでいる方。誰をお探しかな？」
「君は誰？」空を飛ぶメダロットが尋ねる。
「ロクショウと申す」
「ロクショウ。中々カッコイイ名前だね。僕、タロウ。カンちゃんと一緒にヤナギを捜しにきたんだ」
今がその機会と、イッキたちは白日の下に身をさらした。
おばあさんとタロウと名乗るメダロットは驚いた。
「あれまあ！お前さんたち、今は子供だけで山に入っちゃあかんぞ」
コウジの言ったとおり、おばあさんそのことを指摘した。
「おばあさん。私、友達を連れ戻しにきたんです」
「何！？どういうことぞな」
イッキ、アリカがどう言い訳しようか思考していたら、カリンが正直に事を話した。
「ふむふむ。なるほど、なるほど。お友達のメダロットを助けるために来たと、な」
「一つ聞いてもよろしいでしょうか？おばあさん」
「娘さんや。私を呼ぶときは、できればカンちゃんと呼んでおくれ」
「分かりました。では、カンちゃんさん。先ほど、そちらのタロウさんがヤナギという方を捜しておられましたが、ヤナギとはどなたですか？」
カリンの質問に、カンちゃんというおばあさんにタロウも押し黙った。

「すみません…。聞き入ったことをお尋ねしまって」
「…いや…いいんさ。どうやら、娘さんとそのお友達がここに来た動機と私の動機は同じようだし。役に立つどうか分からんが、お前さんたち、一つこの老婆の話を聞いてくれないかい？」
カリン以外の者は顔を見合わせて同意し、このカンちゃんという人の話を聞くことにした。カンちゃんばあさんはビニール製のシートを敷き、座るよう促した。
「あ、どうも」と、人もメダロットも一礼を述べてからシートに座った。正座をすると、カンちゃんは「あー、かめへん、かめへん。足伸ばすなり、股広げるなりかまへん」と、自ら正座を崩した。それに倣ってカリン以外の者は皆、楽な姿勢を取った。
「ほれ、飲みんさい」
カンちゃんは全員に冷たい麦茶を配った。冷たい麦茶は不安と一緒に喉の奥まで流れ込んだ。子供たちの気持ちが落ち着いた頃を見計らい、カンちゃんは語り出した。
ここでは、カンちゃんの語りを要約する。カンちゃんはメダロットたちと一緒に暮らしているが、どこかで孤独を感じている。だから、偶然とはいえ久しぶりにじっくりと人と話せることが嬉しくて、本題とは無関係なことまで話してしまう。正直で純なカリンは喜んで耳を傾けたが、それ以外の者は、ためらいがちに語りを本題へ戻すように言った。
カンちゃんにはナツコという孫娘がいる。ナツコは高校生のときに両親が他界し、祖母であるカンちゃんが引き取った。
多感な時期に両親を亡くし、ナツコは度々苛立ちを周囲にぶつけ、よくトラブルを起こした。そんなナツコを支えたのがカンちゃん以外にもう一人いた。それが、機体名称がミスティゴーストという幽霊型メダロットのヤナギ。カンちゃんとヤナギの支えもあり、ナツコは頑張って大学に進学し、一流のキャリアウーマンとして成長した。
そのナツコが長期海外転勤して二日経った日のこと。ヤナギが忽

然と姿を消した。それから程なくして、巷で話題の幽霊騒動を耳にした。カンちゃんは悪い予感がして、毎日拾った野良メダロットたちに捜索させて、自身も週に三日、おどろ山へと足を運んだ。
「ヤナギは間違ってもこんなことをする子じゃないよ。ヤナギもきっと、どっかの幽霊だかを使った奴らに去らわれたに違いない」
カンちゃんはヤナギも被害に遭ったに違いないと言っていたが、反面、ヤナギが一枚絡んでいるのではないかという不安も読み取れた。

イッキたちは小半時ほど雑談したのち、カンちゃんたちと別れた。意外なところで有力な情報を得た。最初の被害者、あるいは、ヤナギというメダロットが加害者の可能性がある。
おばあさんが警察に連絡しないのは、どちらか判別しかねているからだろう。
「あれほどのご高齢だと、山に登るだけでも一苦労だろうし、心労も大きいだろうな」
ロクショウが今日初めて会ったばかりのカンチャンを心配しているようだ。
「はい、注目！」
アリカが先頭に躍り出た。
「何だよ、アリカ？」
イッキがアリカの意図を聞いた。
「あのさあ、私の推測を聞いてほしいんだけど」
「時間の無駄にならないか」
情報交換の件を気にしているのか。コウジの腕を組んだ態度から、アリカの推測を拒んでいることが知れた。
「そう言わないでコウジくん。拝聴の価値はあると思うわ」
イッキやコウジに有無を言わさず、アリカはまくしたてるように

推測を並べた。
「いい、第一の犯行から昨日の犯行まで、全ておどろ池とそこに通じる道でおきたわ」
「だから、そこに行こうと…」
「イッキは黙ってて。あと、コウジくんも。そこで、私思ったんだけど、もうおどろ池とその周辺では幽霊は出ないと思うの」
「何故ですか？」
カリンの質問に、アリカはグッドタイミングな突っ込みと言わんばかりににやついた。
「単純なこと。犯行現場として、おどろ池は目立ち過ぎるからよ。本当の幽霊ならどうしようもないけど、人が関わっていたとしたら、話は別。私が犯人なら、昨日のカリンちゃんを目途に移動するわ」
「じゃあ、ナースちゃんは…もう…」
「気を落とさないで。おどろ池周辺での犯行はカリンちゃんが最後であって、おどろ山での犯行は後一回か二回ぐらいする可能性がある。考えられる場所はおどろ沼よ。山頂もありうるけど、あそこだとあまりにも人の出入りが多い上に、見晴らしもいいから実行するにはリスクが大きい場所。でも、湿地帯であまり人が寄り付かないおどろ沼は別。あの周辺で犯行はまだ起きていないし、それに、来るとしたら物好きな子供や昆虫採集とかを目的にした人だけだと思う。あくまで推論だけど、犯人は後一回か二回、おどろ沼の周辺で犯行に及ぶかもしれない。あと、市場で強奪されたメダロットが出回っていないところ見ると、犯人はある程度まとまってからどこかに売りさばくつもりかも」
名探偵気取りのジャーナリストアリカの推論に、イッキ、コウジ、カリンは納得した。
「あくまで推測の域を出ていないが、理に適っているな。それにしても、よくそこまで考えられるもんだ」
「そりゃー、こう見えてもジャーナリストの端くれよ。良い記事を書くには、一定の想像力も必要よ」

コウジの言葉にアリカはちょっと得意気だ。
「では、これからどうするのですか？」
「ええと、まずはおどろ池に行って軽く証拠探し。そのあと、夕方までおどろ沼に張り込みましょう」
「その流れだと、我々が囮になるということか。当然といえば当然だが…」
ロクショウは躊躇っているようだ。それもそうだ。囮になれと言われて、喜んではいそうですかと言う者などいやしない。それでも、ロクショウ、ブラス、アーチェは渋々同意した。
「まあまあ、危険な目に遭うのは私たちも同じなんだし」
コウジも不安を隠せない。
「これで奪われたりでもしたら、ご近所どころか末代までの恥だな」
イッキも同じことを言いたかった。子供だけで上手くいくどうか丸っきり自信が無いし、仮にパーツとティンペットを奪われて、しかも子供禁制のときに勝手に入山したことがばれたら、どんな大目玉を食らうか予想できない。

人目を避けておどろ池へ行き、その後、おどろ沼へと向かった。おどろ池は山の中腹地点の右のほう。おどろ沼は、中腹地点より百メートル登り、左に曲がって少し登り、まっすぐにきつめの傾斜を降りたところにおどろ沼がある。おどろ沼へ向かおうとした途中、山伏ご一行のメダロットにあやうく姿を見られそうになったときは、生きた心地がしなかった。
おどろ池と違い、おどろ沼は整備が行き届いていない。あっちこっちに草が生えて、手付かずな自然の状態。そのおかげで、おどろ沼と周辺の湿地帯にはトンボにカエル、ゲンゴロウ、タガメなど、数を減らした水生生物が生息しているから、たまに訪れる人がいる。
アリカの推測を頼りにここで張ったが、夕方の五時以降になって

も現れない。皆、早く出ないかと待ちくたびれていた。
　これなら、家でのんびりゲームでもしていたほうが良かったかな。イッキは陽が沈む西の方角を見た。見たところで何も起きないが、他にやることがないから見た。うん、今日も夕陽は綺麗だな。そう思って夕陽を眺めていたら、黒い一点が夕陽に浮かんだ。鳥か目の錯覚かなと思ったが、黒い点は明らかにこちらのほうへとやってくる。
　だんだんと距離が縮まり、黒い物体の正体が判明した。
　メダロットだった。イッキはそれに見覚えがあるような気がした。イッキの異変に気付き、近くのロクショウ、アリカも西の方角を見上げた。
「あれは、昼間会ったご老体のメダロットではないか！」
　そうだった。樹上の枝葉が邪魔をして見えにくいが、あのメダロットは昼間会ったカンちゃんというおばあさんのメダロット、タロウだ。ヤナギというメダロットを捜しにきたのかな？その割りには、様子がおかしいようにも思える。
「人のこと言えないけど、何でこんな時間帯に飛んでいるのかな？ちょっと、一声かけてみようか」
　イッキ、アリカ、ロクショウは、あらん限りの大声で叫んだ。声はタロウの耳に届き、彼はすーっと、沼の近くまで降りてきた。
「何でこんなところまで飛んできたの！？ヤナギとかいうメダロット捜しにきたの？」
　イッキがタロウに尋ねると、タロウは首を振り、子供のような涙声で危機を伝えた。
「うう…。…あのね…幽霊が…幽霊がね…僕ら…僕らというのは、僕と同じカンちゃんに拾われた仲間のこと……」
「それで、君の仲間がどうしたの！？」
　イッキは先を話すよう促した。
「…うん。それでね…幽霊たちがね、僕らとカンちゃんを襲って、仲間を連れ去っちゃったんだ…。僕は何とか助かって、急いで救け

を求めたんだけど。君たちに声をかけられて、方向を間違ったことに気が付いたんだ…」
わーん！と、彼は堰を切ったように泣き出した。
「落ち着いて！君の来た方向は西だよね！じゃあ、ここを真っ直ぐ降りれば、カンちゃんの居るところに行けるの」
「ひっく、ひっく…。うん、そうだよ。…でも、酷い悪路だから人の足だと最低三十分もかかるし、僕一人じゃ、とてもじゃないけど君ら全員を運べないよ」
三十分。とてもじゃないが、間に合わない。かといって、このまま見捨てることもできない。コウジ、カリン、ブラス、ラムタムが彼らのとこまで寄り、コウジが良い提案があると言った。
「イッキ、アリカ。飛行パーツは持っているか？」
アリカは女性型のが一つあると答え、イッキは無いと答えた。
「そうか。なら、イッキには俺の飛行パーツを貸してやる。そいで、タロウ。俺ぐらいの重さなら運べるか？」
タロウは「うん」と首肯した。
「よし、そうと決まりゃ善は急げ！まず、カリンはアーチェに乗る。そいで、アリカはブラスにイッキはロクショウに乗って、俺はタロウに乗る。ちょうどメダロットが四体もいるわけだし、その四体で一人ずつ運べばすぐに着ける」
そうして、彼らは細かいことは一切言わず。すぐに準備を整えた。怖いと言っている暇はない、イッキは覚悟してロクショウーの背に乗った。
案内人として最初にコウジとタロウが飛び立ち、次にアリカとブラス、イッキとロクショウ、最後にカリンとアーチェが飛び立った。カリンが最後なのは、スカートを履いているためだから。
三十分もかかるところを、五分程度で目的地に到着した。タロウがおどろ沼に来るまでの時間、会話と準備時間によるロスタイムを差し引いても、十三分。犯人がいる場合、まだそんなに遠くには行ってないはず。

樹に囲まれた平らな土地に立つ二階建ての古風な民家に降り立ち、四人と四体はカンちゃんの名を呼んだが、返事が無い。
「もしかしたら、連れ去られたメダロットたちを追いかけたのかも！」
アリカはすぐにブラスの背に飛び乗った。
再び、彼らは上空を行く。
「カンちゃんの声が聞こえる！」
先頭を飛ぶタロウが下降した。森の中を、カンちゃんらしき人がさらわれたメダロットたちの名前を懸命に呼んでいた。四体は乗った人間が枝で傷付かぬよう降り立ち、四人と四体はカンちゃんの後を追った。

時を同じくして、イッキたちとはまた別に、連れ去られたメダロットの救出を試みる者がいた。その者は現在では使われなくなった廃工場にメダロットが保管されていることを知った。廃工場の中をこそこそと怪しげな者たちが出入りし、メダロット運搬の準備を計っていた。
物陰から、謎の集団の動きを観察するその者のメダロッチに文章が送信された。
K少年とその友達たちが、集団と交戦する可能性有。
その者は困った。自分はこの持ち場を担当するだけで手一杯。しかし、監視役メダロット一体だけではどうにもならない。そこでその者は、ある人物に連絡した。
「ほい、もしもし。わしじゃ」
陽気なしわがれ声を聴くだけで、その者の緊張感がほぐれた。その者は手短に監視役メダロットの電文を伝えた。
「分かった。お前さんはそのまま任務にあたれ。わしは、彼が拾ったあやつを救援にあてる」

電話先の人物は極秘の特別回線を切り、早速、隣部屋にいるメダロットを訪ねた。
「ご機嫌はいかがじゃ？」
「んー…。まっ、ぼちぼちなところですな。メダロット博士」
彼はメダロット博士に会釈した。そのメダロットは昨日、イッキがおどろ池周辺で拾ったトンボ型メダロットのドラゴンビートルこと、光太郎。という光太郎名は、修復中に彼自らがその名を告げた。今は故人となった前マスターから授けられた名前らしい。
彼は誰かに拾われることを望んだ。だが、こうして再び起動してみると、心は喜びよりも、喉に物が詰まったような正体不明のえも言われぬものが覆った。ほんま、また人間を拠り所にしてええんやろか。それよか、上手くやっていけるのやろか。
そんな彼の気持ちなどお構いなしに、メダロット博士は至急、光太郎に地図で示した地点へ行くよう指示した。光太郎は訳を尋ねたが、肝心のところははぐらかされてしまう。
「わしが何故知っているかよりも、君の新たな友達となる少年が窮地に陥るかもしれんのじゃ。君自身の整理がついてないときに悪いが、今は黙って彼とその友達を救うほうが先決じゃ」
光太郎はいざというときには明白をつけられる性格だった。引っ掛かるところはあるが、光太郎は新たなマスターとなりうるイッキ少年を救いに行くと決めた。
飛び立つ直前、メダロット博士はある物を光太郎に渡した。
「こんな物を使って、お上が見逃してくれますか？」という光太郎の問いに、メダロット博士は笑顔で返した。「大丈夫！しかるべきところには話を通しておる。きっと、これが役に立つはずじゃ。さあ、行ってきたまえ！」
ええい、ままよ！
首にある物を巻くと、光太郎は迷い振り切るように夕暮れへと向かってひとっ飛びした。

イッキたちはすぐにカンちゃんに追いつき、タロウにカンちゃんを任せて、イッキたちは前を行く者たちを追いかけた。
「あれって、どうみても幽霊じゃないじゃん！」
前を行くのは、白い金魚鉢のような形をしたヘルメットを被り、同色のスーツを着込む四人組と、黒いゴムスーツを着た二本の黄色い角を生やした大柄な者が、メダロットたちと一緒にカンちゃんのメダロットを抱えて走っていた。
「こらー！あんらた待ちなさい！」
アリカの叫びに謎の集団は振り返り、金魚鉢頭の一人が声を出した。
「ロボ！？ババアが若返ったロボ！？」
「くおらぁ！誰がババアよ！！」
「ひえっ！おっかないロボよ」
「ていうか、お前ら何者なんだ！？」
コウジの指摘に、二本の角を生やした黒いゴムスーツを着た大柄な者が立ち止った。
「全く…何故にわしの嫌いな子供がこんなにおるのだ」
金魚鉢四人も立ち止り、イッキたちと対峙した。大柄な男が口を開いた。
「ふん、どうせ今日でこんな寂れた場所とおさらばするし。最後の手土産にガキ共のメダロットを奪うのもよかろう」
アリカは集団のリーダーらしき男に食ってかかった。
「あんたらが幽霊騒動の犯人なの！」
「ふぉふぉ。威勢のいい小娘じゃ。そのとおりといえばそのとおりであるが、実行犯はほれ、こいつじゃ」
大柄な男は肩に抱えたボロボロのメダロットを指した。そのメダロットはミスティゴーストだった。ミスティゴースト…？まさか！
「ヤナギ！君はひょっとして、ヤナギなのかい！」

イッキは男に抱えられたメダロットに呼びかけた。ミスティゴーストは酷い損傷をしており、機能停止しているかもしれない。だが、ミスティゴーストはゆっくりと反応した。
「誰…？僕の名前を呼ぶのは…？カンちゃん？」
やはり、このミスティゴーストは例の「ヤナギ」であった。アーチェが大柄の男の足元を撃ち、ロクショウがヤナギをキャッチした。ヤナギは体を震わせながら、独り言のように謝罪した。
「皆…カンちゃん…ごめんね。…ごめんね。皆とカンちゃんを酷い目に遭わせて…ごめんね」
「ヤナギといったな。一体何があった？」
そっとヤナギを地面に置き、ロクショウがヤナギに聞くと、邪魔するかのように大柄の男が叫ぶ。
「こらー！そいつを放さんか！そいつは、ちょいとわしらの仕事を知りすぎた」
「もう、さっきからあんたたちは何者なのよ！」
大男は不敵な笑い声を上げ、金魚鉢たちも怪しく笑った。
「しらないなら教えてやろう。聞いて驚け！そして、恐怖するがいい！我らは、悪の秘密結社ロボロボ団。わしは、そこで幹部を務める者だ」
「ロボロボ団！」
ロクショウ、ブラス、アーチェ。メダロット以外の者は驚愕した。
ロボロボ団といえば、十年前。メダロット史上最悪ともいわれる「魔の十日間事件」を引き起こした組織。単なる悪戯集団かと思われていただけに、この事件は世間をおおいに揺るがした。しかし、事件の幕引きと同時に組織は忽然と姿を消した。
以来、組織は自然解体したと考えられたが。よもや、まさかこんな形で幻となりつつあるロボロボ団と出くわすとは、イッキたちの予想を遥かに上回っており、四人は思考を停止した。
「ふぉふぉふぉ！腰が抜けてしもうたか」
幹部と名乗る男はイッキたちの態度に満足したようだ。

人間と違って、三機のメダロットには特に驚きが見られなかった。
ロクショウが幹部の男に話しかける。
「ふむ。それで、そのロボロボ団がこんな山奥でコソ泥する訳は何故だ？」
「な、何だとぅロボ！」
金魚鉢の一人がコソ泥という言葉に反応した。
「反応しているところを見ると、自覚しているようですね」
ブラスが無愛想に突っ込む。地団駄を踏む金魚鉢を押さえ、幹部の男が返した。
「ふん。秘密結社が毎回派手なことやるとは限らない。大願を果たすには、こうした人材を集めるための地道な活動もしなければならない」
「大願だと？」
アーチェが口走った疑問に、大男は先ほどより更に不気味に微笑んだ。
「我らの大願…それは、世界征服だ！！」
一同、しーんと静まった。大男に金魚鉢たちは、心底震えあがっているなと内心とても喜んでいた。だが、そうではなかった。アリカは吹き出しそうになる口を強く押さえた。
「ア…アリカ、こんなき、緊迫したときに寄せって」
そういうイッキもこみ上げる感情を抑えるのに必死だ。この緊迫した場でいきなり世界征服と言われては、笑わずにいられなかった。どうせなら、普通に資金源調達とか言われたほうが良かった。
ロクショウ、ブラス、アーチェも肩を震わしていた。
笑いを堪えるアリカ、イッキをよそに、カリンはぷっと吹き出していた。
「お、お前ら何が可笑しい」
これが返答だと、コウジがわざとらしく高笑いした。
「あーはっはっはっは！どんな動機かなと思いきや。まさか、世界征服とはね」

今度は幹部の男が地団駄を踏んだ。
「おのれい。だから、子供は嫌いなんじゃ！えーい！お前たちメダロットを転送せい」
ロボロボ団五人はメダロッチからメダロットを転送した。計十五体のメダロットがイッキたちの眼前に出現した。すっとんきょんな雰囲気は去り、シリアスな空気が再び漂う。
ロクショウ、ブラス、アーチェはさっき全速力で空を飛んだことにより、エネルギーを消耗していた。飛行系パーツはエネルギーの消費率が他の脚部より高い。その上、相手は数だけでもこちらの五倍以上。
「不味い状況になったわね」
あのアリカが弱音を吐いた。
自分たちを逃がさぬよう、ロボロボ団は囲いを広げ、徐々に縮めてきた。
ピピー。
イッキのメダロッチに電文が送信された。こんな状況に誰だ。イッキは素早くメダロッチの電文を黙読した。
スタングレネード（閃光弾）を上空から落とす。至急、地面に伏せて、目と耳をきつく塞げや。ｂｙ．修復完了のクマメダル
閃光弾！？クマメダル！？瞬時にして沢山の疑問が浮かんだが、イッキはこの電文の送信者を信用することにした。
「皆、地面に伏せて目と耳をきつく塞ぐんだ」
どうしてという質問も意に介さず、イッキはとにかくそうしてくれと頼んだ。
「どうなってもしらないぞ！」
文句を言いながら、コウジは率先して目と耳を塞いだ。イッキ、アリカ、カリンも地面に伏せた。メダロットたちには、一時的に視覚・聴覚機能をシャットアウトさせた。
「それは降参という合図か？今更遅いわ。やってしまえ、者共！」
時代劇のような掛け声を上げて、ロボロボ団が襲ってくる。その

とき、強烈な閃光と音が辺りを覆った。続いて、熱風を肌に感じて、イッキは飛び上がって目を開いた。五人のロボロボ団員が転げまわり、二体のロボロボ団メダロットの全身がひしゃげていた。
イッキやんと、真上からドラゴンビートルがイッキの名前を呼んだ。
「あんさんがイッキですか？」
イッキは頷いた。
「わての名は光太郎と申します。以後、お見知りおきを。新しいマスターのイッキやんのピンチやと聞いて、居ても立ってもいられなくなったんですわ」
礼儀正しいロクショウとは逆の、ちゃきちゃきの関西弁を話すくだけた性格のメダロットだ。
「金衛門か。こんな状況でなんだけど、よろしくな。そいで、ありがとうな」
「どういたしまして。それよりも、他のメダロットも動かしてえな。今のうちに一機でも多くはったおしたといたほうがええ」
イッキが起こす前に、コウジ、アリカは行動していた。アーチェは五感機能が麻痺した近くのメダロットを狙撃。もう一体、ブラックメイルの左腕を付けたアーマーパラディンが援護し、ブラスが空を飛ぶゴーフバレットを撃墜。イッキもロクショウを起動した。ロクショウも負けじとソードで敵を切りまくり、ハンマーで頭をかち割った。光太郎は樹を傷付けぬよう、精巧な重力波射撃で相手を攻撃した。
ばったばったと、ロボロボ団メダロットが薙ぎ倒されていく。
態勢を立ち直す頃には、五対五の同数になっていた。それなのに、幹部の男はまだ余裕そうだ。
「ふぉふぉ…。閃光弾とな！こりゃ、たまげたわい！だがのう、雑魚をいくらやったところで、わし自慢の三体を倒せなかったのは惜しいな」
その三体とは恐らく、大王イカ型メダロットのアビスグレーター

二体、スペクター型メダロットのデーヴのことであろう。一体に付き、各自一体をぶつけあう正攻法での戦いとなる。
相手は横一列に並んだ。何かしてくる。コウジがいち早く察した。
「火薬系をぶっ放してくるぞ！」
二体のアビスグレーター、マジカルピエロの右腕を付けたデーヴ、セキゾーが大量のミサイルを放った。コウジのアーマーパラディンが盾となり、背後のアーチェ、ブラスが数発のミサイルを破壊した。
「わぁー」
後ろから、タロウが悲鳴を上げた。タロウの横には息を切らしたカンちゃんもいる。二発のミサイルがタロウとカンちゃんに飛ぶ。助けられそうにない。
誰もがそう思ったとき、ヤナギが最後の力を振り絞って宙に浮いた。
「カンちゃんーー！！！」
どどおぉぉーん…！
爆音のあと、ぼろ屑となったものが叢に落ちた。
「カンちゃんとタロウは！？ヤナギは？」
身を縮こませたカンちゃんとタロウは無事だった。だが、身を挺して二人を守ったヤナギは、パーツとティンペットまでも爆発の影響は及んでいた。がくがくと震えながら手を伸ばすヤナギ。その手がティンペットごともげた。
「ヤナギー！！」
イッキとカンちゃんの悲痛な叫びが重なる。アリカとカリンは目を逸らし、コウジはイッキたち会ったときよりも激しい怒気を含む目でロボロボ団を睨む。
「お前ら何を悲しんでおる？メダロットはメダルさえ無事なら動ける。たかが、パーツとティンペットが壊れたぐらいで何を嘆いておる」
かちん。ロクショウの何かが切れた。ここ最近の幾多の戦闘を経て、ロクショウメダルは確実に成長していた。ロボロボ団の目的と

か、ヤナギを唆した方法など知らない。ただ、今、ヤナギの取った行動とその姿。そして、そのヤナギに対するロボロボ団の発言がもう一歩で成長するロクショウのメダルを進化させた。
できる。今の私に何かができる。
夢遊病者のような足取りでロボロボ団に近寄るロクショウを見て、コウジ、アーチェが止めに入った。
「何を考えている？一人で勝てるわけないだろう」
ロクショウは乱暴に二人の手を払った。あのロクショウらしからぬ態度だ。イッキも止めにかかったが、ロクショウは優しくイッキの手を止めた。
「私に任せてくれ。何故だか分らぬが。今なら、私一人であの愚か者たちをやれる」
ロクショウの雰囲気がいつもと異なる。口調こそそのままだけど、猛獣のように燃えたぎる戦闘意欲と標的を見据えた殺し屋の冷徹性が同居したようだ。
ロボロボ団もロクショウの異変を感じ取っていた。幹部の者が命令する。
「…お前たち、何をぼさっとしておる。いい的ではないか。次はあのクワガタムシを片付けろ！」
ロボロボ団メダロットがミサイルを発射しようとする。ロクショウはゆらりと刃を上に向けた。
「ふぉふぉふぉ…。せめて、一体でも多く道連れにしようという腹積もりか。甘いぞい。ヘッドシザースの格闘攻撃がいくら強力でも、わしの特別チューンナップ仕様のメダロットたちはそんな生半可な戦法じゃ破れんぞ」
幹部の男の号令と同時に、ロクショウの体が輝いた。
「な、何だ？」
双方が同じように驚いている次の瞬間、網膜を焦がさんばかりの光が薄暗い森を照らし出した。凄まじいまでの光に、イッキたちは目を閉じるしかなかった。

どのくらい経ったのだろう。眩すぎる光をまともに直視し、少々頭が頭痛を起こしていた。感覚が正常になると、イッキは眼前の状況を見て唖然とした。

五体のロボロボ団メダロットは首、あるいは上下半身がばっさり切り落とされていた。ロクショウは、どういわけか体があちこち溶けていた。

部下に支えられて立った幹部の者も、これには驚きを隠せずにいられなかった。

「な、な、何だ！何だ！何だぁー！？何が起こった！」

支える部下が答えた。

「よ、よく分かりませんが。光った次の瞬間、細い糸状の物があのメダロットの腕から伸びたロボ…」

「本当か！」

訳の分からぬうちに味方メダロットを大量に失い、謎の光と力、更に幹部の大男に凄まれて、部下のロボロボ団は怯えきった声で「ほ、本当ですロボよー」と言った。

慌てふためくロボロボ団に、コウジが居丈高々に出た。

「さあ、どうする？お望みとあらば、まだ戦っていいぞ」

アーチェ、ブラスがロボロボ団に銃口を向ける。ロボロボ団は一歩ずつ後ずさり、幹部の男が懐から何か取り出した。

「覚えておれよー！」

ぼん！もうもうと黒い煙がわきたつ。

「煙幕か」

コウジがアーチェに攻撃命令を出させたが、ロボロボ団はとっくのとうに森の奥へと姿をくらましていた。イッキが土下座姿勢のロクショウに駆け寄る。

「ロクショウ、どうしたんだよ一体？何をしたんだお前？」

イッキが所々溶けたロクショウの体を抱きかかえる。ダメージをうけていないのに、パーツから洩れた装甲下の配線が目に付く。ロクショウは掠れた声を絞り出した。

「分からぬ。今から機能停止するが、安心しろ。…ただの…エネルギー切れだ」
ロクショウのカメラアイから光が失われた。
「ロクショウー！」
イッキの二度目の悲痛な叫びが木霊（こだま）する。

ロボロボ団との交戦後の始末は大変だった。僕たちはカンちゃん、タロウを家まで送り、すぐに旧式の黒電話で警察へと繋いだ。同時刻に警察へ匿名の電話が入り、おどろ山近辺の閉鎖された廃工場に強奪されたメダロットたちが保管されていたようだ。
廃工場内では、何とロボロボ団が既に何者かに捕えられていた。セレクト隊も事情聴取に関わり、ロボロボ団の話から、廃工場のロボロボ団を捕縛したのは怪盗レトルトだと判明した。
怪盗レトルトはメダロットを主に盗みの対象とした神出鬼没の大泥棒。その大泥棒がどのような事情があってロボロボ団と戦い、しかも、保管されていたメダロットたちを奪わなかったのか。警察とセレクト隊は共同で捜査を行っているらしい。
僕たちといえば、もうそりゃ、大目玉を食らった。警察の人の長々とした事情聴取、その警察の人たちからのお説教に、両親からの雷をおおいに貰った。ママはもちろん、パパの静かに怒りが籠もった声音は一生に耳に残りそうだ。罰として、ゴールデンウィーク中は許可が無い限り絶対外出禁止。そして、もう二度と自分たちだけでは山に登らない、ちゃんと親に話せという誓約書まで書かされた。
最後にメダロットたちについて。
ロクショウはセレクト隊の看護メダロットの介護もあって、翌日には自宅に届けられた。
次にカリンちゃんのメダロット。
カリンちゃんのメダロットも廃工場に保管されていたようだ。修

復と聴取が済んだ次の日には、自宅に届けられた。ゴールデンウィーク五日目、土砂降りの雨の日に真っ白なベンツが僕とアリカの家の中間に止まった。カリンちゃんとセントナース、それと、礼装服の男性がお礼に訪ねてきた。

突然の大金持ちの訪問にママに僕もびっくりした。カリンちゃんと執事の人を見て、ママに僕もかしこばった挨拶を送るしかなかった。カリンちゃんの愛機、セントナースのナースは主人と似て物腰柔らかく。

「イッキさん、メタビーさん。このご恩はお忘れしません」

人間でいうところの可愛子ちゃんにこう言われて、ロクショウはぎこちなく。光太郎は調子良さげに返事した。

次にヤナギについて。

ヤナギはあまりにも損傷が深く、介護メダロットはこの傷は治せないと言った。肩落とす僕たちに、トックリという眼鏡をかけたセレクト隊の人に「大丈夫ですよ。彼はメダロット博士のところに送りますから」と聞かされて、僕らは一安心した。

もう一つ、ヤナギがロボロボ団に協力した理由。

無垢なヤナギはロボロボ団に騙されたのだ。カンちゃんの孫娘のナツコさんが海外に転勤してから二日経った日、ヤナギはロボロボ団とばったりと出会い、捕まった。捕えられたロボロボ団の話によると、リーダーの男。本名かどうか分からないが、シオカラというあの大男がヤナギを使った幽霊騒動を思いついた。

ナツコは海外転勤ではなく、会社での失敗を拭うために、否応に海外へ飛ばされた。シオカラはこんな嘘をヤナギについた。

ヤナギとて、少しは疑ったりした。だが、シオカラは何らかの脅しも加えてヤナギを納得させて、ヤナギを幽霊として仕立て上げた。付け加えれば、ヤナギ自体は脅迫の声に捕えたメダロットの運搬を手伝っただけで、メダロットを直接攻撃したのは専らロボロボ団のようだ。

ついでにスクリューズ。警察に話すと、当然奴らも呼び出されて、

親から然るべき処罰を与えられたとのこと。

ゴールデンウィーク最終日。
僕は両親に許可を貰い、ママが運転してあるとこへ連れて行った。
「時間がきたら、電話しなさいよ」
ママと車を見送ってから、お土産を持ってロクショウ、光太郎と歩いた。おどろ山の登山口から離れて西側。そこをずっと歩いた先に、目的の古風な民家が見えた。
声をかけても返事がない。イッキは横開き式のドアを開けて、中を覗こうとしたら、
「ひーひっひっひっひ。…勝手に入るのは誰だぁ…」
と、この世の者とは思えない声だ。イッキ、光太郎はやれやれと首を振り、「勝手に入って申し訳ありません。さようなら」と帰ろうとしたら、声の主は慌ててイッキたちを押し止めた。
「ごめん、ごめん！ちょっと、悪ふざけが過ぎちゃった」
家屋から、新品と見紛うほど綺麗になったミスティゴーストのヤナギが現れた。
「おふざけも大概にな」
ロクショウに注意されて、ヤナギは何度も謝った。
「ところで、カンちゃんは？」とイッキ。
「カンちゃんなら、アリカちゃんと皆と一緒に山菜取りに行ったの。それで、僕はお留守番しているの」
イッキ、ロクショウ、光太郎もヤナギのお留守番に付き合うことにした。小一時間後、元気一杯にアリカがただいまと帰ってきた。アリカの長靴は泥だらけだった。
「イッキたちも来ていたのね。ほら、楽してたんだからあんたらも外に出て、山菜洗うの手伝いなさい。これから、お昼にするから。あと、ヤナギ。カンちゃんがヤナギに見せたい物があるんだって」

外に出ると、ブラスの他に五体のメダロットたちがそこにいた。
カンちゃんの手には手紙が握られていた。カンちゃんが嬉しそうに手招きして、ヤナギに手紙を見せると…。ヤナギは喜びのあまり、天に召されんばかりの勢いで高く宙に浮いた。
手紙には、ナツコさんが七月の下旬には日本へ帰ってくることが直筆で書かれていた。
その日、イッキはママが迎えに来るまでの間、カンちゃんにカンちゃんのメダロットたちと楽しい時を過ごした。

7．おどろ山探索記三（謎の集団）（後書き）

おどろ山編は終了。

次回は二、三話ほど本編（原作）には無い話を盛り込み。そのあと、また本編のストーリーに入りたいと思います。

8．異国からの転校生

ゴールデンウィークの事件を当事者視点から執筆した三部構成の記事「おどろ山探索記」は、ギンジョウ小学校の歴代新聞記事で最も高い評価を受けた。

実際の評判もあり、お陰でアリカ、イッキは一躍学校で有名人。

二週間。アリカ、イッキの話題もそろそろ薄れる頃、校内はまた別の噂でもちきりになった。

「ねぇ、イッキ」

隣の席のアリカが話しかけてきた。

「海外からの転校生の話だけどさ。何でも、ナイジェリアの出身らしいわ」

「ナイジェリアって…。アフリカあたりだっけ？」

「私も詳しくは知らないけど、確か石油が掘れて。イスラムやキリストとかの宗教が混ざっているらしいわね」

「それで、そのナイジェリアの人がどうしたの？」

「んもう！ちょっとはメダロット以外のことも興味持ちなさいよ！そのナイジェリアの人はね。私たちと同い年で、転入先のクラスは私たちの三年一組だって」

イッキは適当に相槌を打っといた。メダロットのことしか考えてないと言われて否定はしない。ただ、好きな物に熱中する類ではなく、この場合は考えるざるをえないと言ったほうが正しい。

メダロポリスから来たというカリンちゃんとコウジ。突如、活動を再開したロボロボ団。そして、そのロボロボ団を謎の力で瞬殺したロクショウ。一つ目と二つ目は理解できるが、三つ目はどう考えても分からない。インターネットで検索しても分からない。メダロ

ット博士にも聞いてみたが、あの博士すら、ロクショウの発した力については分からないと答えた。
「メダロットのメダルの謎は解明されておらん。君のメダロットが発したその力を解明すれば、メダルに隠された数々の秘密を解き明かすことができるかもしれん。イッキ君、その当時の状況を詳しく教えてもらえんか」
そう言われても、あの慌ただしい状況では何が起こったか当事者にも判別しかねた。イッキは光ったことと、ロボロボ団の一人が言ったことを博士に伝えた。
イッキの空想を打ち破るように、朝のホームルーム開始を告げる、筋骨隆々なジャージ姿のオトコヤマ先生が野太いバリトン声でおはようと挨拶した。
「既に知っている者もいると思うが、ナイジェリアの子がギンジョウ学校に転校してくる。そして、転入先のクラスは我が三年一組だ。因みにその子は男の子らしい。今週金曜日の終わりのホームルームに来るから、皆、歓迎の準備をしておくように」
その後、簡単な連絡事項と挨拶でホームルームは終了した。

イッキは特に準備はしなかった。どうせ、挨拶は先生にクラス委員長が代表として言うし、来たばかりの彼に深く尋ねるのもどうか。イッキは簡単な挨拶だけを考えた。
オトコヤマ先生は、歓迎の時のみ自分のメダロットをメダロッチから出していいと言っていた。
当日、三年一組のクラスはホームルーム前だというのに、二つ離れた教室に賑わいが届くほど盛り上がっていた。それもそのはず。元気一杯の子供たちに加えて、今日は皆のご自慢のメダロットたちまでいるのだから、はしゃがないほうがおかしい。
ロクショウ、光太郎は他の生徒の愛機と混じっていた。エネルギ

ーの消費が激しく日常においては支障をきたすから、普段、光太郎は飛行系パーツ以外の脚部を付けて生活している。
　両親についてだが、意外にもすんなり光太郎の存在を受け入れてくれた。光太郎の性格も関係しているだろうが、イッキを助けにきたという点が一番の理由だそうだ。
　オトコヤマ先生が教室の扉を開けた。
「こら、お前たち！メダロットを連れてきてはいいと言ったが、二つ先の教室に届くほどうるさく騒いでいいとは言っておらんぞ！」
　オトコヤマ先生の一喝で教室は静まり返った。
「よろしい…。ゴホン！それでは、どうぞ入ってきてください」
　オトコヤマは外で待機する人に入ってくるよう促した。そろそろと、天然パーマ頭の薄紫のスーツを着た真っ黒な肌の黒人女性が、クラスの皆に会釈して、かしこまった姿勢で小さな手を握りながら教室に入った。女性に手を繋がれて入った男の子は、短パンに、横並びの黄と新緑の組み合わせ縞模様のTシャツを着た、これまたニュースなどでよく見かける真っ黒い肌をした典型的なアフリカ人の男の子だった。頭も、坊主に剃っている。
　男の子と母親。クラスメイトに担任、メダロットも、皆一様に押し黙った。学校側の配慮と向こう側の都合で、まずは金曜の終了ホームルームに顔出しし、来週月曜日の朝礼で初めて彼を全校生徒に紹介する手筈になっている。
　同じで人間であることは間違いない。が、国籍に雰囲気、そもそも外見からして違う人種に生徒一同はどう応じれば内心、戸惑い気味だ。このままではまずいと、オトコヤマ先生がまたわざとらしく咳払いした。
「エッホン！えー…では、ウチェボさんたち自らにご紹介をしてもらいましょう」
　ウチェボと呼ばれた女性は機転を利かし、すぐに愛想ある笑顔を浮かべた。
「みなさん、こんにちわ。私、スージ・ウチェボと言います。ドウ

ゾ、息子のことよろしくお願いします」
　片言ながら、スージという人は聞き取れる日本語で自己紹介した。委員長がよろしくごじいますと挨拶して、他の生徒も委員長に続いて挨拶した。
　スージは男の子の耳元で囁いた。生徒に担任にも聞いたことがないような言語だ。恐らく、母国語で息子に早く挨拶しなさい、とでも言っているのだろう。
　男の子はぎくしゃくと黒板に向かい、白墨で文字を書き始めた。お世辞にも綺麗とは言えない。本人もそれを理解しており、小さな手で懸命に文字を大きく書いた。
　オニェカチ・ウチェボ。黒板にはそう書かれた。
　男の子が前を向いて、片言な日本語で挨拶を述べた。
「エット…。ボク、コクバに書いた文字のトオリ。オニェカチ・ウチェボという名前です。みなさん、短い間ですが、お願いします」
　後半の挨拶が流暢だったのは、日常用語に関してオニェカチはある程度習得しているらしい。委員長の短い代表挨拶をし、クラスメイトは歓迎の拍手をオニェカチ君に贈った。オニェカチ君はイッキの後部座席に着席した。そして、今日は終了のホームルームの間だけ学校にいて、終わると母親と共に下校した。
　後で聞いたところによると、オニェカチ君の父親はＩＴ関連の大企業に勤めていて、二年前の四月から日本に滞在している。何でも、引っ越しはこれで三度目のようで、今年の八月の初旬にはアメリカに本籍を構える。父親的には色んな文化を経験させたほうが良いと考えているようだが、子供にはそうではないようだ。
　オニェカチ君が来てから六日。クラスで誰彼隔てなく話を取れる奴に、イッキもそれとなく話しかけたが、表面的な社交辞令で終わってしまう。イッキに他のクラスメイトもオニェカチ君と仲良くしたいとは思っているが、オニェカチ君自身が周囲に近寄らせないバリアーのような物を作り、日本人とかけ離れた外見も相まって、オニェカチ君はまだクラスで友達と呼べるような者は一人もいない。

ママとパパにそのことを話すと、パパが発泡酒を一口含んでから、当然だろうと言った。
「そのオニェカチ君も本当は話したいんだ。ただ、来たばかりで不安でしょうがないんだ。それに、日本にいる間だけで三度も引っ越しして、八月にはアメリカへ本格的に移住するのだろう。ひょっとしたら、親しくなったときの別れを思うと、怖くて寂しいから、そのせいで上手く付き合えんのかもしれん」
パパの言ったことは最もかもしれない。国内であれ、年に何度も引っ越ししてはあまり落ち着いていられないだろう。そう理解しても、イッキは後部座席のオニェカチと上手く話せないまま、あっという間に一週間経った。
その日の午後、帰りがけの途中、イッキは宿題のプリントを学校に置き忘れたことを思い出した。引き返そうとしたところ、親切にも光太郎が取ってくると言った。
「まかせてぇなあ。軽ーく飛んで、すぐに戻ってくるさかい。イッキやんは、家でロクショウと待っててな」
「ありがとう、光太郎」
イッキは光太郎の脚部パーツを元のドラゴンビートルに戻し、光太郎は学校へ向かって飛んだ。
光太郎は迂回して、三年生の教室がある校舎裏側まで飛んだ。教室内を見ると、オニェカチ君が一人、ぽつんと教室に座っていた。光太郎は窓際まで近寄り、オニェカチに一声かけた。
「なあ、ボン。ちょいと用事があるんやけど、ここ開けてくれへんかな？」
窓の外から、いきなり大阪弁の飛行メダロットに話しかけられてオニェカチは動揺していた。
「ごめん、ごめん、驚かして。わいのこと覚えておらん？ほら、君の前の座席に座っているイッキやんのメダロットや」
オニェカチは机に蹲った。そして、どうやら思い出してくれたようだ。オニェカチは窓を開けて、光太郎を教室に入れてやった。

「おおきに。イッキやんが宿題のプリント忘れてなあ。しゃあないから、代わりに取りにきたんや」
光太郎はイッキの机を探り、プリントを両手で挟むと、器用に胸部のハッチでプリントを挿んだ。そんな光太郎のことをいっこう気にせず、オニェカチはただ、時計を見つめていた。家庭での会話でオニェカチの事情を何となく知った光太郎は、一つ、物は試しにオニェカチとの対話を試みた。
余計なお節介かもしれへんけど。
「…オニェカチ君。教室に居るんは、お母さんを待ってるからか？」
オニェカチはおもむろに振り返って光太郎を見やり、小さくうなずき返した。
「そうか。そんなに遠いん？」
少し間を空けてから、オニェカチははにかみながら口を開いた。
「歩いて…にっじゅぷんぐらいのところ。歩いて帰ると、他の人が変な目で見ているような気がして…。それが嫌だから、ママにお願いして、迎えにきてもらっている…」
にっじゅぷんとは、「二十分」のことやな。
「ふーん。まあ、確かに肌の色からして皆と違うけど。でも、毎日そんなで楽しい？短い期間でも、皆と帰ったほうが楽しいと思えるで」
「君、コータロウだっけ？イッキのメダロットだよね？」
「そうやけど、それが何か？」
「イッキ、ボクに声をかけてくれる。だけど、ボク、八月にはアメリカで永住することになる。ホントは皆と話たい。けど、何だか分からないけど、話そうとしても話せないし。話しかけられても、何故か返せないんだ…」
光太郎はオニェカチ君のような子供を何人か見たことがある。生前のマスターといるとき、周囲と合わせようとせず、こちらから話しかけても、それを拒むような子供がいた。そういう子供はやはり、地道に付き合う努力が必要。

あまり悪口は言いたくないが。おじいさんはできた人だったのに、親族の人たちは最後までメダロットのことを理解してくれんかったな。一人、魔の十日間事件で死にそうな目に遭ったのは同情するが、まさかそれで自分を捨ててしまうとは。おじいさんと同様、虫好きな人がおればなあ…。いかん、いかん。今更、気に病んでもしょうがない。今は今、昔は昔。しばらくイッキやんのところで住まわせてもらおう。光太郎は意識をオニェカチ君に戻した。

「オニェカチ君。絶対とは言わへんが、今度、うちのイッキやんに一緒に帰ろと誘ってみいへん？無理にとは言わんから」

「どうして？」

要らぬお節介は不要だと、オニェカチは光太郎を厳しく問い詰める口調だ。

「どうして、ボクにかまうの？」

「これは例え話やけど。近くで人が転びそうになって、ちょうどその人を支えられたり体を掴める位置にいたら、自分ならどうする？」

「…手を伸ばす…」

「それやそれ！言うとくけど、わいかて毎回こんなんちゃうで。偶然とはいえ一度君という存在に手を伸ばした以上、そのまま放してこけさす真似なんて出来へんやろ。ただ、その手を振り払うのは君の自由や。わいかて、これはお節介と自覚しとるし」

頃合いだな。光太郎はそろそろと、教室の開け放たれた窓へ向かった。太陽熱の残りか、校舎の周りで吹く風はほんのり熱気が宿っている。オニェカチは光太郎を見上げながら、窓を閉めた。どう転ぶか知れた物だが。二日の休みもあれば、落ち着いて考える時間は十分にあるはず。予定外のことで遅くなり、イッキが心配するかもしれないので、光太郎は真っ直ぐ天領家の方角を目指した。

オニェカチはただ一人、教室で母を待つ。

夕食を済ませた夜、オニェカチは母親と会話した。ただし、使用言語はナイジェリア言語の一種、ハウサ語。ここでは、ハウサ語を訳した形で記す。

「ねぇ、母さん。僕が友達と帰ってきたら、母さんどう思う？」
母親のスージは瞬きして息子の質問に目を丸くするも、白い調度品に囲まれ、色合いからして浮いている赤茶けたソファに座る愛しいオニェカチに、スージは微笑む。
「私としては嬉しいわ。だって、あなたが進んでお友達を連れてくるのは、ナイジェリアにいた時以来……」
スージはしまったと手で口を塞いだが、遅かった。足をじっと覗く息子の顔付きが険しくなった。この子がこういう性格になった原因、今は決して触れてはいけない。
「と、とにかくあなたにもようやくジャポンで親しい友達ができたのね」
話を逸らしたが、息子は心非ずと上の空な表情。
思えば、この子には苦労をさせたものだ。ナイジェリアにいたときはあんなことがあり、これはチャンスと安全な日本に逃げ込む形で移転した。しかし、現実はそう甘くなかった。二年前は苛めに遭い、半年で転校。二校目ではそれなりに上手くやっていけたが、夫の都合で転勤。この終わりが無いと思えた長い転勤生活も今年の八月、アメリカに本籍を構えることにより、やっと腰を落ち着けられる。
それでも、折角二年間も海外に滞在したのに、子供が良い想い出もなく日本を去るのは親としては少々悲しい。母や姉には考えすぎと言われたが、このままオニェカチが俯いたままアメリカに籍を構えても、移住先でこの子が自ら人と付き合えるか不安だ。
「それで、その子は何て名前なの？」
「まだ、連れてくると決めたわけじゃないよ」
オニェカチは宿題をすると言い、二階の自室に籠もった。スージがソファに座り込むと、アメリカに行ったとき、自宅や子供の警備用として買ったカミキリムシ型メダロットのエイシイストことアルコが紅茶を運んできた。アルコは去年の暮れに買ったメダロット。初めはロボットだなんてと思ったけど、今では一家の一員となって

いる。
スージは紅茶を受け取り、僅かに啜るとガラス張りのテーブルにティーカップを置いた。一人で自室にいるオニェカチ。オニェカチは、友達ができない自分を母親が心配していることを当然知っていた。
並大抵のことでは自分を変えられない。その自分に、イッキのメダロットはチャンスをくれた。悩むオニェカチの背をアルコが呼んだ。
「坊ちゃん。そんな風に腰を曲げていたら、早くから腰だけお年寄りになってしまいますよ」
オニェカチは窓の外に顔を向けたまま喋った。
「アルコ。迷っているときに誰かが手を差し伸べたら、お前ならどうする？」
「そうですね…。世の中色んな考えの奴がおりますから、人によっては手を振り払ったほうがいいかもしれません。信用できるとお思いなら、相手が待ってくれている間に手を伸ばしたほうがいいですね」
アルコはお菓子を置いて部屋を出た。オニェカチはすぐに手を付けず、外の景色を眺めた。
二日間、オニェカチは深海で空気を求めて彷徨うように悩んだ。そのオニェカチを、スージ、父親、アルコは見守った。

月曜日。終礼が済んでとっとと家へ帰ろうとしたら、イッキはアリカに呼び止められた。
「イッキ。今日、暇？」
「…特に予定はないけど」
「良かった！あのね、今から取材に同行してくれない？」

「ここ最近、周辺で事件性があるものとかはないけど」
「ジャーナリストが必ずしも事件を追うとは限らない。ときには、地域や身近な物を題材に取材したら、意外な事実が見えてくることもあるし、己が視野を広げることにも繋がる。というわけで、鞄を置いたら商店街に行きましょ」
迷うイッキに、オニェカチがか細く声をかけた。
「…あの、イッキ君。今日、一緒に帰れる？」
イッキ、アリカは目を剥いた。今の今までクラスから浮いていたあのオニェカチ君が。話しかけてもお世辞めいた返事しかなかったオニェカチ君が、自ら話しかけてきたからだ。イッキが良いよと言う前に、アリカが身を乗り出した。
「オニェカチ君は、今日予定とかある？」
「無いよ」
「そう！じゃ、良い機会だから、私たちと一緒に商店街の取材に行ってみない！？オニェカチ君は行ったことある」
「車で何度か通ったことあるだけで。、ボク、行ったことない。でも、前から一度行ってみたいと思っていた」
「決まりね！」
三人で待ち合わせ場所を決め、イッキ、アリカ。それと、オニェカチはまだちょっと引きずる感じで肩を並べて校門を出た。光太郎からオニェカチについての事を打ち明けられていたロクショウであるが、あえて口を出さず、メダロッチ越しから成り行きを黙って見ていた。
オニェカチ君の家から一番近い場所、広いグラウンドがある五丁目公園が集合場所。
オニェカチは何故か光太郎も連れてきてほしいと頼んだので、イッキはロクショウ、光太郎のメダルをメダロッチに挿入した。商店街を取材し回るから、イッキ、アリカは自転車に乗って五丁目公園に向かった。六分もして、植林樹と高いフェンスネットに覆われた五丁目公園が視野に入る。入って右奥のベンチ、オニェカチ君が座

っていた。二人はオニェカチに手を振り、気付いたオニェカチも同じく手を振った。
イッキがオニェカチの手前で自転車を止めた。
「お待たせ！」
「オウッ！バイクで行くんだ。ちょっと待ってて、すぐに取りに戻るから」
オニェカチが自転車に乗って公園に戻ると、アリカを先頭に取材陣は出発した。
これまで、この五丁目公園に周辺を散歩しただけのオニェカチにとって、アリカの取材同行は正に未知の世界への切符を手にしたみたいだ。アリカは学校に許可を貰い、毎週商店街の店一件を取材し、記事にしている。イッキもしばし同行させられているから、イッキ、アリカは商店街の顔馴染みとなっている。今回は裏角のお団子屋さんの取材。待っている間、三人はみたらし団子を一本貰った。三人はそれぞれ礼を言ってから、ありがたくお団子を食した。スーパーで売っている物とは違い、出来立てほやほやで、砂糖醤油の葛餡にお店の秘密の調味料を加えた団子はほっぺが落ちそうだ。
オニェカチ君も、おずおずと一口、パクリ！齢五十のおじさんが味はどうかと聞くと、オニェカチは満面の笑みで「美味い」と答えた。
取材後。イッキ、アリカは気を利かし、オニェカチ君に今まで取材したお店とその店員の人を紹介した。商店街の人たちは皆優しく、変な目付きもせず、オニェカチを普通の子供として扱った。更に二人は、本当は近寄ることすら禁じられているおどろ山までオニェカチを連れた。
公園から出るまでまだどこか引きずっていたが、今やすっかりそんな気持ちは消え去り。オニェカチはひたすらイッキ、アリカとの時間を楽しんだ。メダロッチの時計が五時を告げる。集合場所に戻り、解散しようとしたら、オニェカチがイッキの光太郎に会わせてくれとお願いした。

断る理由もなく。イッキは光太郎を転送した。
転送された光太郎に、オニェカチは一言「ありがとう」と呟いた。光太郎は無言でオニェカチに腰を曲げた。イッキ、アリカはこのやり取りを見てきょとんとした。
そうして、三人は互いに別れを交わした。自宅前で、イッキは光太郎にオニェカチのお礼の意味を問うたが、光太郎は「イッキやんはええ子やでと言っただけや」と、上手くはぐらかした。唯一人、オニェカチとは別に事情を知るロクショウはメダロッチの中でほくそ笑んだ。

8．異国からの転校生（後書き）

いつもなら、「イッキはこれまでの間に〇回ロボトルとして、云勝（うんしょ）云敗（ううんかい）した」で始まっていましたが、今回はそれも含め、できる限りロボトル関連で話を繋げないよう心掛けた。
同時に、前回は最終的にロクショウ、ヤナギなどに存在感を奪われた光太郎を目立たせようとも心掛けた。

…しかし、見返したら、今回メダロット側の主人公（ロクショウ）の台詞が一言も無かったな。次回からはアルコも絡ませて上で、ちゃんとロクショウも喋らせます。

9．メダラクロス

メダロットに関するスポーツといえば、ロボトルが代表的。だが、自分の愛機が無用に傷付く姿を見たく無いという人も多い。そこで、数年前からメダロット版障害物競争のメダロードレースが誕生した。障害物がなくとも、一定の距離を走れる場所があるならば、メダロードレースはどこでもできる。メダロードレース誕生により、ロボトルせずともメダロットは体を動かせる機会を得た。

五年前、社員の一人がロボトル以外のメダロットのスポーツ拡大を夢見て、メダロットによる球技運動の企画書を提出した。

メダロット社社長の二毛作タイヒは理解がある野心溢れる人物で、この企画書にゴーサインを出した。

まず、最初にメダベースボールなるものを試みた。だが、メダロットによっては手が無かったり、足が無かったり、そこにメダロット用のグローブやボールにバットを作るとなれば、一チーム分作るだけでも莫大な費用がかかるので、メダベースボールは企画段階で終了した。

二つ目はメダサッカー。これもまた、上記と同じ理由により、企画段階で没。中々、メダロット向けの球技が見当たらない。

一年間の紆余曲折を経て、遂にメダラクロス案に他一つが通った。手や指が無いメダロットには、ゴムベルト製の物をラケットに付ければ問題は解消された。

早速、腕しかない飛行型と浮遊型メダロットに低空飛行でラクロスをさせたところ、五機ずつに分かれた試合は意外な白熱ぶり。十分間の試合の末、推進力がある飛行メダロットチームが勝利した。決して圧勝ではなく、飛行型チームも残るは一機だけだった。

メダロットによる球技、略してメダボールのルール制定などにあたり、二毛作タイヒがこんな意見を出した。

「メダロットらしい物も取り入れたらどうだ？ただのラクロスなど、

面白味に欠ける」
　二毛作タイヒは単に腕を使うのではなく、メダロットのパーツを使って試合してもどうかと言った。しかし、二毛作社長の意見に反対する者は多かった。投げるだけなら、問題無い。だが、メダロットのパーツによる攻撃ルールを加えたらロボトルと何ら変わりなく、ラクロスの道具が持ち堪えれそうにないし、ルールも複雑化する。
「君たち、もう少し頭を捻ったらどうかね？それなら、耐えられる道具を作ればいいだけの話だ。そして、メダラクロス用の新ルールを作ればいい。メダボール用のボールを作り出せば、きっと利益になる」
　細かなルール制定に、メダボール用のボール開発も同時に進められた。半年の歳月をかけてルールを作成し、そこから更に一年と三ヶ月も費やして、念願のメダラクロス専用ボールが完成した。
　特性ラケットはメタルビートルのミサイル、ヘッドシザースのソードを物ともせず、ボールはロールスターの頭部の強烈なレーザーに耐えた。
　メダロット社はメダロポリスの名門小学校花園学園に、メダボール宣伝のための公開試合をしてくれないかと依頼した。一件目での返事は無いと思われていたが、学園長は一つ返事で良いと答えた。花園学園は二毛作社長の出身校であり、現学園長は社長の学友であったからだ。文部省の役人に沢山のマスコミの立会いの下、花園学園六年生所有のメダロットによる二種のメダボール球技が行われた。
　試合後日、全国からメダボールルールブックにメダボール専用用具の注文が殺到した。二毛作はすぐに発売はしなかった。文部省からの通達がないからだ。二週間後、文部省の通知が届いた。社長が皆の前で通知の手紙を開く。
　ざっと文面を読むと、社長は重役の一人に尋ねた。
「注文件数は？」
「学校関連だけでも、既にボール二千個分以上の予約注文が来ております」

社長が不敵に微笑む。社員一同は文部省の通知を読まずとも、社長の表情だけで書かれていることを理解した。
「一ヶ月後の発売にも併せて、工場はフル稼働だ！これから忙しくなるぞ！」
社長と社員による一斉啖呵がメダロット社中から木霊する。こうして、メダロットの世界がまた一つ拡がった。

ギンジョウ小学校ではメダロット関連の行事が二つある。一つは、四月中旬に行われる校内ロボトル大会。そして、二つ目はメダロットの運動会だ。
メダロットによるスポーツといえば、メダロードレース、メダボール球技の二種のみ。ギンジョウ小学校にはメダドッジ用の道具にルールブックは無く、メダロットによる球技はメダラクロスしかできない。ラクロスは何かと細かいルールが細かいので、小学生たちにはメダドッジ用のが欲しかったというのが本音。だが、やってみると意外にも嵌まり、そんじゃそこらの大人よりラクロスの知識については詳しくなった。
どの学年がどのスポーツをやるかは、学校教員の会議で決まる。体力面を考慮し、一、二年生は六月末、三、四年生と五、六年生は七月の初旬に行われる。
真夏にスポーツ大会はどうかと思われるが、するのはあくまでメダロット。人間は応援役兼監視者。それに、ソーラーシステムを組み込まれたメダロットたちにとっては秋の曇り空よりも、日差しが強い真夏日のほうがかえって調子が良い。
今年の三年生はメダラクロスに決定した。原因はオトコヤマ先生と畠田先生の二人に起因する。
二人は昔、バスケ部に所属していた。バスケとラクロス、球技という点を除けばあまり接点は無いが、実は二人は中学校から高校に

かけて同級生だった。そのとき、女子ラクロス部には男子の憧れともいうべき高嶺の花が存在した。二人がその高嶺の花に告白した結果、相手は畠田先生を選んだ。理由は、爽やかスポーツ青年のほうがお好みだからしい。どうでもいいが、二人は一年の交際を経て破局した。

いやいや、その憧れの人を取り合う前から、二人は何かと衝突しており、何の運命の悪戯であろうか、オトコヤマがギンジョウ小学校教員に任命されたら、畠田先生も同時期に教員として来たのであった。

表面的には素振りすら見せないが、二人の奥底には互いに負けず譲れぬ闘争心が今も燃えている。

その畠田先生クラスには、かの悪名高いスクリューズがいる。いつもなら、二人の闘争心に辟易するが、今年は事情が違う。

番格的存在で、特にメダロット関連で痛い目を見た三年生は、せめてメダスポーツぐらいでもスクリューズをぎゃふんと言わせてやりたいと燃えている。そんな訳で、今年のメダロット運動会の三年生は一部を除き、担任に生徒も大いにやる気満々。

校内ロボトル大会で辛酸を舐めさせられたイッキ、アリカ、ロクショウも雪辱を果たす絶好の機会がきたと浮き立った。

七月三日月曜日。三年生によるメダスポーツ大会。

校内ロボトル大会と比べれば、いささか盛り上がりに欠けるが、幾人かの保護者の姿が見受けられる。

「ロクちゃん、頑張ってね」

応援するイッキママの右横には、オニェカチの母親スージ婦人もいた。オニェカチは特別許可を貰い、カミキリムシ型メダロットのアルコをメンバーとして連れてきた。

一回戦の対戦相手はガリ勉イメージが強い三年二組。だが、メダ

ロッター自身の運動神経は大したことはないが、それとメダロットの扱いは別だ。二組の腕前は全くの未知数。
男子ラクロスを例に挙げれば、人数は一チーム十二人まで。メダラクロスでは、プラス五体で十五対十五で試合する。
メダラクロスのルールとして、各チームのメダロットは頭部、右腕、左腕パーツのどれか一つを一回限り使用可能。そして、出来る限り相手メダロットに当てないよう注意しなければならない。相手を傷つけてしまった場合、故意と判断されなければその機体は試合続行が可能。
メダロットの扱いが上手いと見られたイッキは、ロクショウ、光太郎の二体を出場させることになった。イッキは光太郎の両腕をチャーリベア、脚部をヒパクリトに替えた。
「皆、ファイトね！」
補欠のオニェカチとアルコが声援を送る。
オトコヤマが審判として中央に立つ。
「スポーツマンシップに則り、まずは正々堂々挨拶からだ。メダロットとて、それは変わりない」
互いのメダロットが挨拶を交え、オトコヤマのホイッスルで試合開始。
ガリ勉というだけあって、きっとメダロットたちの操作は巧みだと予想していた一組であったが、そんなこともなかった。
蓋を開けてみたら、二六対一。二十五点差で圧勝した。ペットは主人と似るというが、二組のメダロットたちの動きはてんでばらばらで、気持ちいいくらいシュートが決まった。
Vメダロットたちに応援するメダロッターたちも、互いの手をタッチした。この分だと、四組スクリューズ相手にも勝てる。
イッキ以外はそう考えた。だが、四組対三組の試合を見て目を疑った。スクリューズはロボトル以外でも強かった。セリーニャ、ブルースドッグ、鋼太夫。この三機が当然四組を牽引する形となり、三組の試合に挑む。

結果、三十対四と、二十六点差で勝利。ゴーリーの鋼太夫がシュートを跳ね返し、ディフェンスのブルースドッグの守り、セリーニャのすばしっこい動きに相手はタジタジ。
「……ロボトル以外でも強えなあいつら。やっぱ、難しいかな」
「そんなこともあるまい」
耳ざとく聞きつけたロクショウが反論する。一組の生徒とメダロットがロクショウ、金衛門の周りに集う。
「そんなこともあるまいって…。根拠はあるのか？」
「お主ら、試合をよく見ていたか？」
「何って…スクリューズが中心となって活躍していたなって」
「確かにそうだ。だが、他のプレイヤーはどうであった？」
ロクショウの言うことがまだ分からない者もいたが、大体の者は気が付いた。
「…そういえば、セリーニャ、鋼太夫、ブルースドッグ以外の奴は、あまり動きが良くなかった」
「そう言われれば、そうだな」
「あと、勝ったとき残っていた機体はあいつらの三機と、運良く残った感じのが二機ぐらいだったわ」
「んで、わいらは？」
光太郎の問いに、鈍い者もようやく悟った。イッキが応える。
「僕たちは連携が取れていた！」
「そのとおりだ、イッキ」
ロクショウが満足そうに頷く。
「いくら強くても、あやつら三機を一つとすれば。四組はただのワンマンチーム。しかも、四組はスクリューズに従っている感じであり、チームワーク自体は取れてない」
光太郎がロクショウの台詞を先取る。
「つまり、相手がどんなに強力なワンマンチームやろうと。こっちゃ普通にチームプレイすれば、勝てへんわけ無い！ちゅうこっちゃ」
「…それは、私の台詞だ」ロクショウがささやかに文句を言う。

試合前の敗色雰囲気を、ロクショウ、光太郎は掻き消した。一組一同のやる気が点火。その光景を見て、「青春だー！」と感涙でむせるオトコヤマ先生。
「応援してるよ、アルコ」
「任せてください」
この試合では、アルコをオフェンスとして出場させた。機体構造的にアルコのほうが交代選手より優れているせいもあるが、日本最後の想い出として、オニェカチたちを出場させて、優勝を飾ろうという一組の想いもある。
「あらあら、お高いメダロットだこと。傷付かないよう注意するこったね」とキクヒメ。
「へっへ。俺らがロボトルしかできないお思いなら、そりゃ勘違いも甚だしいさ」とイワノイ。
「うんうん。洗濯ミスだね、ほんと」とカガミヤマ。
そのスクリューズの野次に対し、アルコは挑戦的に三人を睥睨する。四組と試合開始！
試合は初っ端から白熱した。一点を取られれば、お返しに一点入れ返す。二十五分まで双方七点。実力は同格。
試合が動いたのは、ハーフタイム残り時間六分の時。セリーニャがボールを弾いた際、近接していたアルコが感電した。反則かどうか教員同士の協議結果、セリーニャはルールに反してないと判断された。
腕や頭の隙間から煙が洩れるアルコ。そのアルコを見て、尋常ならざるショックを受けるオニェカチ。イッキや他のクラスメイトが慰めるが、オニェカチの震えはどうにもとまらない。仕方なく、アルコを選手交代、体調を崩したオニェカチはスージ夫人に連れられ保健室へ。
キクヒメの得意そうな笑み。これを見て、一組生徒、特にイッキ、ロクショウは燃え上がった。
そこから、一組、特にロクショウは反則すれすれの猛攻を仕掛け

てきた。あまりの気迫、そして、スクリューズの反則に怒った一組は益々一致団結を固め、残り時間一分、十対八となった。
　このままでは終われない。ロクショウは、一矢報いる形でいいからこらしめてやりたいと考えていた。そこで、ブラスや他のメダロットに相談した。残り三十秒、ロクショウは他の者たちに迷惑をかけることを承知で、左腕パーツを使用した。
　セリーニャ、ブルースドッグが固まり、ボールを取ろうとしたところを、ばっきーん！
　二体はどうと仰向けに倒れた。
「反則だ！」
　キクヒメが高らかに抗議を申し出た。試合は一時中断。一組、四組の生徒は固唾を飲んで見守る。担任同士の協議の結果、ロクショウは退場。負傷したセリーニャ、ブルースドッグは交代。主力二人が抜けたことにより、四組はかえって肩の荷が降りたようだ。後二十秒にも関わらず、良いチームプレイをして、懸命にボールに食らいついたが、惜しくも一点差で敗北した。
　試合は十対一で一組の勝利！反面、ロクショウはうなだれていた。
「…済まぬな、イッキ…。我ながら、大人げないことをしたと自覚している。しかし、私は耐えられなかった。前のおどろ山のコソ泥紛いの件といい、一度でいいから、あやつらの伸びた鼻の下をひっぱたいてやりたかったのだ」
「僕もだよ、ロクショウ。でも、次は正々堂々打ち負かしてやろうな」
「無論だ」
「辛気臭い話は終わりでっか？」
　光太郎がさり気無い感じで間に入る。
「ほら、今は盛り上がりましょ！」
　同三年生たちに、試合を観戦していた他の学年からも拍手喝采が贈られる。四組の生徒からも「あいつら歯軋りしていたよ。一度、あいつらをぎゃふんと言わせてやりたいと思っていたんだ」と言う

者が出る始末。応援席のメダロッターとメダロットたちがやんや、やんやと歓喜する。
一方、オトコヤマ先生と畠田先生。オトコヤマ先生は畠田先生を小馬鹿にするようなことは一言も言わず、黙って互いに握手を交わした。
「次の人間による運動会では負けませんぞ」
「こちらとて」
爽やかなスポーツマンシップに則った行動の裏では、互いに火花を散らしていた。

＊――――――――――――――――――――――――――――＊

オニェカチ・ウチェボがギンジョウ小学校に転校してからはや二ヶ月。光太郎の計らい、イッキ、アリカとの触れ合いもあり、オニェカチは徐々にクラスや学校に馴染んできた。それはいいとして、一つ疑問がある。この前のメダスポーツ会のとき、損傷したアルコを見たオニェカチの態度だ。
自分の愛機が傷付きショックを受ける気持ちは理解できるが、あそこまで震えるとは尋常。探りを入れても、オニェカチ君が答えたがらないので、イッキもそれ以上の追及はよした。
クラス一同のお別れ会の前に、オニェカチは少数の友人と最後に遊びたいと望んだ。夏休み二日前、移転三日前、タチヤーナはイッキ、アリカの二人を自宅に来ないかと誘った。
「来てくれる…イッキ、アリカ」
イッキ、アリカはもちろんだと返事した。オニェカチはイッキと

同じ地味な部類に入る男子だと、短い付き合いながら分かった。どこかイッキと通じるところもあり、イッキとオニェカチはよく雑談した。二番目に、度々イッキと絡むアリカと仲が良かった。

オニェカチの家は赤煉瓦塀で囲まれた、右寄りに窪んだ箇所がある真四角な形の白い家だ。窪みの上は窓、区切るように小さな雨避けがあり、その下に表玄関がある。黒く塗られた鉄柱門越しから、様々な家庭菜園が育てられている。通路状に沿って向日葵も植えられていた。

アリカがインタホーンを押した。どなたですか？と、少々年配らしき女性が応じた。オニェカチの母親、スージだろう。

「ウチェボさんですか？私たち、オニェカチ君のお友達です。今日、オニェカチに誘われてきたのです」

「オニェカチのお友達！…オニェカチ！お友達が来たわよ」

インタホーンの向こうから、どたばたとオニェカチらしき足音が階下を降りる。ガチャリ、オニェカチが扉を開けて、勢いで段差も飛び越した。オニェカチはささっと門に寄り、門の鍵を開けた。

「来てくれてありがとう！イッキ、アリカゆっくり寛いでね」

二人を招き入れたら、オニェカチは門を施錠した。

「する必要あるの？」

「日本は安全だけど、ママやパパは用心に越したことはないからって」

「それにしても、見事に育ってるね」

イッキは庭を埋め尽くす家庭菜園を見て言った。夏の日差しと栄養たっぷりの葉土に根を張り育った野菜はどれも活きがよさそうで、ナスやトマトはぷりっぷりに丸く膨らんでいる。

「ママの趣味なんだ。…明日には、パパや業者の人と一緒に片付けなきゃいけないけど」

三人揃って玄関戸口に入ると、微笑むスージ夫人と渋い深緑の色合いのカミキリムシ型メダロットのエイシイストことアルコがイッキ、アリカを歓迎してくれた。オニェカチが夫人とメダロットを紹介する。

「もう知っていると思うけど、こっちはママ。そして、この子の名前はアルコ」

「こんにちわ！どうぞ、寛いでくだされ」

アルコというエイシイストはぺこりとお辞儀した。アルコの声もまた渋めで、声だけ聴けば、きっと三十路ぐらいの厳格な軍人を連想されていただろう。イッキ、アリカはスージ夫人とアルコに挨拶を交わした。

二人はオニェカチと共に二階に上がる。

既に準備は終わっているのだろう、オニェカチの部屋はダンボールで囲まれていた。

「何して遊ぶの？それとも、外でロボトルする」

部屋を見回しながらアリカがオニェカチに聞く。オニェカチは嫌々と首を縦に振る。

「ちょっと…ロボトルは…」

「あっ！親から許可ないと駄目何だっけ」

「それもあるけど……」

「オニェカチ君。オニェカチ君って、どうしてロボトルとかを避けるの？ロボトルがそんなに嫌いなの？」

イッキは思い切って尋ねてみた。オニェカチが身を固くする。イッキはすぐに態度を改めた。

「ごめん、話したくないんだよね…」

「…いや、いいよ。これも何かの縁かもしれないし…。…でも、心して聞いてね」

イッキ、アリカは思わず正座した。オニェカチはベッドや椅子に座るよう促すが、二人は断った。オニェカチも床の上で胡坐をかいた。

今日ほど、イッキは自分の迂闊な口を呪った日はない。
オニェカチはナイジェリアに居たとき、親がイスラムを信仰する友達がいた。彼は貧乏、オニェカチは金持ち。だが、当人たちはそんなことを一向に気にせず、暇があれば遊んだ。ある日、オニェカチはいつも通り彼と表通りの目立つ場所で待ち合わせたが、彼はその日来なかった。次の日も、その次の日も来ない。おかしいと思ったオニェカチは、親に断りなく友達の家まで向かった。彼の家はオニェカチの家よりずっと小さく、次男の彼を含めて五人も兄弟がいた。
オニェカチの訪問に、一家は顔を不快感をあらわにした。オニェカチの親族はキリスト系を信仰する家柄、その為、彼の一家は彼とオニェカチが付き合うことを快く思っていなかった。
オニェカチが彼はどこに居るのと尋ねると、十一歳になる長男がいきなりオニェカチの胸倉を掴んだ。
「お前のせいだ！お前が、仲良く付き合わなきゃ…！」
長男は母親に頬をはたかれた。焦るオニェカチに、彼の母親は忌々しげに口を開いた。
「もう、金輪際こないでおくれ！あんたが来ないだけで、うちらはまだ幸せに暮らせるもんだよ！」
彼の母親は凄まじい勢いでドアを閉めた。その母親の態度に、オニェカチはまるで自分が我が家から追い出された気分を味わった。
数日後、彼が帰還した。ただし、死体となって。
オニェカチはこっそり家を抜け出し、彼の家を目指した。人だかりを掻き分けて見えた物は、血がべっとりついた白い一枚布が被せられた何かだった。立て続けに眩暈、吐き気をもよおした。
後に知ることだが。内臓が抜き取られていたので、恐らく、臓器売買の類を目的とした強盗殺人だろうと判断された。
そんなことより、父親を除き、彼の一家はオニェカチにも責任の一端があると思っているようだ。息子がキリスト信仰系の子供と付き合っている。そのせいで、息子が殺された。母親は今回の事件は

イスラム過激派と無関係なことは頭では理解していても、オニェカチを見るとどうしても憎しみをぶつけられず、周囲のまことしやかな会話と母親の態度を見て、他の兄弟はオニェカチに責任があると思い込んだ。

以来、オニェカチは両親から極力外出を控えるよう命じられた。そんな折、転勤の話が舞い込んだ。父親は息子の安全を考えて、妻と子と共に海外移転した。単に、多文化経験させる目的ではなかったのだ。

そうして、今に至る。

オニェカチは口を閉ざした。語り手、イッキ、アリカ、メダロッチ越しから会話を聞いていたメダロットたちも、皆一葉に口を閉ざした。

何となく知っていた程度のこと。自分たちとは関係ない事柄。ニュース、学校の授業で何気なく耳にするぐらい。今までそう思っていたことを、実際に経験した者から語られると何も言えない。

学校の授業では表面を繕った小奇麗な文章を読み上げればそれで済むが、いざ、その当事者を前にして、イッキ、アリカは言うべき言葉を思いつかない。

それでも、口を開かないと始まらない。イッキは、導火線に点火する思いで口を開いた。

「……ロボトルが嫌なのは、何というか。その…」

「重なっちゃうんだ。違うとは分かっているけど、メダロットが傷付く様を見ると、…あの、あの血布から浮かび上がった彼の形を思い出してしまうんだ……自分でもよく分からないんけど…」

オニェカチは嗚咽を漏らした。二人とメダロットたちは何も言えなかった。

つー…。イッキも涙を流した。何故かはわからない。同情ではなく、泣くしかなかった。

「えぐ…ごめんよ、オニェカチ君。話したくないこと話させちゃって…ごめんよ、うぐ」

何でか知らないけど、アリカも涙目になった。オニェカチも二人もまだ九歳。周囲に流されやすいのもあえたり前かもしれない。
涙ぐむイッキを、オニェカチは逆に慰めた。
「泣かないで、イッキ。僕が勝手に話しただけだから」
「…でも…」
「ううん…。それに、日本に来てこのことを話せるのは君とアリカが初めてなんだ」
「えっ？」
「最初に、次の学校でも、親しく話せる人はいなかったんだ。このまま、ジャパンでは誰とも友達にならなくていいやと思っていた…。そんなとき、君の光太郎のお陰で僕は君らと話し合えた…。こんな言い方は変かもしれないけど、話したくないこと話せるほど、僕はイッキ、アリカに君らのメダロットたちと親しくなれたんだと思う」
イッキとオニェカチが見つめ合う。言語、習慣、文化、経済、国。あまりにも違いすぎるし、世界全てと手を繋ぐなんて所詮夢。ただ、ここにいる二人はもう、それらの垣根を超えていた。
さて、ここは精神年齢が上の私がしっかりしなくちゃね。気を取り直して、アリカはぱんぱんと頬を張る。そのアリカを見て、二人は訝しんだ。
「さ、互いに腹を割ったようだし。とにもかくにも気分を変えて、何して遊ぶ？」
三人は外へ出た。オニェカチが母親に許可を貰い、アルコも連れてきた。息子が言わずとも、スージは今日、オニェカチが友達と呼べる者たちいるのを知り、喜んだ。
イッキが隠れ鬼ごっこをしようと言った。
「隠れ鬼ごっこ？かくれんぼなら聞いたことあるけど、それ何？」
遊ぶ前に、アリカは隠れ鬼ごっこのルールを手早くオニェカチに説明した。
二人を気遣い、アリカが鬼役を買って出た。
「光太郎、大空飛んで隠れるのなしね」

「はは！ばれてもうたか！」
イッキは光太郎の脚部をヒパクリトの物に替えた。アリカが公園の樹に顔を伏せて、数を数え始めた。
ブラス、光太郎、ロクショウはばらばらに。イッキ、オニェカチは連れだって隠れた。
アリカがひっひと怪しく笑いながら忍び寄ってきた。
「…ひっひっひ。悪い子はいねがぁ、悪い子はいねがぁ」
アリカのなまはげ演技に、イッキ、オニェカチ、近くに隠れたロクショウは笑いを必死に殺した。
こうして、陽が暮れかかるまで、三人と四機は精一杯貴重な時間を遊びに注いだ。
帰り際、オニェカチはそれぞれの顔を見つめ、順番に握手した。
「短い間だったけど、僕、楽しかった…。イッキ、アリカ。…また、いつかどこで会えるといいね」
オニェカチはイッキ、光太郎とはがっちりと握手した。

夏休み前日のお別れ送別会の次の日、夏休み初日。ウチェボ一家は早朝、アメリカへ向かってフライトする。
今まさに車で飛行場へ行こうとする一家に、数名の一組生徒が最後のお別れに来た。正真正銘、オニェカチは最後のお別れの挨拶を交わした。直前、イッキがオニェカチにアーマーパラディンの左腕を、アリカシアンドッグの脚部をオニェカチに渡した。
「エイシイストは高威力を得る代わりに装甲を犠牲にしているから、これがあれば少しはましになると思うよ」
「過分なお心遣い痛み入る」
社内からアルコが格式ばった礼を述べる。ロクショウと馬が合うかもしれない。
「ありがとう、イッキ、アリカ…。大切にするね。あと、イッキ」

「何だい？」
オニェカチはこうささやいた。
「アリカを大切にしろよ」
イッキはなんのことやらと首を捻り、アリカは一瞬赤面した。
車のブラインドから、オニェカチが手を振る。車が見えなくなり、他の者が帰っても、イッキ、アリカに、二人の愛機三機はしばらくそこに立ち尽くした。
ナイジェリア、日本。普通に暮らしている自分たちには考えられないような移動生活のオニェカチ。今後、彼がアメリカどういう人生を送るかは分からない。こんなことしかできないが、二人は考えられる限りの贈り物としてパーツをオニェカチにあげた。
アリカが、目と鼻の先まで顔面をイッキに近づけた。
「な…何だよ」
「じゃ、ラジオ体操でも行こ！」
「うん、いいよ」
イッキは淡泊な口調で返事した。
そんなイッキを、アリカは元気づけるように腕を引っ張っりラジオ体操へ連れて行く。光太郎、ブラスは相変わらずだと苦笑し、ロクショウは暖かな気持ちで二人の背を見た。

9．メダラクロス（後書き）

カブトでも述べたことですが、前半部の下りはおまけみたいなもの。後半が本編。
首を縦に振る動作は、確かアメリカではそれが「拒否」を意味するから。ぶっちゃけの話、ナイジェリアで拒否を意味する動作が分からなかったので、とりあえず首を縦に振らせたのが本当のところ。

次回から、「メダロッ島」編に突入します。二話続いてロボトル描写が皆無だったから、メダロッ島編からはふんだんにロボトル（戦闘シーン）を盛り込むようにします。

10．メダロッ島（初日）

彼はある人からの指令を請けて、メダロッ島へ向かう。
常に微笑む白い仮面を付け、ばさりと漆黒のマントを翻し、彼は愛機と共にメダロッ島へと出発した。

金魚鉢ヘルメットを被り、全身白いアンダースーツを着込んだいかにも変質者な風体の人物が、こそこそと下水道を移動する。見張りらしき者に合い言葉を伝え、下水内部の更に下、密会所があるマンホールに潜る。
ロボロボ、ロボロボ、ロボロボ！
わいわい、がやがやとは騒がず、金魚鉢集団は男も女もロボロボと騒いだ。そう、ここは悪の秘密結社ロボロボの秘密の集会所。上座の太いアホ毛を伸ばした男は団員が集合したのを見やり、立ち上がって簡単な挨拶を述べる。その男を含む上座に座る四人だけ、何故か全身を黒いアンダースーツで身を包み、頭には先が丸っこい二本の角を生やしていた。
四人の中でも一際大柄の男は傍目から見ても、明らかに気を落としていることが見て取れた。大柄の男は、おどろ山にてイッキたちと交戦した、ロボロボ団幹部シオカラであった。おどろ山での失態を、シオカラはリーダーに同格の幹部たちから酷く糾弾されたのだ。
おっほん！アホ毛の男が気取った咳払いをする。
「諸君も既に周知のとおりであろうが。今宵、我々ロボロボ団は例のマル秘大作戦を実行するときが来た。そして、今回の陣頭指揮はサラミが取る」
四人の中でも一番背の低い、おしゃぶりをつけたせいぜい五歳から七歳ぐらいの男の子が壇上に立つ。サラミと思しき男の子は、幼

い声ながらアホ毛の男以上に気取った喋り方をした。
「手筈は整っておる。後は、諸君らは工作員として乗り込むだけだ。目下のところ、私は諸君らの報告を受けるだけだ。だが、急を要するときは私自らが手を下す。それは即ち、幹部であるボクちゃ……私が自ら現場に赴かなければならないほどの非常事態である。できれば、諸君らの迅速かつ優秀な働きにより、私自らが手を下さなければならない事態が起きないことを願う。…では、散開！健闘を祈る！」
掛け声と共に、白い集団はゴキブリの如き速さで密会所から一斉に移動した。

オニェカチ君と別れて五日、うすら寂しく思うイッキに追い打ちをかけるように、夏休みのメダロッ島旅行に行けそうにないとパパは言った。
「言い方が悪かった。正しくはメダロッ島には一緒に行けないだけだ」
「どういうこと？」
「パパはちょうどイッキたちが行く前日には、仕事でメダロッ島へ出張するんだ。毎日は無理だが、イッキがママと滞在している一週間のどこで暇を作るよう上司に頼んだどいたから、滞在期間の間に三日間ほどぐらいなら、一緒に遊んでやれるぞ」
食べている時にも関わらず、イッキは嬉しさのあまり飛び跳ねて椅子からこけてしまい、チドリママに叱られた。
話を聞いていた光太郎がロクショウにこっそり尋ねる。
「ロクショウ、どうや？」
「どうとは？」
「わいな、一度は行ってみたいと思っていたんや。いやー、こうも早う実現するとは…。互いにマスターがイッキやんで良かったな！」

現金な奴めと、ロクショウは苦笑した。

メダロッ島出港当日。イッキはお気に入りの漫画数冊、携帯ゲーム機、母親に読むように言われて無理矢理詰められたズッコケ三人組に十五少年漂流記などの児童文学小説二冊など暇つぶし用の荷物が入ったバッグは自分で担ぎ、着替えのバッグはロクショウに担がせた。ソルティは、ご近所の萩野さんに預かってくれた。

イッキは、チドリ、ロクショウの三人は、萩野おばさんが運転する車で送ってもらった。

メダロッ島の夏休み一般便の出港時間は、朝の八時四五分、十時五十分、十三時二十分の三便に分けて出稿する。イッキたちは最終便の一三時二十分発に乗船する。

「萩野さんありがとうね。お土産ちゃんと買ってくるわ」

チドリ、イッキ、ロクショウは萩野さんにぺこりとお辞儀をした。港に着いた大抵の人は船を見上げた。船の大きさもあるが、鮫をモデルとした青く奇抜な船型が珍しいからだ。メダロッ島運航船、かのシャーク号とはこれのこと。チドリは思わず携帯のカメラで撮影してしまった。

今日はあいにくの曇天。天気予報では台風の恐れはないらしく、船は通常どおり運航。また、一週間の間は概ね晴れと予測された。

チドリはうきうきとする我が子の手をしっかりと握り、船員に乗船券を見せた。

「どうぞ、ごゆるりと船の旅をお楽しみください」

船員のマニュアルどおりの挨拶を受けて、三人は乗船した。

「イッキー！あんたもきたのね！あっ！おばさんもこんにちわ！」

船縁から身を乗り出して元気よく声をかけたのは、アリカだった。そのアリカを、背後から甘酒おばさんが注意した。

入船すると、イッキは、お前らは！と大声を上げそうになった。

それは、お前らと言われそうになった者たちも同じだ。
キクヒメ、イワノイ、カガミヤマ。あのスクリューズの三人も乗船していた。スクリューズに挟まれて、眼鏡をかけた気の弱そうなイワノイの父親がいた。イワノイの父親は天領親子の存在に気づき、挨拶をした。
保護者同士が穏やかに挨拶を交わす中、当の子供たちとそのメダロットの間では、一種の緊迫感が漂った。
そこへ、また懐かしい二人が乱入してきた。
「よう、イッキ。久しぶりだな」
「あら？皆さんお久しぶりです」
右側通路を見たら、カリンちゃんとコウジ、そして、見知らぬ男性と執事っぽい男性がカリンとコウジに付き添っていた。さらにさらに、アリカと甘酒おばさんも加入した。
保護者や一部の者を除き、子供たちの多くはメダロッ島で一波乱起きることを予想した。

ただ一人、ロクショウは船先に佇んでいた。保護者の方々もいるので騒動は避けえたが、どうも嫌な予感がしてならない。メダロットを使用した犯罪を警戒して、セレクト隊もメダロッ島警備に就くと、イッキの母上から聞かされた。
スクリューズ、高名な家柄の親族と思われる例の子供二人、セレクト隊。もしも…だが……これで、ロボロボ団に怪盗レトルトまで現れれば、役者が勢揃いすることになる。
考えすぎだな。単なる杞憂にしか過ぎんだろう。ロクショウが船先からとっくのとうに遠のいた御神籤町を見つめていたら、イッキ、光太郎もきた。
しばらく、じっと遠のく景色を眺めた。これから、一週間はメダロッ島でバカンスを過ごす。イッキや子供たちは楽しみでしょうが

なかったのに、こうして町から離れると、何やら物寂しい感情も湧いた。

メダロッ島バカンス初日は、曇天ながら快適な旅立ちだった。シャーク号のけたたましい気的が鳴る。

１０．メダロッ島（初日）（後書き）

登場人物の視点がころころ変わりすぎたかもしれない。

１１．メダロッ島（初日・二日目）（前書き）

遅れて申し訳ありません。

11．メダロッ島（初日・二日目）

波にゆらゆら五時間、天領一家の居る部屋からでもメダロッ島の島影が見えた。

メダロッ島はシーズン毎に客を分けていて、天領家が選んだ夏休み第一シーズンでは、スタッフを含む総勢一二万人もの大衆が、最小二日から最長一週間メダロッ島に滞在する。夏休みのシーズンでは、外国人のゲストを招いた大規模なメダロットの大会を開催するので、毎年、十万人超えは当たり前。

シャーク号が港に着くまで、子供たちはメダロットとともに甲鈑や船内を探索し、親はのんびりと船室で寛いだ。一時間ほど前から小雨が振り出さしたので、イッキは携帯ゲーム機に興じ、光太郎は何となく漫画を手に持ち、ロクショウはイッキがママに持たされた十五少年漂流記を読書、チドリは小雨が降る四十分ぐらい前から仮眠していた。

そうして時間を潰していたら、船内アナウンスが後二十分で船は港に着くと放送した。

チドリはむっくりと起き上がり、船室内の洗面付きトイレで洗顔して目を覚ますと、イッキに下船の支度をするよう伝え、自身は身近な物をバッグにまとめた。

ぽー！ぽー！

シャーク号は二回汽笛を鳴らし、船内アナウンスが残り五分で港に着くことを告げる。

天領一家に甘酒親娘は下船口近くのカフェで荷物を置いて待機していた。

体感からして船が止まるのに気づく、イッキは何となく外を見やる。中世ヨーロッパの城下町城門を思わせる作りのメダロッ島遊園地入場口が聳え立っていた。チドリは目覚めのコーヒー代金の支払いを手早く済ませ、天領一家は一拍遅れて甘酒親子の背を追う。船

上からでも、既に膨大な人間が港やメダロッ島で動き回る姿が確認できる。
イッキたちが泊まる予定のホテルは、港から海沿いを歩いて二時間ほどのところにある。歩くには遠いので、各施設から送迎用バスが送られる。
混雑した中ではぐれぬよう、チドリとイッキは互いの手をしっかりと握り合った。移動の邪魔になるかもしれないので、ロクショウと光太郎はメダロッチに収納、おかげでイッキはロクショウに割り当てた荷物を持つことになり、重いから早く送迎バスに乗れることを願った。
「メダロッ島タカサゴホテルお泊りのお客様の方々はいらっしゃいませんか？タカサゴホテル送迎バスはこちらです！」
四十代の男性が人混みの中、ざわめきと各施設の添乗員に負けぬぐらい大声を張り上げていた。
二組の親子は群衆を掻き分けて、送迎バス停まで何とか行けた。急ぎ、大荷物だけをバスに詰め込み、イッキは肩が楽になれた。
二組の親子が乗ってから数分後、添乗員の男性が人数を確かめると、バスは発射した。移動の間、イッキは雑談を交わしつつ、シャーク号と港、そしてバスからの景色を眺めた。
十五分ぐらいで、バスはタカサゴホテルに到着した。タカサゴホテルは四階建ての和洋折衷な建築物。天井は屋根瓦、下は薄い水色と賑やかな点々模様が塗られた近代的なビル。
パパが四月頃から、ついでに甘酒母子の分も予約していたホテル。書入れ時に合わせて、ホテルはシーズン対応の大サービス格安宿泊期間を設けた。本来、一週間の宿泊料は親子二人（メダロットは荷物扱い）で十一万二百円もするが、サービス期間に付き、家族学生割引で六万円である。パパは会社が用意したところで眠るから、ジョウゾウパパの宿泊代については実質ただである。
その分、食事やお土産に宴会で元を取ろうという魂胆がある。
雨が本降りとなり、ホテル前の海辺で遊ぼうにも遊べず、ロボト

ルもできない。天領一家は三階の３０５号室、甘酒親子は一つ隔てた３０７号室。まずは荷物を置いた。外は予報どおりの雨。どうせ濡れるから、イッキはすぐにでも海水パンツを履いて海に行こうとしたが、チドリは波が荒れているので危険だと止めた。

部屋の窓から海を見ると、確かに波は荒れていた。が、船が転覆するほどのものでもない。イッキは波に揺られたかったが、母親とメダロッチ越しからロクショウにも止められてしまい、諦めた。

一室の広さは十四畳の広さがあり、二人と二機で過ごすには十分過ぎる空間だった。

テレビで刑事物ドラマの再放送を見ていたら、メダロッチから転送したブラスも連れて、アリカは天領家の部屋に訪れた。ママはアリカが部屋に入ること喜んで許した。

「イッキ、今暇でしょ？だからさあ、一緒に持ってきた宿題片付けない」

「あら、良いアイデアだわね。アリカちゃん」

ママもアリカの言ったことに賛同した。他にすることが無いので、イッキはアリカと宿題をすることにした。ママは甘酒おばさんに用があると言って、部屋を出た。

イッキが持ってきた宿題は一番嫌いな算数の宿題、夏休みの宿題はこれの他に、社会、国語、日記、歴史などがある。イッキは算数、日記、社会の宿題を持ってきた。アリカは社会と歴史に日記。

アリカの場合、嫌いというより好きな部類の宿題を持ってきた。

ロクショウ、光太郎、ブラスが教師役として時に助言を与え、二人の宿題を手伝った。イッキはてんで駄目で、完全にロクショウと光太郎が教師役となり、アリカに「どっちがマスターか分からないわね」と笑われてしまった。

二日目、昨日のうちにバケツをひっくり返した天気は日本晴れ。

九時には早速、メダロッ島遊園地行きのバスに乗った。
イッキ、それとアリカは、この日のために受けられる限りの真剣ロボトルを受けた。目的は実力向上とメダロッ島での限定品を買う為である。
ゴールデンウィーク三日前、メダロット研究所に寄った時、ナエさんから一早く情報をもたらされた。メダロッ島夏休み第一シーズンにて、ヴァルキュリア型メダロットのプリティプライン三十式、人魚型メダロット・ピュアマーメイドの後続機メイティン四十式が、ティンペットと抱合せで計百体が限定販売されるという情報だ。
両機体は今年の一月に新発売されたメダロット。値段は高く、プリティプラインは八万円、メイティンは七万円、それに四万円もする女性型ティンペットも買えば、実際は十二万円と十一万円のお値段が付く。
その両機体が、今年の夏休みメダロッ島夏休み第一シーズンにて、七万円と六万円という破格の値段で売られる。
抽選予約は一万名、インターネットで受付中とのこと。自宅に帰るとイッキ、アリカは即行で抽選予約を済ませた。イッキはママとパパにこのことを話した。両親はイッキが二機目のメダロットを持つことを承諾した。ロクショウが一家の一員として馴染んでいたのも、両親が承諾した理由だろう。
そんなとき、ゴールデンウィークで光太郎を拾ってしまった。ママとパパは悩んだが、一万名の応募があるので当たる訳がないだろうと思った。
だが、両親の思惑は外れ、何という強運。イッキ、アリカはプリティプラインのセットを買える権利が当たった。今更捨てろと言うわけにもいかず、チドリとジョウゾウはイッキが買うこと許した。
「…しょうがなわいね。でも、そろそろ人間の家族が増えてもいいなと思わない」
このとき、ママがパパに対して意味ありげな視線を送り、パパが赤面をして誤魔化すように新聞で顔を隠したのを今でも覚えている。

あれはどういう意味なのかな？
開園前だが、昨日以上に混雑を極めていた。今日の一四時から開催する国外ゲストを招いたロボトル大会の席取りを目的とした客が大半だ。イッキ、アリカは限定商品予約の際にこのロボトル大会の参加申し込みを済ませていた。ゲストの権利として、一枚無料観戦チケットが進呈される。そのため、チドリと甘酒母親の表情は余裕だ。
イッキがチドリの顔を見上げる。
「ねぇ、ママ。大会まで自由に動いていい？」
「そうねぇ…。アリカちゃんと一緒なら構わないわ」
アリカもイッキと同じように母親の顔を見た。
「母さん、私も大会が始まるまでは自由に動いていいでしょ？」
「イッキ君と一緒ならね」
二人の親の承諾を得て、イッキとアリカは改札口はくぐると、まずは一直線に売店を目指した。人を掻い潜り、押しのけられながら、目的の売店に辿り着こうとしたそのとき、待てと何者かが二人を呼び止めた。
他の誰かを呼び止めたのだろうと思い、先を急ごうとしたが、またしても待てと叫んだ。
「一体誰なんだよ？姿を表したらどうなんだ」
イッキの要望に答え、颯爽と花垣を飛び越えた人影。
忍者のような着地姿勢を取るその人物は、黄土色のダブダブのパーカーと緑色のカーゴパンツを履いた、眼光鋭い辮髪頭の少年がイッキとアリカの前に立ち塞がった。
「そこのオトコ！イケメンさすらいメダロッターであるこのリョウ様と勝負しろぃ！」
「はっ！…何言っているの？今、急いでいるんだけど」
「オトコの日本語…もとい、勝負に二言はないっ！メダロット転送ー！」
リョウという少年はイッキとアリカに見せるように掲げたメダロ

ッチから、メダロットを転送した。リョウのメダロッチから転送されたメダロットは、見たことが無い。右手は小さなドリル、左手は大きなドリル、脚部はブリキ玩具のような形をした四つの車輪、頭はキノコの形をした赤い配色で染められたメダロットだ。
イッキが何か言おうとする前に、謎の少年リョウが先んじて二体のメダロットに指令を出した。
「行くぞ、ワサキック！！」
リョウが蹴るポーズを取ると、二体の謎のメダロットが右腕のミニドリルでイッキの足元の土を抉った。削られた土がぴしぴしと服や顔に跳ね返る。
「いったーい！危ないじゃないの！」
「女郎は黙れ！オトコの世界に顔を挟むな！」
この言葉がアリカを怒らせた。リョウに突っかかると思いきや、アリカはイッキの背中を押した。
「やっちゃいなさいイッキ！」
「え…！そんなぁ…」
「何をごちゃごちゃ話している！喰らえぃ、ワッサドリーールッ！！」
今度は左腕のでかいドリルが足元の土を抉り飛ばした。がなるドリルとリョウ少年の大声で周囲は騒ぎに気付き、危ないぞ、他所でやれと文句を言いつつ、暴れる血気盛んなリョウを止めようとする者はいなかった。
「何人たりとも我らの聖戦は止めさせんぞ！」
メダロッチからロクショウと光太郎が声を発した。
「イッキ、私と光太郎を転送しろ。話しが通じそうな相手ではない」
「あないな相手には、ちょいともんだる必要があるさかい」
仕方なく、イッキはロクショウと光太郎を転送した。リョウが不気味に笑い出した。
「ふっふっふ。覚悟は出来たようだな…」
「…出来てないって…」

リョウはさらりと受け流した。
「ふっふっふ…！受けてみよ、我が究極必殺奥義！ビューティ・キィッス！キラキラーン・ムチュー？」
「無茶苦茶だあー！」突っ込むイッキ。
突進するリョウのメダロットたち。応戦の構えを取るロクショウと光太郎。
「こらー！やめなさい！！」
この騒動を仲介にしきたセレクト隊員。全ては、同時に起こったことだった。リョウが振り返り、二体のメダロットもマスターと同じく行動をした。どうやら、リョウのメダロットはリョウと同じ行動を取る、一心同体なのかもしれない。イッキも隊員を見た。だが、ロクショウと光太郎はもう攻撃の手を止められなかった。
硬い金属同士が二回接触する音が響く。一体のメダロットはキノコ頭を切られ、一体は胸部が凹み、二体は同時に機能停止した。
全ては一瞬の出来事だったので、当事者たちには何がなんだか理解不能だった。
たった一つ理解できるのは、形はどうあれ、イッキのメダロットがリョウのメダロット二体に打ち勝った一点だ。
「ほら、これ以上、面倒事に巻き込まれちゃかなわないわ」
アリカがイッキの腕を掴んで人混みに紛れた。リョウ少年はショックで立ち尽くしていた。現場に駆け付けたセレクト隊員がリョウを羽交い締めにした。
「こら！こんな場所で騒ぎを起こすなどけしからん奴であります！設営支部まで一時連行するであります」
そして、二体のセレクト隊御用達メダロット、アタックティラノが器用に二体の倒れたメダロットを回収した。と、リョウ少年が悔しげに叫んだ。
「クソー！次は負けんぞ！！」
「さっさとこい」
群集の隙間から、リョウが羽交い締めのまま引き摺られていく姿

を見届けた。トラブルや余計な証言を避ける為、二人は二十分程度売店から離れた。売店近くのゲームセンターに入り、百円でゾンビを撃つシューティングをプレイ、それからゲームセンター内を適当にうろつき、売店へと向かった。

こちらは外ほどではないが、係員が客を整列させていた。二人は引換券を見せて、列に並んだ。どうやら、自分たちが最後尾らしかった。主に若者やファミリーを中心に、プリティプラインとメイティンのパーツが入った箱、ティンペットBOX、メダルの三点セットを持って店から出てくる。胸が高鳴ってきた。三人目にして、最後の仲間を迎えられる。

プリティプライン一式を買うために、戦利品であるパーツの多くを切り売りするのは惜しまれたが、その惜しさも目的を目前にして消えた。

前に並ぶアリカがパーツ、ティンペット、メダルの三点セットを先に購入。自分も引換券とお金を渡し、さあ、ご対面。そのはずだったが、世の中そうそうイッキの思い通りにはならなかった。

女性店員が非常に済まなそうな顔で言った。

「誠に申し訳ございません。さきほどの方でメダルは品切れとなりました。次回までの入荷は未定となっております」

「そんなぁ。パーツやティンペットも？メダルも一緒じゃないの」

「いえ、パーツやティンペットはお売りいたします。ですが、メダルは別売りとなっておりまして」

「えー！普通、そういうのも一緒に渡す物じゃないの」

アリカがイッキの肩に手を添えた。言わずとも、今は無用なトラブルを避けろと言いたいのが分かった。イッキは渋々、大人しくプリティプラインのパーツとティンペットだけを受け取った。

アリカは嬉しげにシノビをメダルを陽にかざしたが、イッキは溜め息をついた。折角入手しても、メダルが無ければただの人形。動いて会話できてこそ意味があり、そうでなければ意味が無い。かと言って、このまま手放すこともできない。

メダロッチの時計を見た。十時中頃を指していた。こうなれば、僕ができることは一つしかない。
「何がなんでも入賞しなきゃね。確か、三位はメダル、パーツ一式、ティンペットのどれか一つを貰えるんだよね」
アリカはイッキの思考を読み取った。イッキは一応、聞いてみた。
「勝たせてくれるの？」
「まっさかー！前は負けてあげたけど、今度は手抜きなしよ。優勝はこの私とブラスと……えーっと、何て呼べばいいかな？」
「どこか落ち着ける場所で組み立てから、名前を決めましょ」とメダロッチからブラス。
「そうね。というわけでイッキ。大会の間は、ライバル同士よ」
そう言って、アリカは何処へと去っていった。残されたイッキはただ一人、途方に暮れた。…なんだかなあ…。まっ、愚痴を言ってももう手遅れか。こうなれば、やるだけってみるしかないよなぁ…。やるのは、メダロットたちのほうだけど。イッキは俯いまま言った。
「ロクショウ、光太郎。頼んだよ」

メダロット関連の大会を行う場所は、外観は東京ドームそっくりだった。
受付で身分を証明して、選手控え室に入った。控え室内は、黄色人種、黒人、白色人種と、人種の坩堝（るつぼ）と化していた。指定ロッカールームの鍵を開けて、買ったばかりの二点セットや財布などの貴重品を置き、中に敷かれたトーナメント表を見てびっくりした。出場選手の多さにもそうだが、一回戦第一試合の相手は何と、柔らかい金髪ツインテールが印象的な、美少女メダロッターカリンちゃんが相手だった。
反面、コウジやスクリューズのイワノイ、カガミヤマとは大分離れており、幸か不幸か、アリカの一回戦の対戦相手はコウジだった。

キクヒメとは、キクヒメか自分が勝てた場合の話だが、二回戦で当たる。コウジとは、準決勝で相見えることになりそうだ。

ドームスピーカーが、天領イッキと純米カリンに出場を告げた。

１１．メダロッ島（初日・二日目）（後書き）

タカサゴホテルの由来は、日本酒の「高砂」から来ています。
リョウの出現時期がゲームとは異なります。

12．メダロッ島（二日目）

簡素なコンクリートで固められた選手入出用の道を抜けて、大会場闘技台へイッキは大観衆の視線にその身をさらした。観客席の照明は仄か、逆に舞台の照明は眩しかった。少し遅れて、カリンも闘技台反対方向へと回り、おしゃまなお辞儀をした。ふわりと、絹めいた髪とスカートが緩やかに翻る。カチコチに固まったイッキは、意外にも物怖じしないカリンちゃんの態度に、賞賛と軽い嫉妬のようなものを覚えた。

イッキも首と背を小さく曲げた。

「船以来のご対面になりますわね。私、ロボトルに自信はありませんが、精一杯頑張ります。よろしくお願いします、イッキさん」

イッキは返事に困り果てた。緊張していて、しかも、可愛いらしい女の子に一体どう接したものかと迷った。ミスター・うるちが北の通路から姿を現し、観衆と選手に深々と腰を折り、お決まりの前口上を述べた。

と、カリンが何か思い付いたのか。ポンと右手で広げた左の手の平を叩き、ミスター・うるちに来るよう手招きした。カリンはうるちの耳元で何事かと囁き、観衆にイッキも少女と審判の動向に注目した。

「えー。ただ今、純米カリン選手からイッキ選手への提案で真剣ロボトルが要望されました。イッキ選手が拒否する場合、直ちに試合は賭け無しの大会ルールに乗っ取った真剣ロボトルが行われます。イッキ選手、パーツを賭けた真剣ロボトルを受諾しますか？」

「カ、カリンちゃん！どうして？」

「……実は私。コウジさんや仲の良い友達となら遊び程度のロボトルをしたことならありますけど、まだ、一度も真剣ロボトルをしたことが無いのです。…いえ……本当はパーツを取られることよりも、ナースちゃんたちが傷付く様を見たくないがために、これまで避け

てきたのです。ですが、この前の事件に、イッキさんやコウジさんの戦いぶりを見て、私も一度は全力を持ってロボトルを経験してみたくなったのです。…手前勝手な頼みとは承知しておりますが、どうか私の挑戦を受けてくれませんか？イッキさん」

即断ろうとしたが、カリンちゃんの潤ませた真剣な眼を見たら、二の足を踏んでしまい。結局、ミスター・うるちに了承の意を伝えた。

「それでは、メダロッ島ロボトル大会第一回戦第一試合！ロボトルファーイトォ！！」

イッキはロクショウを転送、カリンはプリティプライン…それとも、プリティプラインのパーツを付けたセントナースと表せばいいのだろうか。

「……カリンちゃん…それは？」

「ナースちゃんです。本当はもう一体、シルビアという子がいるのですが。ナースちゃんと比べたら、まだ経験不足なので、シルビアのパーツをナースちゃんに装着したのです」

ともかく、二人と二機は試合を始めた。ナースの鞭のようにしなる電流を帯びたソード攻撃を、ロクショウは難なく回避。ナースは動きがなってなく、真剣ロボトル経験が無いのは本当のようだ。イッキは出来る限り手を抜くよう指示した。

ものの数分間、追って追われるの試合展開が続き。始めは応援していた観客も、真面目にやれという声がちらほら聞こえてきた。

仕方なく、イッキはチャンバラソードで適当に攻撃するよう言った。

かきん…！ロクショウの力無い一撃が、左腕の盾に僅かな跡をつける。

「お待ちください！」

カリンが祈る形で両手を握り、叫んだ。そして、薄らと涙目を浮かべた。なんだよ、なんだよ。あの子、びびっちゃったのかな？こりゃ、次の試合まで待つか。観客から不満気な声が漏れ、闘技台の

選手たちの耳にもしかと届いた。
「…イッキ…手加減しようという気持ちは良いが。ここは、思い切って全力で攻撃しないか？」
ロクショウまでも不満を言ってきた。焦るイッキに観衆を物ともせず、カリンはイッキに訴えかけた。
「イッキさん！……私が最初に言ったことを覚えていますか？私は、真剣ロボトルを要望し、あなたは確かに了承してくれました。…しかし、何なのですか。これは！？イッキさんほどの実力をお持ちの方からすれば、私が全力でお相手するには力不足だとは承知しています。ですが、それらを承知の上で、私のナースちゃんと戦ってくれることをあなたは承ってくれました……。短い時間とはいえ、私が前にコウジさんとのロボトルで見せた、イッキさんとロクちゃんの実力はこんなものでは無いはずです。不承を承知でお願いします。イッキさん、どうか私と真剣にロボトルをしてください！」
切々と、無垢で力強い可憐な少女の訴えかけに戸惑うイッキ。不満を漏らした観衆もざわめきながら、少女の声に耳を傾けていた。
イッキは二度頬を張り、深呼吸すると、決然とした表情を浮かべてミスター・うるちに一声かけた。
「審判員さん。試合中断してご免なさい。これから、戦闘開始します」
事態をどう収集したものかと本部と相談していたうるちは、先ほどとは一変したイッキの表情を見て、本部にはもう大丈夫ですと答え、高々と試合続行を告げた。
「細かな指示は僕に任せて。ロクショウは、自分が思ったとおりの全力アタックをしろ！」
ロクショウは意気揚々に「了解」と言った。
本気を出したロクショウの前に、ナースの攻撃など掠りもしなかった。ロクショウがぴたりと止まる。ナースが横様に切りかかる。
「腰付きや振り方がなってない」
ロクショウは背を逸らした。電流ソードは空しく中を掻き切り、

ナースがバランスを大きく崩す。ロクショウは左の軸をちょんと蹴る、ナースはすっ転ぶ。両足でナースの剣と盾を抑え、右腕で喉を締め、左腕の三本ボトルがついたメリケン、ピコペコハンマーをいつでも降り下ろせる態勢を構えた。

会場一帯は、少女がどう判断をくだすか注目していた。

カリンは挙手し、審判に降参の意を伝えた。ミスター・うるちがイッキとロクショウの勝利を告げた。

「やはりお強いですね。イッキさんとロクちゃんは。…では、約束通り」

カリンはメダロッチから予備用のセントナースの頭部を、にっこりと微笑みながらイッキに渡した。こうして間近で見ると、やっぱりカリンちゃんは可愛かった。

イッキは赤らめた頬を掻き、躊躇いがちにパーツを受け取った。

会場から、青春な青臭い試合を見せてくれた二人に。ささやかな拍手が送られた。

一悶着あるかなと身構えたが、意外にもコウジはイッキを咎めたりしなかった。

「カリンがあんなに積極的にロボトルしようとするなんて初めて見るぜ。…でも…そのお前がお前だとはな……。まっ！準決勝で会おうぜ！」

キクヒメの一回戦対戦相手は、ショーチュー王国という聞いたこともないような小国の王族。キール王子が相手だった。

キール王子は中東風の顔立ちで、インドの貴族っぽい服を着ていた。まだ幼く、イッキより二つ年下だった。頭の金でできた冠が、見る者に彼を、王子様に見えないことも無いと思わせた。

対戦結果だが、試合は一分以内にキクヒメがキール王子の愛機の一機、マッドマッスルに勝利。そのまま次の試合へ……と、ミスタ

ー・うるちは進めたいところであったが、キール王子は激しく喚いた。
「！！！#$?＋KP～：＊＝―（%GBI&…ギィ」
ショーチュー王国独特の言語でキール王子は喚き、泣き、怒った。通訳の日本人男性も同じく、「お…王子様落ち着いてください！トラトラ、ミハラヤマノボレ。ウンヌンカンヌン、パラポロピレ、カクカクシカジカ」と難解な言語で王子を懸命に慰めた。
ここでSPが登場し、通訳とSPが二人がかりでキール王子を連れていった。
一回戦に続いて二回戦もこの有様。観客に運営担当者たちは、先行きを心配した。だが、その後、第一試合と第二試合以外は滞りなく試合が進められた。
後半戦。アリカ対コウジ。イッキはできればアリカの勝利を願った。任せなさい！アリカは無い胸をどんと叩いた。二分後、アリカは笑顔で控え室に帰ってきた。イッキはアリカの琴線に触れぬよう聞いた。アリカは晴れ晴れとした顔で「完敗した」と即答。
「じゃ。私、応援席に居る母さんとチドリおばさんの所に行くわ」
二十分の休憩を挟み、二回戦第一試合。イッキ&ロクショウチームVSキクヒメ&セリーニャの対戦。
今まで辛酸を舐めさせられたが。今度こそはキクヒメとセリーニャに打ち勝つぞと、イッキとロクショウは燃えた。
右腕のパーツを残しておいたトイワールドの物に替えて、二人は試合に臨んだ。
「はっはーん！トイワールドのルアーであたいのセリーニャの動きを封じようってわけね…。甘いわよ。痩せても枯れてもスクリューズのボス、このキクヒメ様がその程度の戦法を見抜けないとでも思っていたの？」
「うっ…」
見抜かれた。が、想定の範囲内だ。ここはキクヒメでなくとも、イッキがやろうとしていることは誰もがお見通しだ。イッキも、セ

リーニャをそう簡単に捕らえられないのは承知の上。ただ、イッキとロクショウはキクヒメのくせ。というかセリーニャのくせに勘づきつつあった。

ペッパーキャットのセリーニャが、電流を爆ぜさせた両腕で殴りかかってきた。ロクショウはハンマーで応戦。一転、二転！セリーニャの華麗なバック転。セリーニャは勢いをつけて回転跳躍。そこを、間合いを詰めていたロクショウはセリーニャの体に右腕のルアーを引っ掛けた。

ルアーを回転させ、そのまま地面に一回叩きつける。そして、ハンマーで頭を殴りつけた。セリーニャの顔半分がひしゃげ、右耳がちぎれた。ピン！横向きに倒れたセリーニャから、メダルがこぼれた。

キクヒメの多少の油断。トリッキーなセリーニャの、数少ない隙ある行動パターン。以前記録していた戦闘パターン例と、予め起動しておいた索敵で、セリーニャの動きをロクショウは分析していたのだ。

あんぐりと口を開いたキクヒメを残し、イッキとロクショウは控え室に戻った。戻るさながら、イッキは右手だけ小さくガッツポーズを決めた。遂に因縁の相手、スクリューズのキクヒメとセリーニャに実力で勝てた。

三回戦前。相手選手のほうからイッキに会いに来た。

「ハアィ！ご機嫌いがが、リトルボーイ」

お腹回りと僅かに胸元が露出した白いタンクトップ、ハサミでちょんぎったかのような太腿の辺りまでしかない短いジーンズ、ボサボサの頭をポニーテールにまとめ、顔を覆うように横幅に拡がった黒いアップラウンドのサングラスを付けた。ボン、キュッ、ボンという表現がよく似合う。グラマラスな黒人美女がイッキに話しかけ

た。
　イッキは思わず視線を逸らしてしまった。相手と視線を合わせたがらない日本人特有の行動ではなく、目のやり場に困ったからだ。
「あら、緊張しているのアナタ？私、ブラジル生まれのシャンデーね。次のアナタのお相手よ」
　イッキはお茶濁しな挨拶を返した。それにしても、色っぽくて野性的だ。同じ大人のお姉さんでも、ナエが社交界の貴婦人だとすれば、シャンデーは都会の荒波を豪快に乗り切る気丈な女性といった感じ。
　あらあら、この子も…。意味ありげに笑い、シャンデーは去ろうとした。立ち去ろうとするシャンデーに、イッキは震えるも力の篭もった声で言った。
「…あの…僕、負ける気はありませんから！」
　イッキの発言に、シャンデーは怪しく艶な笑みを浮かべた。
　あら…ふふ……どうやら、一回戦の女や二回戦のスケベ男と違って、このリトルボーイとの対戦は楽しめそうね。

　シャンデーより遅れてイッキも闘技台にきた。使用するメダロットは光太郎。
　重力系を苦手とするロクショウよりも、滑空する自分のほうが有利に戦えるはずだと、光太郎自らがそう提案し。ロクショウも、ここは光太郎が良いと押した。
　シャンデーの愛機は、サフィオと名付けられたスフィンクスをモデルとしたメダロット、キングファラオ。
　転送したドラゴンビートル光太郎の頭部だけを、ソニックタンクの物に付け替えた。
「フフフ…。キュートなリトルボーイ、お・て・あ・わ・せプリーズ！」

キングファラオが両腕をぶんぶん振り回しながら、空中の光太郎に先制攻撃を仕掛けた。鈍くて重い戦車タイプの脚部のキングファラオの素早い攻撃に、イッキと光太郎は面食らったが冷静に対処し。空振りしたところを、左腕の重力波射撃で脚部を攻撃。が、僅かにへこんだだけだった。キングファラオの脚部装甲の厚さは、全メダロットでも指折りもの。如何に強力な攻撃でも、一発や二発じゃこの装甲は崩せない。

キングファラオのサフィオはもう一回同じ攻撃を仕掛け、光太郎は重力波射撃を浴びせてやった。

当たらないと判断したシャンデーとサフィオは動くの止めて、重たい脚部を砲台とし、接近行動から遠隔攻撃に切り替えた。

砲台としたキングファラオは、三百六十度回転可能な腕、首、胴体を光太郎の飛ぶ方向に合わせて重力波を撃ちまくった。

光太郎も反撃したいところだが、銃口が内よりにあるドラゴンビートルの腕では撃ちづらく。仮に撃てても、相手の重力波に打ち消されてしまう。

一分間、逃げの一手が続いた。イッキはどうしたものかと思考した。キングファラオ並みの威力がある頭のナパーム弾でめくらましをも考えたが、そんな手はあまり通用しそうにないし、一発でキングファラオを落とせる自信が無い。

「くっそ！あの分厚い脚を何とかせえへんとな！」

メダロッチからの通信で、光太郎が愚痴を言った。いや、めくらまし事態が効かないわけではない。要は使いようだ。でも、その使い方をどうすればいいやら…。

光太郎の装甲では一発喰らうだけでも危ないから、無茶な特攻はできない。

悩むイッキに、光太郎が通信を送った。

「イッキやん。こんなときはもったいないと思わず、一発防がれでもナパームをぶち込むべきや！あの硬い装甲を一発じゃ落とせへんやろうけど、活路は開けるはずやで！！」

「一発に賭けるか、めくらましか…。よし！こうなったら、やってみるか」
光太郎は多少、重力波を喰らう覚悟で撃ち返した。そうして、相手の両腕が塞がり、キングファラオが頭部のナパームを撃つよりも早く、光太郎は二発のナパームを発射した。しかし、態勢が悪かったため、一発はキングファラオの手前。一発は、シャンデーとキングファラオ阻むように硝煙が立ち上った。
ヴィィィーン！会場の喚起装置が作動した。
「ノンノン。甘いわね。リトルボーイ。中々エキサイティングだったけど、切り札を無くした以上、アナタの勝ちはノーホープ。サフィオもアナタのトンボさんの動きをそろそろロックオンしたよ！」
グシャァン！
何かが硬い物に衝突した音。シャンデーは光太郎が墜落したと思い、口端を歪めた。だが、メダロッチから愛機であるサフィオの電波が途絶えた。
「ＷＨＹ！？」
硝煙が晴れると、両腕が折れ曲がった光太郎がキングファラオの真上を旋回しており、キングファラオの背部のメダル挿入口が開いて、メダルは地面に転がっていた。
キングファラオの後頭部と顔面は潰されていた。
イッキと光太郎は必殺のナパーム二発を決めてとして使わず、大胆にも二発ともめくらましに使用した。シャンデーとキングファラオ・サフィオの視界を遮り、光太郎は一箇所に自身を砲台として固定したサフィオの頭部を、細い両腕が折れるのも構わず空中から勢いよく叩きつけた。
キングファラオの脚部を破壊するのは到底無理だが、頭部や腕なら別。頭部と腕の装甲は、脚部の半分にも満たない。
「第三回戦、ウィナーはイッキと光太郎選手！」
「イッツアグレート！二発ともめくらまし使うなんて、ワタシでも中々できない。グレイトな大和魂ね、アナタ！」

派手な試合ぶりに会場は大興奮。二人は速やかに控え室へ戻された。
控え室へ戻るとき、シャンデーはイッキの肩に手を置き、そっとほっぺにキスをした。大人の女性の、甘い吐息と情熱的なキス。
「素晴らしいファイトを見せてくれた。せめてものプレゼントよ。ジャ、後半戦も頑張ってね…イッキボーイ！」
シャンデーのとびきりのご褒美に、イッキは控え室に戻ることも忘れて、通路でえへらえへらと有頂天になった。次の試合の選手が、流し目で崩れた顔のイッキを見た。
「…イッキやん。あかんわ、目が眩んでるやろな」
「落ち着くまで辛抱するしかないな」
メダロッチに居る二機は、うら若きマスターが早いとこ正気に戻るのを苦笑混じりで待ちわびた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5680v/

メダロット２　～クワガタversion～

2011年10月4日03時29分発行